

岐 阜 大 学

留学生センター紀要

2013

岐阜大学留学生センター

岐阜大学留学生センター紀要

2013

巻頭言	竹内豊英（留学生センター長）	1
論文編		
【研究論文】		
植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅳ）	太田孝子	3
【研究ノート】		
研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える —先行研究および本学における事例から—	田辺淳子	17
【授業報告】		
初級学習者を対象とする作文授業 —「文章表現A」授業報告—	吉成祐子	29
中級学習者を対象とする読解授業 —「文章理解C」授業報告—	六郷明美	39
年報編（2013年4月～2014年3月）		
1. 日本語研修コース		47
2. 日本語・日本文化研修コース		66
3. 日本社会文化プログラム		69
4. 全学共通教育		70
5. 留学生指導		71
6. 留学生センター年間行事		79
7. 岐阜大学留学生センター・フォーラム「日韓教育交流の軌跡」		86
8. 留学生センター交流ラウンジの利用について		93
資料		
岐阜大学留学生数		95
日本語コース受講者名簿		97

巻頭言

岐阜大学留学生センター長 竹内 豊 英

本年4月より前任者の守富 寛先生より引き継ぎ、留学生センター長に就任いたしました。どうぞよろしく願い申し上げます。

小職、1992年4月に岐阜大学工学部に赴任いたしまして22年が経過いたしました。この間、研究室には海外から多くの留学生や外国人研究者を迎え入れております。現在までに46名が所属し、インドネシアから28名、中国から13名、マレーシアから4名、ドイツから1名を迎え入れております。なかでも、インドネシア西スマトラ州のパダンにありますがアンダラス大学の関係者が多く含まれ、現時点で3名の卒業生が博士後期課程の学生として、1名の卒業生が特別協力研究員として在籍しております。なお、アンダラス大学と岐阜大学は学術交流協定を2001年4月より結んでおります。一昨年および昨年度には日本学生支援機構および本学工学部の支援により、合計6名の留学生をアンダラス大学から短期特定課題受託研修生として研究室に受け入れることができました。3ヶ月ないし1ヶ月の短期滞在でしたが、集中して研究に取り組み、それぞれ成果を挙げて帰国することができました。一方、研究室から一昨年および昨年度にそれぞれ3名および2名の院生をアンダラス大学に派遣することもできました。このような双方向の交流ができたことをとても嬉しく思います。留学を通じて、視野が広がり、異文化理解に大いに繋がったと思います。また、本年4月にはアンダラス大学とのジョイントセミナーが岐阜大学において開催され、アンダラス大学から11名の教員が参加し、盛会裏に無事終了しました。このように、岐阜大学とアンダラス大学との交流はこれまで活発で、今後も継続されることが期待されます。

さて、国が掲げる「留学生30万人受入計画」を目標に、岐阜大学としても今以上に留学生の受入人数の増加を図る必要があります。留学生センターの任務として、外国人留学生のための日本語・日本文化教育、および修学・生活上の指導アドバイスを行うこと、留学生交流の推進に寄与すること、また、これらの分野での研究を推進することなどがあります。目標に向けて留学生センターの果たす役割はますます重要となることが予想されます。

本年度の紀要は、論文1編（太田）、研究ノート1編（田辺）、授業報告2編（吉成、六郷）および年報編、資料からなります。ご執筆いただいた4名の先生、年報、資料をまとめてくださった留学生センターの先生方に心より感謝申し上げます。

論文編

植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅳ）	太田孝子	3
研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える		
—先行研究および本学における事例から—	田辺淳子	17
初級学習者を対象とする作文授業		
—「文章表現A」授業報告—	吉成祐子	29
中級学習者を対象とする読解授業		
—「文章理解C」授業報告—	六郷明美	39

植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅳ）

Research on Korean Female Students Studying the Main Islands of Japan during the Japanese Colonization of Korea (Ⅳ)

太田孝子

要旨：

同志社女子専門学校は、1876（明治9）年、アメリカから派遣された女性宣教師によって開校し、当初から英語で授業が行われるなど、国際色豊かな学校として出発した。キリスト教文化を体験させ、キリスト教的価値観を根付かせることを目的に「寄宿学校（ボーディング・スクール）」による教育形態を用い、寄宿舎内では多様な訓練が行われた。

1910（明治43）年代になると、朝鮮、台湾、中華民国からの留学生が入学するようになり、中でも朝鮮からの留学生が7割を占めた。留学生は教室へもチマチョゴリで出席している。高風京は朝鮮人留学生の中でも傑出した人物であり、女専を卒業後、同志社大学法学部に入学し、さらには同志社から奨学金を得てミシガン大学に留学した。多くの学びや体験がソウル女子大学学長としての職務の中に結実しているが、向学心に燃える学生たちに大きな影響を及ぼす人生を送った。高をはじめ、これまで取り上げてきた留学生たちの生涯を概観し、朝鮮からの女子留学生たちが帰国後に果たした役割を考察することによってまとめとした。

本稿は、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅰ）」（岐阜大学留学生センター紀要2010年号）、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）」（同2011年号）、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅲ）」（同2012年号）の続編である。

2. 4 同志社女子専門学校への留学生

1) 同志社女子専門学校の歴史と教育理念

女子美術専門学校¹（107人）、帝国女子専門学校²（83人）に次いで多くの朝鮮人女子留学生が在籍した学校は、同志社女子専門学校（以下、同志社女専、女専）である。朴宣美の調査³では82人（1912～44年）、同志社女子大学の学校史には94人（1914～44年、予科27人、英文科19人、家政科48人）と記されている⁴。それ以外の国からの留学生は台湾から25人、満州から6人、中華民国から5人であり（計130人）、朝鮮が7割以上を占めていたことが分かる。特に、家政科には1932～36年の5年間に28人が在籍しており、朝鮮からの留学生は無視しがたい存在⁵となっていた。

まずは、多くの朝鮮人女子留学生が在籍した同志社女専の歴史を振り返りながら、キリスト教主義学校における留学生受け入れの特徴を探ってみたい。

同志社女専は、アメリカのウーマンズ・ボード⁶から派遣された女性宣教師A・J・スタークウェザー⁷が京都御苑内の旧柳原前光邸で、1876（明治9）年10月24日に女子塾（「京都ホーム」とも呼ばれた）を開設したことにルーツを置き⁸、法的には「同志社分校女紅場開業願」が認可された1877（明治10）年4月28日を開校日としている（開業願提出は4月23日）。しかし、開業願に付け

られた「学科目（綴字、正音、作文、文法、算術、地理、理学大意、万国史、修身学、裁縫、日本学）」に対して、京都府勸業課が「女紅は勸業授産のためのものであり、女紅場の学科としてはふさわしくない。女学校と改称すべき」と上申したため、同年9月に改称願を提出し「同志社女学校」と改称した。教育理念に即した「よりふさわしい校名に到着した」⁹とすることができる。寄宿生4人、通学生8人、計12人の女学生による出発であった。翌1978（明治11）年6月の「同志社女学校広告」では、「男女の分^{わから}なく学の道の日も離^マべからざるものなりとしろしめす人々の速に女子の入学を促し玉ひ真の樂をゑさしめ玉はんことを希ふになん」と謳って、全23科目を教授すると発表した。開業願に付けられた学科目の他、体操、音楽、英学、点算、度量学、地理書、人身窮理、天文学、心理学なども含まれており、女性にとっての伝統的な科目と思われるものは習字、裁縫、割烹のみであった。程度は不明であるが、創立当初からリベラル・アーツを目指していたことが分かる。女性宣教師スタークウェザー、外国人教師H.F.パーミリー¹⁰、同志社英学校卒業生の宮川経輝と加藤勇次郎が授業を担当し、ほとんどが英語で行われた。卒業生たちは草創期の様子を以下のように、回想している。

学科は一切英語でやらねばなりませんでした故、理屈を憶える前に、先づ第一英語が読めて意味を取って行く事ですが、力の不足の者には是がなかなか大変で、学科を学ぶと云ふより、ただ英語を読むと云ふ事に骨折りましたから、自然、学科の進歩はおそう御座いました。英語を通して学科を学んだのでは無く、学科を通して英語を学んだのであります¹¹。

偶々伊藤公、井上侯等の名士が学校を参観せられ、其度毎に言はれるには、日本も外人が内地雑居する時が来ました。婦人も今覚醒しなければなりません。料理は女中がして呉れます、子供は乳母が育てます、あなた方は唯英語を学びなさい、そして西洋文明に一日一日接して行く事が目下の急務でありますと説かれました。此時から学校当事者も更に英語教育に力を籠め、其程度を高め、日本裁縫の時間は英会話となり、日本習字は英習字と変わりました¹²。

初期の学生のうち土倉政（第7回本科卒）と松田道（1887年同志社女学校3年次にフェリス英和女学校に転校・卒業、再度同志社女専文学科に入学）がペンシルヴァニア州プリンモア大学に留学するなど、早くから留学生の派遣にも力を入れている。

さらに、スタークウェザーによる讚美歌とオルガン教育が早々に開始されていたことも、他校と異なる点である。上記「広告」に「音楽」を挙げて以来、課程表には唱歌、オルガン演奏の指導が含まれたため、学生たちは教会の礼拝等で力を発揮するようになった。中島重千代は1886（明治19）年に卒業後、音楽取調掛（東京音楽学校）に進学している。翌87（明治20）年に音楽の専門家である宣教師M.E.ウェンライトが着任すると一段とレベルアップし、3年制の「音楽科」（別科）が設置され¹³、「発音法、楽譜、唱歌、^{ママ}ラルガン、^{ママ}ピアノ」を教えた。1892（明治25）年に林外浪（1888年本科卒）が「英学及音楽修業之為」米国ロックフェルド大学へ留学し、山口義（1894年普通科、96年本科卒）はイエール大学大学院音楽部に入学、日本人で最初の音楽学校学生となった。松田幸は1898年にボストン音楽学校へ留学し、さらにベルリンへ移り、女性ピアニストのイエドリッカに師事している。

ウーマンズ・ボードの資金により存立することのできた同志社女学校は、当初から国際性を持った学校として出発したのである。

上記のような訓練を受けた寮生たちの多くが、「十四五歳の子供ながら日本帝国に対する責任、

婦人の使命と言ふ事を常に感じ」¹⁴、「卒業後の希望は、伝道師になるとか教師にならうと思ふとか云ふので、決して家庭に這入らうなどと思って居る人は唯の一人も」¹⁵いなかったと述べている。しかし、最初から学校経営が順調に進んだわけではない。仏教・神道など旧来の宗教からの嫌がらせが激しかっただけでなく、古都の住民の中には外から入ってくる異質のものに対する拒絶反応が強く、キリスト教主義女学校に対しては全く冷淡であった。その上、「この国では新島襄でさえ、女性が学校の長になるという考えになじめない」¹⁶という手紙に象徴されるように、女性宣教師と日本人男性教師との軋轢や確執も存在した。このような異文化摩擦を乗り越えるには、かなりの時間が必要だったことも付記しておきたい。

同志社女学校の最も大きな特徴は、「寄宿学校（ボーディング・スクール）」の形態による教育が行われた点にある。女性宣教師たちは「異教の国日本」にキリスト教的価値観を根付かせるためには、教室の授業だけでなく、毎日の生活を通してキリスト教信仰あるいは文化を体験させることが必須だと考え、寄宿舎内で多くのキリスト教的訓練を実施した。1890（明治23）年の寮生の1週間の日程は以下の通りである。

5：00起床後直ぐに10分間の黙思。その後洗面、掃除、朝食準備、朝食等。週の初日である日曜日は9～10：00同志社教会の礼拝出席、13：30からキャンパス内で安息日学校開校、18～19：00讚美歌練習、19～20：00上級生のみ英語の聖書研究とその後30分間の祈祷会、月から金曜日は7：30から30分の礼拝の後、9～16：00まで授業、16～17：00まで運動遊歩（月・金は校庭で体操）、夕食後18：30から30分間寮生のための祈祷会、火曜日は祈祷会后20：00まで「社会に関する談話」の時間、金曜日18～19：00は同志社教会の祈祷会出席、それ以外は毎日夕食後22：00まで自習、土曜日14～16：00は有志で「真働会」を持ち、裁縫・編み物などの手芸をして、孤児教育など慈善事業のための寄付金集め等々¹⁷。

上記のように日程が細かく決められており、すべての集会は女性宣教師と上級生によって指導された。また、食事の準備や時間を知らせるベル係（授業時間も含む）も寮生が当番で担当した。これ以降も、同様の日程が踏襲されているが、寮生たちの回想録から寮生活の一端を引用しておきたい。

生れてはじめて西洋婦人を見た私は、奇異の眼を見張って其婦人を眺めて居りましたが、今日からは斯云ふ人と寝食を共にしなければなら無いと思った時、懐かしい悦ばしい様に思ひましたが、又一方に怖いと云ふ感じも致しました。凡て軍隊式に何事もベルで行動しました。……上級生が室長となって善く世話をした為、一つは秩序整頓した風を作ることが出来たと思ひます。生徒は姉妹のように親しみ合ひました。年長者は小さい人たちに対しては凡て責任を負ふて善く世話をし、着物の面倒迄見てやりました。又、舎監は一人づゝ我子の様に行届いた世話を致しました¹⁸。

同志社女学校には取り立てて書く程の規則は一つもありませんでしたけれども、凡て自由自治の中に互に守り互に制裁為合って、其所に同志社独特の良校風が生まれました。自習時間は午後7時半から10時15分まででありました。此間9時の時計が鳴ると15分祈祷がありまして、又自習が続きました。各室一つのランプの下に4、5名づゝ集まって、百人近い寮生が咳払い一つする人も無い程無言で、唯数学をする石筆の音、英語の辞書を繰る紙の音ばかりが、肅とした静寂を破って居りました。前舎監スタークエーザー先生が遺された良風であったと思ひます¹⁹。

質素にして労働に重きを置き是を尚ぶと云ふ風習は、先生並びに生徒間に養はれてありました。故に何事も自治で三度の膳立は生徒の役目にて、夕の炊事には交代に女中の手伝もしました。此労働を神聖なるものとして尚ぶ習慣は……生徒自身の間に養はれた良習で、是が他校の寄宿舎生活に誇る事の出来る一つの特徴であります²⁰。

先生が洗濯をやかましく注意して、襦袢の汚れ等を見付けられました者は品行点を引かれました。寒中は汲み置きの手も切れる様な冷水で雑巾掛けをさせられ、底冷えの酷い京都の冬に火の気無しで通しました。……夜寝る時には、羽織も着物も一つ一つ畳んで毎夜寝押しをして、朝にはちゃんと折り目の付いた着物を着る習慣をも付けさせられました。髪の毛一本乱れて居りまして小言を云はれましたから、何時も櫛を帯の間に入れて置いて、水鏡で撫で上げました²¹。

同志社女学校に専門学校令による専門学部が発足するのは1912（明治45）年のことである。本科に5年制高等女学校卒業生を標準とした各3年の家政科、英文科を設置し、4年制高等女学校卒業生を対象とした選科を置き、定員を合わせて180人としている。学科目は単に家政、英文を専修させるのではなく、多くの随意科目を揃え、さらにリベラルな教科を配置している。最初の入学生は家政14人、英文22人の計36人であるが、そのうち17人が選科生であった。しかし、同年11月には早くも改正を申請し認可を得た。主な改正点は、予科（1年）、国文科（3年）、各研究科（1～2年）を設置したことであり、生徒数は漸増を続けた。1920（大正9）年には119人が入学、1924（大正13）年の入学者は398人で最大を記録し、専門学部在學生は1923（大正12）年458人、27年（昭和2）年721人である。

1924（大正13）年には、中等学校教員無試験検定校に指定されており、教員希望者の多かった同志社女専にとっては、さらなる充実期をもたらす朗報となった。他方、1921（大正10）年には同志社大学が女子を選科生として入学させるという学則改正を申請し文部大臣からの認可を得、23年には本科学生として女子の入学を認めた²²。この措置により、専門学部卒業生の進学先が拡大することとなった。

1930（昭和5）年には、それまで「同志社女学校普通科」（その後、高等普通学部、普通学部、高等女子部と改名）および「同志社女学校専門科」（その後、高等学部、専門科、専門学部と改名）などと呼称してきたものを「同志社高等女学部」および「同志社女子専門学校」と改めたため、「同志社女学校」の名称は消失した。大正期を通しての各科の発展に対応した措置であった²³。

同志社専門学部が発足した1912（明治45）～45（昭和20）年までの34年間の総入学者は5,567人であるが、そのうち1,513人が卒業しておらず、中途退学者の割合は27.1%²⁴に達する。特に1932（昭和7）年以降は入学者が急減し、中退者が30%を超えたが、その背後にはニューヨークに発する不況の影響があった。逆に1943（昭和18）年からは入学者が増加しているが、そこには女工回避のための選択肢という要素の有無が指摘されている²⁵。しかし、入学者にも動員が課せられ、特に1943（昭和18）年に学徒動員体制が確立してからは勉学の機会が奪われ、さらには「父兄応召」「疎開」「帰国」などの理由により、中退者の増加をもたらしていったのである。

同志社女専への外地（台湾、樺太、朝鮮、関東州）、外国（中華民国、満州国、アメリカ）からの日本人入学者は1912（明治45）～45（昭和20）年間に320人であり、最も多いのは朝鮮からの111人である。日本の植民地支配の展開と戦時下という条件が反映²⁶した数と言えよう。なお、同志社女学校中退者の中には朝鮮の淑明女学校創立に関わり、その後1936（昭和11）年に没するまで

学監（副校長）・理事長等を歴任した淵澤能恵（1882～85年在籍）²⁷がおり、専門学部教授であった柳宗悦、兼子夫妻も朝鮮と深い関係があったことを記しておきたい。

2) 同志社女子専門学校の留学生

1910（明治43）年代になると、日本の植民地であった台湾、朝鮮をはじめ、中華民国からの留学生が来校するようになり、中でも朝鮮からの留学生が7割以上を占めた。中退者はそれに倍する数があったものとみられる。同志社女専の入学案内からは、上述の国・地域からの受験生獲得に力を入れていたことが窺え、それは特に外地の受験場の設置として現れている。朝鮮についてみると、1930（昭和5）年度には朝鮮京城の淑明女子高等普通学校に受験場を設置、同志社女専の受験者には「受験中本校寄宿寮に宿泊する事を得」とし、淑明女高普が宿舎を提供したことが分かる。1940（昭和15）年には新たに平壤公立高等女学校にも設置されている。当時、平壤やその近辺にはキリスト教主義の女学校が多かったが、その卒業生の獲得を目的としたものであろう。留学生の出身校で目立つのは、正義女子高等普通学校、梨花高等女学校、貞信女学校、平壤崇義女学校（以上、キリスト教系女学校）、淑明女子高等普通学校などであり、キリスト教系女学校から女専へのルートがあったものと考えることができる。

朝鮮出身者が最も多かったのは1936年の家政科で、卒業生45人中7人を数え、中退者も4人いた。同年家政科を卒業して就職したのは9人であるが、そのうち4人が朝鮮人留学生であり、いずれも朝鮮の高等普通学校・女学校の教師として赴任している。

世古口まさは3年間寮生活をしたが、朝鮮と台湾出身者と同室であった。友人が訪ねて来るとそれぞれの母語で語り、国際的な学校だと実感したという。休暇には閉寮になるのでそれぞれ帰省したが、短期の休暇には三重県の世古口の家にも同道した。各地方のアクセントの差異は現在より大きかったため、出身地を尋ねられて「朝鮮」と答えても、「青森」「九州」と答えるのと同じ感覚だったという。当時、女専には制服はなく、留学生は教室へもしばしばチマチョゴリで出席した。世古口は朝鮮人留学生の実家から当時は珍品のキムチが送られてきたことも記憶しており、留学生は一般に裕福で、熱心なクリスチャンが多いと感じていた。寮生活そのものがキリスト教的色彩を帯びていたため、そのような空間では留学生たちに対する差別意識はなかったと言う。卒業前に世古口は、平壤、大連、九州出身の3人を伊勢神宮に案内したそうだ²⁸。しかし、朴宣美は、同志社女専の卒業生から聞いたという以下の話を記している。一步女専の外に出た時、朝鮮人留学生がどのように受け止められていたかが伝わってくる話である。

日曜日は伏見の朝鮮人教会に行きました。その時は、できるだけ朝鮮服を着て行こうとしました。その服装で道を歩くと、道で遊んでいた小さい子らが、「あそこに鮮人が来る」と言って寄り集まって来て、わざと私にぶつかったり、笑ったりし……、私をからかいました（留学生T氏談、同志社女専家政科、1935～38年）²⁹。

また、朴は次のような話も聴取している。

寄宿舎に入ると、三年生の先輩らが蜜柑をくれました。私は何も知らず、（蜜柑の）ふくろが薄いから、ふくろをむかないで全部食べましたが、先輩らはふくろをむいて食べていました。そして私に「ふくろまで飲み込まないで吐き出して」って、何回も言ってくれました。みんな、やっぱり朝鮮人だと言われ、蔑視されないように気をつけたんですね。日本人がふ

くろをむいて食べるから、こちらもむいて食べるという話です。……こんな思い出は、まだまだあります。……その人（日本人）がやるようにやることを先輩らが教えてくれたので、そのようにしました。寄宿舎から出かける時、帰ってくる時、玄関でこうしなさいとか、いろんな礼儀とか、とにかく、なにもかも他の人がやるようになって（留学生 I 氏談、同志社女専家政科、1935～38年）³⁰。

留学生はこのような些細なことにまで「日本人のやり方」を守ろうとし、「日本人のようにしよう」と気を使っていたのだが、日本人側は全く気づいておらず、感性の違いは両者の証言からも明白である。

1920年代から英文科は満州・朝鮮へ、家庭科は北海道への修学旅行を実施している。また、女専の同窓会は1893（明治26）年に設立し、昭和初期までには国内外各地に支部が結成され、京城にも設立している³¹。1966年に韓国を訪問した湯浅八郎同志社総長（1934～36年及び1949～50年在職）は、以下のような記述を残している。

聞けば韓国には約120名の同志社卒業生や中退者がある由だが、その中約60名がソウル在住とのことである。その人たちは中学や大学を出た人も女子部の出身者もあるので、現在は男女合同で同志社学園同窓会が組織されており、ソウル女子大学総長の高風京博士（昭和3年女専英、同6年大法卒）が会長……である。当夜の出席者は18名、内3名は婦人であった。それは高会長のほか呉春庚（昭和8女専家）工大教授夫人と金光子（昭和28女専英、大阪在住）さんたちであった。出席者はいずれも現在、韓国の実業界や政界や教育界において指導的な重責を帯びた人たちであって、皆母校同志社に深い関心を寄せておられるのである³²。

朝鮮人留学生は帰国後教職に就いた人が多く、朝鮮戦争休戦後、韓国内で大学院に進学したり、米国留学をした卒業生も見られる。専門学部における最初の留学生は、1927（昭和2）年3月英文科卒業の金末峰（『中外日報』記者を経て作家、また韓国最初の長老派教会女性長老、社会改良・婦人解放活動家としても著名）であり、翌年3月高風京が卒業している。以下に、韓国の高等女学校に関するインタビュー調査でも話題になった高風京を紹介し、その生涯を概観する。

コファンギョン 高風京（1909～2000）

同志社女子専門学校を卒業した朝鮮人留学生の中で、最も傑出した一人が高風京である。高は1924（大正13）年4月専門学部英文科予科に入学し、28（昭和3）年3月に本科を卒業した。卒業記念アルバムにはチマチョゴリ姿で映っている³³そうだ。

高は1909（明治42）年3月、黄海道長淵（現、北朝鮮）³⁴のクリスチャンホームに1男3女の次女として誕生した。父の高明宇は医師であったが、黄海道遂安の金鉉病院に勤務していた頃、同地には女兒のための学校がなかったので、「隠真女塾」を創設して娘や地域の女兒に教育を受ける機会を与えたと言われている。高はアメリカ留学の経験がある父からは英語やオルガンを習い、祖父の高孝崙からは儒教教育を受け漢文を習った。しかし、良妻賢母になるための教育を押し付けられたことはなく、むしろ女性指導者になるよう自由に自分の意志で生きていくことを意図して育て³⁵られたと言う。一歳違いの妹は、東京女子医学専門学校に留学している。

高が同志社女専を選んだ理由は、「キリスト教主義で普通の日本人学校とは違う点があると思ったからであり、外国人教師が多いのでいい英語を学び最終的留学先をアメリカにしていたから」³⁶だった。在学中の成績は上位を維持しており、2、3年次の英文学は柳宗悦に学んでいる。

柳の励ましが大きな力になったそうだ。柳兼子³⁷に音楽を、戸坂潤に哲学を学んだ。在学中の乙保証人は大島正健³⁸である。

高は入学初日から朝鮮服を着用し、その後も洋服か白またはピンクの朝鮮服で通したが、クラスメートは何の違和感も持たなかったという。高はミリアムクワイア³⁹（聖歌隊）に所属し、1927（昭和2）年には同聖歌隊を指導したシャネップ教授・柳兼子に引率され、名古屋と岡崎で行われた同志社女学校校舎改築資金募集音楽会に参加している。注37でも言及したように、高は満州・朝鮮への修学旅行には参加していないが、旅行が迫った頃、予科からの親友竹村（景山）春那に「朝鮮をよく見てきてほしい。同朋の惨めさを直視してきて」としみじみ語ったという。日頃そのような点に触れることのなかった高には珍しいことであり、竹村は「高さんは行かなかった。行くのがきつと辛かったのだろう」と回想している⁴⁰。

1928（昭和3）年、英文科を卒業した高は同志社大学法学部経済学科に入学した。同学部同期の女子は150人中3人で、女専同期の大連からの留学生王秀生が法律科に在籍している。高は社会問題、国際公法、経済学史、英書、仏書などの成績は抜群であったが、選択科目の植民地政策は履修していない。

大学進学後は寮を出て、京都キリスト教女子青年会（京都YWCA）に寄宿した。夜はYWCAで英語を教え、朝鮮人教会で朝鮮語や朝鮮の文学、歴史を教えた。一方で社会事業に関心を持ち、女専時代に引き続き賀川豊彦を尋ね賀川の信仰と事業について学んでいる。このような行動をする高に特高警察が訪ねてくるようになった。それ以前に、八幡市出身の前出竹村春那は帰省の際、下関まで高と同行して関釜連絡船に乗るのを見送ったのだが、高は「あれは警察の人よ、私たちを監視しているの」と竹村に語りかけたことがあった⁴¹ということである。

既述のように、高は日本留学時からアメリカ留学を目指していたが、1931（昭和6）年3月に卒業⁴²すると、同志社から朝鮮人として初の奨学金を受けてミシガン大学に留学した。校友会京城支部は同年7月10日に第一回定期例会を京城青年会社交室で開催したが、この会は高の歓迎と歓送の会でもあったことが、同窓会誌に記されている。

朝鮮人の婦人として母校の最初の法学士高鳳京嬢が8月上旬にさらに鵬翼を張ってミシガン大学へ入学の為め其の歓迎と送るの会を兼ねる事となし、丹羽清治郎氏校友会を代表して迎送の辞を述べ、高嬢は上品なる国語にて感謝の辞を以て我等の好意を謝せられ来会者共に晚餐を共にした⁴³。

高はミシガン大学修士課程では経済学を、博士課程では社会学を専攻し、帰国後の1937（昭和12）年に、「デトロイトで起った少女犯罪の季節的分析」という論文により博士号を取得している。

高は1935（昭和10）～45（昭和20）年まで梨花女子専門学校で教鞭をとった。その傍ら、同女専音楽教授であった姉の高鳳京とともに、京城郊外の農村で児童や青年の教育、住民の無料診療、老人介護などのための施設「京城姉妹院」を設立し、自費と募金のみで運営した。42（昭和17）年には「嬰兒館」、翌年には非行少女のための「京城姉妹院家庭寮」を開設するなど、農村と女性のための社会事業の実践に尽くした⁴⁴ため、高は同地では最初に組織的な社会福祉を行った人物として知られている。

朝鮮総督府は上記のような活動をしている高を植民地統治に協力させようとし、女性の戦時生活や皇国臣民としての心得などに関する地方巡回講演を課した。しかし、講演のほとんどの時間を衛生、栄養など農村婦人の健康や生活改善について費やすのが常だったと言う。そのため、創

氏改名をすることなく本名を貫いたことも合わせ、高はしばしば警察に呼び出されるという経験をした⁴⁵ようである。

高は1945（昭和20）～46（昭和21）年には出身校でもある京畿女子高等学校の校長に就任するとともに、46年春には教育使節団の一員として渡米、9月に米軍政下で保健厚生部に婦人局が設けられると初代局長に就任した。高が校長当時、京畿女高の生徒だった鄭世華氏（1932～）は筆者のインタビューに以下のような思い出を語っている。

高先生は韓国で二番目に外国で ph.D を取った方です。……高校長先生はとっても忙しかったんです。アメリカの占領軍がその時入って来ていますしね。校長先生も UN、国連に行かれるし、世界中に何か会議があって行ったり来たりしていらっしやるので、学校で私たちに姿を見せるということがほとんどありませんでしたが、帰国したら全校生を講堂に集めたんです。そうして、どこに行ってきたか、そこで見てきたのはこういうことであって、世界の女性が今このような生き方をしている、それを「1時間話をしますよ」と集めたのに、3時間も話したことがありますよ。その時私は本当に校長先生の話を受取りました。世界はこのように変わっている、女性はこのようなことが出来る、このような時代になったんだなあということをつくづく悟りましたね。先生は後でますます忙しくなったので、とうとう校長をお辞めになりました。そして、先生は後にソウル女子大学を創立されたんです⁴⁶。

高から大きな影響を受けた鄭はソウル大学哲学科を卒業し、梨花女子大学校教授、京畿女子高校長、女性開発院院長などを歴任、高と似た道を歩んだ。

その後、高はロックフェラー財団奨学金により再度アメリカに留学、プリンストン大学とコロンビア大学で人口問題を研究した。大韓母の会会長、赤十字社組織委員、国民教育憲章制定委員等々の要職を歴任した他、国際的にも活躍、1950年代にはイギリス国連協会の後援により800回に及ぶ講演を行い、アジアと国際問題を語り、韓国文化を紹介した。また、国際教育者大会、国連総会、世界キリスト教大学総長学長会議、アジアキリスト教女子大学女性研究所国際会議等にも参加している。

1961（昭和36）年、韓国長老派教会連合によるソウル女子大学が創立されると、高はその初代学長に就任した。高は大学教育が知的面のみに偏している風潮への批判を込め、知・徳・術を兼備した女性指導者として備えるために、全学生が教室外でも24時間生活教育を行うことのできる生活館教育と家庭管理自習住宅教育を実施した。同校を訪問した湯浅八郎は、学内の様子を以下のように記している。

第一そのキャンパスはすばらしい。清浄清閑な絶好の教育環境である。第二に在学生の数は人格主義教育に適当なものであり、その全寮制とある程度の労働奉仕制とはユニークなものである。第三に教育のコースは多少の偏向があるにしてもいずれも韓国民衆の生活に直結するよう工夫せられ、乳牛や野菜園の実習を課している農村科学科もある。第四に学生は各自が自己批判して修養に努める自己採点制を採用している。第五に学生は週末にはそれぞれ寄宿舎を出て家庭に帰り家族や友人との人間関係を温め、社会の実生活からの遊離を防いでいる。第六に酒や煙草は禁じられているが、学園内のダンスパーティなどにはボーイフレンドを招待できるなど、近代的な雰囲気がある。第七に高総長をはじめ十人の教授とその家族がキャンパスに居住していて常に学生との個人的な接触や指導に努めている⁴⁷。

高は1985（昭和60）年、76歳ですべての公職から引退して名誉学長となった。同志社女子大学

は1997（平成9）年、最高の敬意をもって名誉文化博士号を贈呈した。1970（昭和45）年には国民勲章（冬柏賞）を、1985（昭和60）年には5・16民族賞を受賞している。また、高は『女性と社会』他6冊の著書を世に出している。学者として、キリスト者として列挙しきれないほどの要職を歴任し、多くの人々に影響を与え続けた高は2000（平成12）年に91歳の生涯を閉じた。湯浅が、「同志社がこのような韓国女性を卒業生の中に数えることが出来ることは誇りであり光栄である」⁴⁸と讃えるような生涯であった。

3. まとめ 一帰国後に留学生が果たした役割

これまで、多くの紙面を割いて朝鮮からの女子留学生に関し、留学先である4校（女子美、帝国女専、東京女高師、同志社女専）の留学生受入施策や留学生教育の状況を概観し、各校で学んだ7人の留学生の生涯を記すことによって、「留学」が各人にとってどのような意味をもたらしたのかを探ってきた。各人にとって「留学」が与えた大きな意義は既述した通りであるが、本章では、留学生が帰国後にどのような役割を果たしたのかを考察することによって、植民地下にあった朝鮮人女性にとっての留学の社会的意義をまとめておきたい。

まず第1に、羅蕙錫（女子美術専門学校卒業）⁴⁹に代表されるように、特に初期の女子留学生は帰国後、独立運動や女性運動のリーダーとして活躍、3・1運動等を指揮しただけでなく、その周辺に集う女性たちを啓蒙し、男女同権や女性の社会進出等の新思潮を伝播する役割を果たした。青鞜の影響を受けた羅蕙錫が関与した「血誠団愛国婦人会（後、大韓婦人会）」の趣旨書及び会則にも「人権を求め国権を回復する最大の目標に向かって前進したい」という文言となって表れている⁵⁰他、小説や評論、雑誌（『女子界』『學之光』など）を通してその意識・思想が流布されていった。本稿では触れなかったが、女子留学生の中には3・1独立運動に参加した金マリア（女子学院高等科卒業）⁵¹、女性労働運動や労働運動論を研究して帰国後に「中央女子青年同盟」を結成、翌年には女性統一戦線組織である「権友会」⁵²のリーダーとなった黄信徳（日本女子大学校社会事業学部卒業）⁵³も留学中にその意識や思想を成長させ、帰国後、朝鮮の女性運動の指導者になっていった人たちである。このような人たちの努力によって、徐々にではあるが、社会全体としても女性が置かれている状況を見直し、女権意識の目覚めへとつながっていったのである。

第2に、女子留学生は文化の先導者として朝鮮社会に影響を及ぼす存在となった。女子留学生が日本から持ち帰った珍しいモノ・商品、図書、洋服などは、大多数の朝鮮の人々には手の届かないものだったので、直ちに生活の中で摂取・消費できたわけではなかったが、知らず知らずのうちに、家族や住民たちに影響を及ぼすことになった。住民たちが女子留学生の身体から滲み出る新しいもの、異質なものに反感を持つにせよ、好奇心や好意を寄せるにせよ、「日本」や「日本近代文化」を身近に感じるようになり、何らかの形で影響されていった⁵⁴と言える。その範囲はモノ・商品、ファッションなど目に見えるものばかりでなく、当然、考え方や生活様式にも及んだ。少しずつではあるが、目に見えるモノの吸収を先頭に、周囲や社会に影響が広まっていくための先導的役割を留学生たちは果たしたのである。

第3に、女子留学生は帰国後、教員、医者、新聞や雑誌の言論従事者、芸術家など、多様な分野の専門家として社会に進出していった。本稿で紹介した7人全員が教育に携わっている。中でも、羅蕙錫は画家として「女子美術学舎」を開設し、李淑鍾は幾多の学校での勤務の後「誠信学

院」を創設、現在は幼稚園から大学院までを擁する学院に発展している。高も「ソウル女子大学」の現在に続く発展の基礎を築いた。帰国した留学生たちが教員になって女生徒に影響を与え、次の留学生を生み出すという「循環」が植民地期を通して展開している。留学生たちは、向学心に燃える生徒や住民のあこがれの対象であり、「モデル（模範・手本）」として大きな意味を持ったのである。

また、医学・薬学を志して留学した女性も多いが、朴はそこに医療分野で活躍した婦人宣教師の影響があったことを指摘している。1876年の開国以来、女子の医学教育分野に対する朝鮮政府の特別な方策は見当たらないが、婦人宣教師の影響により、医者は女性の専門職として早くから認識されるようになった⁵⁵とすることである。開国直後はアメリカへの留学者が見られるが、1910（明治43）年の併合後は留学先が日本に変わり、東京女子医学専門学校、帝国女子医学薬学専門学校等を目指して留学者が海を渡ってきたのである。

留学生たちは多様な分野の専門家となって朝鮮社会の発展に尽力したが、留学生たちの真価が発揮されるのは朝鮮戦争休戦以後のことである。国内の大学院をはじめ日本の母校の大学院等へ入学したり、海外の学会に参加して学びを深め、蓄えた力を社会に還元し続けたのであった。

第4は、内地日本への留学を通し、日本を知る人たちが育ち、その人たちが上記1～3の役割を担って朝鮮社会に帰ったという事実そのものが持つ役割である。「両国の懸け橋」になった人もいるが、内地日本での実体験により、たとえ否定的に捉えたとしても、内地日本を知る者として社会に存在した意味は大きい。留学した者にとって、留学した国は特別の意味を持ち、気にかかる存在であり続ける。現在でも元留学生たちが日本と韓国の関係に常に関心を寄せているのはその証左であり、それが「留学」のもたらす、重要な社会的意義だと言えよう。

「植民地」だったために、はからずも内地日本への留学を選択した朝鮮人女子学生がいたことは間違いなく、それ故に異なる文化の中で苦痛や悲しみを味わうこともあったに相違ない。しかし、逆境の中でも高い志を堅持し学びを続けることによって得たものは計り知れないはずだ。そのような大きさ・深さを彷彿とさせてくれる幾人かの元留学生との邂逅は、筆者にとっても貴重な財産となって生きている。

注

- 1 「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅰ）」で取り上げた。
- 2 「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）」で取り上げた。
- 3 朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学』、山川出版社、2005年、p.35
- 4 宮沢正典『同志社女学校史の研究』、思文閣出版、2011年、p.139
- 5 同上、p.140。なお、1926年末の在内地朝鮮人学生は全国に約3,000人であり、内2,000人が東京に在住、京都府在住者は男子193人、女子12人であった。この数から考えれば、同志社女学校の在籍者は決して少ない数ではない。
- 6 ウーマンズ・ボードは1868年1月「ニューイングランド女性海外伝道会」の名称で超教派のキリスト教女性団体として発足したが、同年9月に規約を改正し、ニューイングランド地方に限定せず広く女性宣教師の海外派遣を支援し、異教の国々の女性と子供のための仕事に必要な資金を集める活動を展開するようになった。同志社女学校に対しても、女性宣教師の派遣、校舎の建築をはじめ多くの支援を行った。

- 7 アメリカンボード婦人宣教師としては7番目の渡日者であった。1640年頃、イギリスのマン島からニューイングランドに初代入植者として移住してきたピューリタンの一家に誕生（1849年）し、アメリカで最も古いセミナリーであるハートフォード・フィーメイル・セミナリーで教育を受け、しばらく教師をした後来日した。彼女の手紙は他の婦人宣教師と比べて一段と文章の格調が高く、用語の選択、比喩の用い方等に見られる表現の巧みさは、彼女自身の素養もさることながら、セミナリーで受けた教育に負うところが多いと言われている（坂本清音「同志社女学校初代婦人宣教師A・J・スタークウェザーの苦闘」、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』所収、現代資料出版社、1999年、pp.304~305）。
- 8 記念写真誌『同志社女子大学125周年』によると、スタークウェザーを送り出したウーマンズ・ボード宛ての手紙から、1876（明治9）年10月24日を京都ホームの始まりの日としてきたが、「明治9年の頃、私はデビス宣教師と相談の末、女学校を始めては—という事になり、私の家でいつ開講式があったということなく始めました。……時日は明治9年の2月であったと覚えて居ます」という新島八重の話から、同年2月には「家塾」が開設されていたことが判明している。家塾の様子に関しては「私がABCを教へ、デビス氏の奥様の姉君ミセス・ドモンと云ふ方が教師として教へて下されました」と記されている。生徒は3人（9歳になる男児と2人の姉妹）だったが、病死や退塾のため家塾は自然消滅し、京都ホームへと引き継がれたようである（同志社女子大学ホームページ掲載同上誌「私塾時代の同志社女学校—同志社女学校の始まりはいつか」参照のこと）。
- 9 宮沢前掲書、p. v
- 10 スタークウェザーを助け、ホームに関わる者を送ってほしいとの要請に応じて来日したパーミリーは、家政担当者としての任務を果たしつつ京都在住認可証（パス）が下りるのを待ったが、京都府知事牧村の邪魔立てにより発布が遅れ、認可証が発行されたのは来日から3年後の1880年6月のことであった。パーミリーが女学校のためにフルに働けたのは1年半に過ぎなかった（坂本前掲書、pp.310~311）。
- 11 矢野咲（1892年女学校本科卒業）の回想、同志社社史資料室編『創設期の同志社—卒業生たちの回想録—』、1986年、同朋社、p.371
- 12 田中竹（1892年女学校本科卒業）の回想、同上、p.403
- 13 他に別科として3年制の「英語会話」、1年制の割烹科、裁縫科、編物料が設置された。
- 14 林（佐伯）外浪（1888年女学校本科卒業）の回想、同上、pp.358~359
- 15 長谷場知亀（1892年女学校本科卒業）の回想、同上、p.384
- 16 「女学校問題と新島夫妻の役割（1884年7月10日付ウーマンズ・ボード書記クラーク宛報告）」より引用、前掲記念写真誌『同志社女子大学125周年』所収。女性宣教師と新島襄等との確執に関しては、坂本前掲論文の他、本井康博「京都ステーションとしての同志社」にも言及されている（いずれも前掲同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』所収）。
- 17 同上、「明治20年代の寮生活」より引用
- 18 前出長谷場知亀の回想、同志社資料室前掲書、p.384
- 19 深田照（1891年本科旧課程卒業）の回想、同上、p.350
- 20 海老名みや（1876年頃女学校退学）の回想、同上、p.42
- 21 杉山恒（1884年邦語科卒業、1889年本科卒業）の回想、同上、pp.337~338

- 22 海老名弾正は同志社総長就任時から同志社における男女共学の実現を構想しており、改定理由で「女子ト雖モ相当ノ学力アル者ハ選科生トシテ入学差支ナシト認ム」とした。1923年には「男子の大学に女子の入学を許す」ことにしたが、当初は入学資格を指定校卒業生に限定していた。指定校の拡張・廃止を経て、外国語履修などの一般化された条件下で女子を受け入れるようになったのは1940（昭和15）年のことである。
- 23 宮沢前掲書、p. iv
- 24 同上、p.123
- 25 同上、p.124
- 26 同上、p.131
- 27 淵澤能恵については、拙論文「植民地下朝鮮における淑明高等女学校」、『岐阜大学留学生センター紀要2002』を参照されたい。
- 28 宮沢正典「同志社女学校と朝鮮」、『同志社談叢』17号、1997年、pp.16～17。なお、世古口まさの回顧談は、すでに80歳になっていた1996年7月に語られたものと記されているが、卒業年、専門等詳細は不明である。
- 29 朴前掲書、p.73
- 30 同上、p.74
- 31 同窓会海外支部はオークランド、サンフランシスコ、台北、京城、大連、奉天などに結成されている。
- 32 湯浅八郎「韓国の同志社人」、『同志社時報』第23号、1966年、pp.39～40。なお、湯浅の文中には商工大臣、文部大臣、スイス駐在大使をはじめ大学教授、弁護士等々として活躍している17人の卒業生が実名で記されている。
- 33 宮沢前掲『同志社女学校史の研究』、p.167
- 34 同じ長淵出身の張晶玉は、「長淵という地域はキリスト教が広く流布し、中流家庭であれば娘でも京城に行かせるほど勉学を重んじる人が多かった。京城以北の方が文化的に開かれており、人々の意識も高かった」と証言している（拙論文「植民地化朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）—帝国女子専門学校」、『岐阜大学留学生センター紀要2011』、2012、p.10）。
- 35 宮沢前掲『同志社女学校史の研究』、p.167
- 36 同上、p.167
- 37 柳兼子は、朝鮮民族美術館設立資金のための独唱会を女専就任以前から朝鮮でも日本でも開催した。高風京の同期生たちの満州朝鮮への修学旅行には柳宗悦・萩原芳枝両教授が引率し、兼子も同行している。東亜日報主催の独唱と修学旅行参加生による合唱の音楽会が企画されていたからである（高は不参加）。なお、柳宗悦は高の1年先輩の朝鮮からの留学生金未峰の乙保証人であった。
- 38 大島正健（1856～1938）は宗教家・教育者・言語学者。札幌農学校（現、北海道大学）の第1期生であり、クラーク博士の指導を直接受けた一人である。クラークは開校直後、学生たちに一言‘Be gentleman（紳士たれ）’との鉄則を示したが、大島は終生この鉄則を意識して人生を送った。札幌農学校在学中は、第2期生の新渡戸稲造や内村鑑三らと親交を深めた。1880（明治13）年7月に卒業して開拓使御用係となったが、同年10月には札幌農学校予科教員となり、和漢学、地理学を担当した。1886（明治19）年、札幌独立キリスト教会から牧師

に任命されたが、聖職任命の按手を受けていなかったことが問題視され、同88（明治21）年新島襄の仲介で按手礼を受けた。しかし、このことがいかなる組織にも属さない独立教会内部の反発を買い、札幌を去る原因となった。1893（明治26）年10月、札幌農学校を辞職し同志社普通学校の教授（数学担当）に就任、その3年後には市立奈良中学校の校長となった。さらに甲府中学校校長、宮崎中学校校長を経て、1916（大正5）年には京城の私立セブランス医学校（現、延世大学校）教授に就任、養生高等普通学校でも教えた。1923（大正12）年、大島は日本に戻り、1928（昭和3）年には京都帝国大学から文学博士号を授与されている（論文『支那古韻考』、1919年に受理）。1932（昭和7）年からは東京文理科大学の講師を嘱託され音韻学を担当したが、最終講義を終えた2日後に脳卒中で倒れ寝たきりとなった。病床で語った札幌農学校時代の思い出を長男正満が書きとめ、『クラーク先生とその弟子たち』として出版された（教文館、1937年。1990年からは孫の智夫による補訂が加わり、現在も刊行されている）。1938（昭和13）年死去。

- 39 旧約聖書に登場するモーセの姉ミリアムにちなんで、「同志社を救う陰の力」という意味を込めて活動した。
- 40 宮沢正典「高鳳京一韓国最初の組織的社会福祉の実践・ソウル女子大学初代学長一」、『同志社人物誌96』、p.85
- 41 同上、p.86
- 42 1931年3月の同志社大学卒業生のうち女子学生は法学部2人、文学部4人であった（同上、p.86）。
- 43 同上、p.86
- 44 同上、p.87
- 45 同上、p.87
- 46 2003年9月2日、ソウルの鄭世華氏宅でインタビューを実施した。詳細は、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料 No10』、pp.17～46を参照されたい。
- 47 湯浅前掲論文、p.41
- 48 同上、p.41
- 49 拙論文「植民地化朝鮮からの女子内地留学生（I）」、『岐阜大学留学生センター紀要2010』、2011、pp.26～28参照のこと。
- 50 丁堯燮著、柳澤七郎訳『韓国女性運動史』、高麗書林、1992年、pp.151～154
- 51 金マリアは、1893年6月18日黄海道長淵郡の富豪の家に誕生した。この地はアメリカ北長老教会の初期の伝道地で、マリアの両親は宣教師アンダーウッドから洗礼を受け、三番目の娘にマリアと言う名前を付けた。しかし、マリアは4歳の時父と死別し、10歳の時に母とも死別したが、母はマリアの姉に「聡明なマリアを外国に留学させるように」と遺言していた。北長老教会の経営するソウルの貞信女学校に入学し抜群の成績で卒業したマリアは、一時母校の教師を勤めた後、日本の広島高等女学校（現、広島女学院）を経て東京に移り、貞信女学校と同じ北長老教会系の女子学院に入学した。1918年に東京留学生独立団に参加し、東京女子医専の学生黄愛徳と出会った。東京留学生による「2・8独立宣言」が行われた後、2月17日に朝鮮国内での独立運動工作を目的に帰国、各地で活動を続けた。金マリア、黄愛徳は3・1運動に関連して保安法違反嫌疑で収監されたが、同年8月5日に予審免訴で出獄、愛国

婦人会秘密地下組織の会長として活躍するが、同年11月28日には兩名他幹部10人が逮捕された。金マリアは3年の刑を受けて服役したが、1920年に病気で保釈となり、療養中の1921年に上海へ脱出した。臨時政府の黄海道代議員、在上海愛国婦人会幹部として活躍したが、南京金陵大学を経て1923年米国に亡命した。翌年ミネソタ州のパーク大学文学部に入学し、苦学しながら卒業したが、その間も独立運動を続けている。1933年に帰国、教育を通じて若い人々を独立戦線に立たせようと決意し、元山のウィルソン神学校に勤めた。日本官憲は神学校の門を閉じるよう命じたが、金マリアは最後まで頑張り通して後輩の養成に専念し、1945年3月13日平壤の病院で死去した。祖国の独立のために献身した53年の生涯であった（丁堯燮著・柳澤七郎訳『韓国女性運動史』、高麗書林、1992年、大島孝一「金マリアと日本—3・1独立運動のころの女子留学生」、『季刊三千里』17号所収、1979年2月、を参照）。

- 52 1927年5月、民族・社会主義の二陣営、キリスト教系左翼の朝鮮女性同友会の指導者たちが集まり、女性運動の単一体制を打ち立て、350人の会員が参席する中で発起人大会が開催された。その後、「権友会」の名称の下に政治思想や宗教、階級の如何を問わず各方面の女性たちが参加し、翌年の大会時には40余の支部が、第4回大会までには全国各地の他東京・西北間島に及ぶ70余の支部が組織され、全国的な規模に発展した。「分散的から統一的に」「自然発生的から目的意識的に」というスローガンを掲げ、汎女性大衆運動を展開した同会が1929年には光州学生運動を支援し抗日運動を主導したが、幹部たちが検挙されたため、1930年には正式解散もなく自然消滅してしまった。権友会が長く続かず解散させられたとはいえ、綱領に示した「朝鮮女性の固い団結を期する」「朝鮮女性の地位向上を図る」というスローガンの下に婦人運動に対する刺激と覚醒を促進した点は、歴史の重要な一頁を飾って余りあると評されている（丁前掲書、pp.181～183）。
- 53 黄信徳（1898～1983）は平壤に誕生、一家でキリスト教に入信している。東京女子医専に留学し、3・1独立運動に加わった黄愛施徳は実姉である。黄は日本女子大学に留学、最初から女性労働者への関心を持っていたようで、女性労働問題や労働運動論を中心に研究し、『労働婦人の現状と組合運動』と題する卒業論文を提出している（1926年卒業）。山川菊栄の影響を受け、女子留学生と山川との非公式座談会を開催した他（1923年初夏の頃）、山川の論文の一部を朝鮮語に翻訳して『ルクセンブルグとリープクネヒト』という書名で出版している。山川も黄の思い出を「朴順天さんと黄信徳さん」（『おんな二代の記』、平凡社、2001年）に記している。一方で、黄は三月会（東京）のメンバーとなるが、クリスチャンともつながりを持ち続けた。解放後は韓国の女性問題研究所初代会長として、民法改正運動などに取り組んだ他、ソウルに学校を設立、現在も中央女子中学校、中央女子高等学校として存続している（山川前掲書他、山崎朋子『アジア女性交流史 明治・大正期編』、筑摩書房、1995年にも詳しい）。
- 54 朴前掲書、p.134
- 55 同上、p.54

研究生・大学院生主体の中級口頭表現クラスを考える

—先行研究および本学における事例から—

Consideration on Intermediate Conversation Class Whose Majority is Research Students and Graduate Students: from Preceding Research and Case Study

田 辺 淳 子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コース¹における、研究留学生・大学院留学生主体の中級レベルの口頭表現クラス²について考察する研究ノートである。日本語の学習経験が比較的短い中級レベルの研究留学生・大学院留学生に求められる日本語口頭能力を、先行研究および本学における事例から検証した。その結果、大学院での研究において論文や発表等で使用する言語が日本語か英語かに関わらず、研究活動・研究生活を支える日常日本語会話力が欠かせず、その習得には、①瞬発性・積極性を含む日常会話への慣れ、②聞き取りやすい発音、③待遇を考えた談話構成、④場面・状況・相手にあわせた談話展開、⑤語用論的能力、⑥日常会話で頻繁に使用される文型・表現、⑦自然な日常会話に欠かせない機能、を意識したインプット・アウトプット練習が必要であることが明らかになった。結果をもとに、研究留学生・大学院留学生主体の中級口頭表現クラス、1学期、週1回、1回90分、全15回の授業案を提示する。なお、授業の実践報告は2014年度末に行なう予定である。

1. はじめに

佐野（2009）は目的別日本語教育を「明確な特定のニーズに基づく日本語教育」と定義している。現在日本では優れた留学生を戦略的に獲得するため、「留学生30万人計画」³に則りさまざまな取組みを行なっている。大学ではグローバル化を推進し、英語による学位取得ができるコースの拡大、日本語教育の充実等の受入れ環境づくりを図っている。そのため、研究留学生・大学院留学生に対する日本語予備教育も目的別日本語教育の1つであるアカデミックジャパニーズの1分野として、ニーズ・実態調査、実践報告、教材開発等、広範囲にわたる研究が活発に行なわれている。

岐阜大学留学生センター日本語研修コースには、研究留学生・大学院留学生以外にも、教員研修留学生、日本社会文化プログラム⁴留学生、日本語・日本文化研修留学生、協定校の特別研究留学生・特別聴講留学生等が在籍しており、特徴としては、初級から中級レベルのクラスには日本語を専門としない留学生が多いこと、研究留学生（以下、研究生）・大学院留学生（以下、院生）が比較的多いことがあげられる。研究生・院生の多くは日本語研修コースで1学期または2学期日本語を学習したのち、専門の研究に入る。その時点での日本語レベルは、英語で研究する研究生・院生は初級修了程度、日本語で研究をする研究生・院生は中級程度であることが多い。また、研究が忙しくなり、日本語研修コースの途中で受講を諦める院生もいる。

非漢字圏出身の留学生、特に理工系の非漢字圏出身の留学生は英語を使って研究をすることが多いが、マスデン（2008）は日本語教育者、留学生センターにおける留学生指導相談担当員としての立場から、留学生やその家族と接触がある大学職員、チューター、ホストファミリー、保育園の職員等の声をまとめ、研究も生活も英語のみで行なうのは不可能で、実際の生活では日本語が必要だと訴えている。研究に関しても、因他（2000）は、英語での研究が多い理系の院生においても、本人が思っている以上に研究での日本語使用が期待されており、日本語の能力が高ければ、研究室での活動や研究の幅も広がると報告している。

では、どのような日本語口頭能力が研究留学生・大学院留学生に求められているのだろうか。以下、2章では先行研究から、3章では本学における事例から研究生・院生の研究活動・研究生生活を支える日本語口頭能力を検証し、4章では検証結果をもとに中級口頭表現の授業案を提示する。

2. 先行研究

留学生に対する日本語教育に関してさまざまな研究が行なわれているが、「特定の専門分野の院生のための特定の日本語技能に関する研究」のように細分化された研究も多い。または、「中級レベルの口頭表現」というように対象が広い研究となり、前述の本学の特徴に合った中級口頭表現を扱った研究はない。そのため、本章では研究生・院生を対象とした専門日本語教育を中心に、中級口頭表現に関係がある先行研究⁵を広く検証し、研究で使用する言語が日本語であれ、英語であれ、研究生・院生の研究活動・研究生生活を支える日本語口頭能力とは具体的に何を指すか、何が求められているか、本学の中級口頭表現クラスを念頭に考察する。

2.1 来日前の口頭表現に関する日本語学習

深澤・ヒルマン（2011）は日本語パブリックスピーキング⁶能力養成のニーズを探るための基礎調査を行ない、海外で予備教育に携わっている日本語教師から、初級レベルでは文型の定着に重点を置いており、ロールプレイ、ディベート、ディスカッション、発表等は学年やレベルが進んでから扱っているという情報を得ている。研究生・院生の場合、多くは来日前の日本語学習経験がない、あるいは経験が少ないため、口頭表現能力は来日後に習得する必要があることがわかる。

2.2 学習動機やニーズ調査

麻生他（2001）による工学系院生の日本語学習動機調査報告では、「専門の勉強のため」「日本人と交流したい」「生活のため」等、文系の院生との共通項も認められた。一方、相違点としては、「国際人としての教養」や「日本の伝統文化に対する興味」等、生活や研究に直接関係のないものは学習動機になりにくく、「研究室の人と交流したい」、「周りの日本人が十分に英語を話せない」等、英語で研究を行なう工学系の院生特有の動機があることも明らかになった。

内丸（2012）は中・上級の留学生にアンケート調査を行ない、中・上級レベルの学習者においてもアカデミックな日本語学習への要望と同程度で日常生活にまつわる日本語学習への要望が高いことがわかった。

2.3 学習・研究活動の環境や生活実態

園田（2007）は大学院で研究する留学生の研究生活上の困難度と関連要因について調査した。困難度の因子として、「研究基礎力」「教員との人間関係」「日本人学生との人間関係」「研究への不安」「日本語力」「経済的困難」の6つが明らかになった。

重田（2008a・2008b）は工学系の博士課程の留学生と日本人学生にインタビューを行ない、研究室を中心とした生活調査を行なっている。その中で研究室が重要だという認識では留学生・日本人学生共に一致しているが、その理由として初年度の留学生は研究の道具等をあげ、日本人学生と学年が進んだ留学生は他のメンバーの存在をあげている。同様に、研究室で求められる日本語力に関して「話すこと」で一致しているが、初年度の留学生は研究について話すことをあげ、日本人学生と学年が進んだ留学生は雑談をあげている。ほかにも、研究室独自のルールや慣習について知らない、一斉口頭伝達やホワイトボードの連絡事項を十分捉えられない等の理由から、留学生は研究室活動に十分参加できないことを指摘している。研究に欠かせない研究室での活動・生活を充実させるためには、雑談を通して交流を深め、良好な人間関係を形成することが重要である。

2.4 音声

田中（2008）は、日本人学生ボランティアとの協同による中級口頭表現クラスの報告をしているが、その中で日本人学生が留学生とのコミュニケーションで気になった点として全員が発音をあげたことを述べている。

重田（2007）は工学系の院生の2年間の専門日本語口頭運用能力の変化を考察し、研究室で専門用語を自然習得することは可能だが、発音を誤って覚えてしまうことがあるため、日本語クラス等でチェックする機会を設けるべきであると提言している。専門用語は漢語や外来語が多いことから、研究生活を支える日本語口頭能力には聞き取りやすい発音も含まれるといえる。

2.5 会話

河内（2001）は中級レベルの留学生の1対1の雑談を収集・分析し、唐突さを指摘している。その要因として接続表現や提題表現の誤用・非用、フィラーや相槌の不足・非用をあげている。

小池（2000）は中級レベルの院生・研究員の依頼のロールプレイを日本人母語話者が見て、どんな発話を失礼だと感じるか調査をした。その結果、「ね」の多用、唐突な用件の切出し、聞き手への負担を配慮しない談話展開等がみられた。

栃木（1994）は中級レベルの留学生と日本人学生の発話を結束性から分析し、留学生は接続詞・接続表現の使用が少なく、使用する接続形式の種類も限定されており、指示対象がコトの場合、適切に使用できない傾向を指摘している。

重田（2008b）では、研究に関するコミュニケーションで日本人学生が留学生に聞いたかったこととして、違い、理由、手順、目的等をあげている。

宮谷他（2004）は、留学生が日本人学生の使う「くだけた」日本語の表現が理解できるよう、教科書日本語だけではなく、「くだけた」日本語の表現も積極的に教育内容に取入れるべきだと提言している。

唐突さや不自然さをなくすため、会話開始・終了表現、接続表現、指示詞、終助詞、フィラー、

相槌、談話構成等も会話力に求められている。重田があげた機能に関してはロールプレイに入れて練習することが可能であろう。

2.6 先行研究から見えてくる研究生・院生に必要な日本語

研究生・院生の研究生生活・研究活動を支える日本語口頭能力において、日常日本語会話力が最も重要、かつ欠かせない能力であるといえる。日常日本語会話力には、ゼミや研究室のメンバーとの良好な人間関係を形成するための「雑談する力」も含まれる。忙しい日本人学生とタイミングよく話すためには、瞬発力と積極性、何より日本語会話への慣れが重要である。日常日本語会話力の習得には多くのインプット・アウトプット練習が必要であるが、

- ・聞き取りやすい発音
- ・待遇を考えた談話構成
- ・TPO や相手への負担を考えた談話展開
- ・自然な日常会話に欠かせない機能、要素：フィラー、相槌、終助詞、助詞の省略等
- ・自然な日常会話に使われる表現：縮約形、オノマトペ、慣用句・定型表現等
- ・よく使用される文型・文法・機能：接続表現、目的、理由、違い、手順等

を意識して練習を行うべきである。

3. 本学におけるコミュニケーション上の問題事例

次に、筆者が本学で担当する初中級レベルの文章表現（作文）の授業で研究生・院生から集めたコミュニケーション上の問題事例を紹介する。本学の研究生・院生のコミュニケーション上の問題点が何か、また当の研究生・院生がその問題をどう捉えているか知ることは、口頭表現の授業を考えるうえで欠かせない。初中級修了レベル程度の留学生に「今までに日本語でのコミュニケーションで自分の意図がうまく伝わらなかった経験、自分の意図とは違って相手の日本人を怒らせてしまった経験について書きなさい。そのような経験がなければ、日本語でのコミュニケーションで難しいと思う点を書きなさい。」という題⁷で作文を課した。個人情報に配慮し、在籍年度、学生名、所属等は伏せておく。

3.1 ケース1 研究生A

研究生Aは来日前に日本語学習経験があり、来日後のプレースメントテストの結果、初中級クラスに配属された。漢字圏出身のAは研究を日本語で行なう予定で、真面目に日本語学習に取り組んでいるが、実際に日本語で日本人とコミュニケーションをした経験が極めて少ない。日本語でどう話したらいいかわからないため、専門の指導教員との会話はごく簡単なことでも全て英語で行なっている。

3.2 ケース2 研究生B

研究生Bの日本語に関する背景は研究生Aと同じである。ある日、研究生Bは研究に必要な資料を探しに図書館へ行ったが見つからず、日本語の授業に遅刻してしまった。Bが教室に着いたとき、教室では教師が学生に個別フィードバックをしていたため、Bはそっと教室に入り、教壇

の上にあった教師によるチェック済みの提出物から自分の物をとって着席した。1問1答はできるが、日本語での会話にあまり慣れていないBはこの状況にあった会話展開ができず、教師と以下のようなやりとりをした。

教師：どうして遅刻しましたか。

B：図書館で本を借りて、遅くなりました。

教師：この授業が何時からか知っていますね。

B：はい。

教師：休み時間の15分でできないことは昼休みの時間を使ってください。

B：はい。

3.3 ケース3 研究生C

研究生Cは1年以上の日本語学習歴があり、初中級クラスでは日本語知識がほかの学生より豊富で、日本語で話すことにも慣れており、常に積極的に授業に参加している。Cが研究室で他の日本人院生の発表を聞いたとき、漢字圏出身のCは配付資料を見れば、漢字でおおよその意味がわかるため、あえて資料を見ずに聴くだけでどのくらい理解できるか試した。発表後、Cは指導教員の質問意図を語用論レベルで理解できなかったため、以下のようなやりとりをした。

指導教員：どのくらい理解できましたか。

C：20から30%だけわかりました。

指導教員：どうして20から30%だけなんですか。資料があるのに20から30%だけですか。

C：聴くだけは20から30%だけ理解しました。

指導教員：もっと真面目に勉強しないと！

3.4 その他のケース・意見

ケース1と2・3では問題が異なる。ケース1の研究生Aの場合は日本語によるコミュニケーションに至っておらず、日本語で話すことに慣れることから始めなければならない。Aは、授業中に書く文はどんな内容でも常に普通体で書き、話すときも短い単文を普通体で話すことが多い。知識としては知っているはずのことが運用では活かされておらず、話し言葉と書き言葉、待遇についてもコミュニケーションの中で実体験を通して学ぶ必要がある。

ケース2の研究生Bは短い1問1答は出来るが、場面に適した会話は難しい。Bは今回のケースについて試験で『遅くなってすみません』と言うのを忘れてしまいました。』と書いていたが、自分の状況を十分説明できなかったことにより、授業より図書館を優先したと相手（この場合は教師）に理解されたかもしれないという点、また、許可を得ずに教壇の上から自分の提出物をとったことがマナー違反になる可能性があることには思い至っていなかった。

ケース3の研究生Cは、A・Bに比べ日本語でのコミュニケーションに慣れているが、知っている語彙や文型をつないで次々に発話する傾向があり、相手の発話意図や場面・状況を踏まえた発話は困難である。指導教員は、日本語学習歴が長いCなら資料を見れば、発表を聞くことにも対応できるであろうという期待があったと思われる。しかし、質問意図が捉えられなかったため、熱心に指導している教員や準備をして発表に臨んだ学生に対し、積極的な学習姿勢をアピールできなかったばかりか、不真面目な学生という誤った印象を与えた可能性があることに気づいてい

なかった。

B、Cに共通して求められるのは、語用論的能力であろう。清水（2009）は語用論的能力を、「発音・文法・語彙などの知識以外に、実際の言葉を使う状況や場面、相手との人間関係などに照らして適切な言い方で話せる能力」と定義し、外国語コミュニケーションを成功させるには語用論的能力が必要であるとしている。語用論的能力は、Kondo（2008）の実験では、日本国内で外国語として英語を学ぶ日本人大学生に対して教材を使用して語用論の指導が行なわれ、習得に効果があったことが実証された。そのため、日本語においても同様に指導により語用論的能力を伸ばすことが可能だと予測される。

この作文課題では、ほかにも日本語のコミュニケーションで難しいと思うことについて、以下のような記述があった。

- ・初級は「です・ます」だったが、初中級に進んでから、文法の勉強や作文で普通体ばかり使っている。日本人の友だちとも普通体で会話するようになったら、敬語はもちろん使えないが、「です・ます」も前のように使えなくなってしまった。相手や状況に合わせて使い分けるのは難しい。
- ・アルバイト先の日本人の日本語がわからない。日本語の先生以外の日本語は難しい。
- ・授業で習った言葉が別の意味でも使われると、意味がなかなかわからない。

これらの記述からも、待遇表現を含む日常会話の十分なインプット・アウトプット練習、「くだけた」日本語表現への慣れ、定型・慣用表現への慣れが求められていることがわかる。

4. 研究生・院生主体の中級口頭表現クラス授業案

4.1 授業目標

先行研究および上記の事例から、本学における、研究生・院生主体の中級口頭表現クラスに求められるのは、「研究活動・研究生活を支える日常日本語会話力」であるといえ、そのために以下の習得を目指すこととする。

- ・聞き取りやすい発音
- ・日本語でのコミュニケーションへの慣れ
- ・待遇を含む、場面・状況・相手を考えた談話構成・談話展開
- ・語用論的能力
- ・定型表現・慣用表現、オノマトペ
- ・研究活動で必要とされる言語機能の一部

4.2 授業内容

授業をデザインする際には各々のレベルやクラスだけでなく、日本語研修コース全体を見るべきである。本学の日本語研修コースの口頭表現は、初級では日常会話、初中級ではスピーチを行なっている。初中級と中級の合同口頭表現クラスもあり、日本人学生と協同でロールプレイをしている。また、初級では口頭表現クラス以外の時間に、日本語を使った口頭発表プロジェクトも実施している。上述の目標に本学のほかの口頭授業の内容を加味し、研究生・院生を主体とする中級口頭表現クラスの、1学期、週1回、1回90分、全15回の授業案を以下のとおりデザインした。

表2 授業内容(案)

回	シャドーイング	発表	インプット	タスク
1	導入	オリエンテーション：クラスの目的・目標、授業の進め方、評価の仕方 ニーズ調査アンケート、コメントシートの記入の仕方 自己紹介（クラスメンバーに合わせた場面・状況を設定して）		
2	1	自己紹介1	話の切り出し	電話をかける（不在連絡票）
3	2	自己紹介2	待遇	理由・許可・依頼
4	3	新しい語1	助詞の省略	アドバイスを仰ぐ
5	4	新しい語2	相槌	苦情・不満を述べる
6	5	研究室のルール1	聞き返し	名前のわからないものを描写・説明する
7	6	研究室のルール2	接続詞・接続表現	わからないことを確認しながら聞く・質問する・まとめる
8	中間試験（シャドーイング、面接者との会話、ロールプレイで1人10～15分程度）			
9	7	発表なし（中間試験のフィードバック）	縮約形	電話に出て伝言を受ける
10	8	はまっている物・こと	終助詞	違いを説明する
11	9	私の国のXと日本のXの違い1	注釈挿入	手順・過程を説明する
12	10	私の国のXと日本のXの違い2	オノマトペ	ストーリー・テリング
13	11	オノマトペ1	フィラー	ディスカッション①
14	12	オノマトペ2	慣用句	ディスカッション②
15	期末試験（シャドーイング、面接者との対話、ロールプレイで1人10～15分程度）			

4.3 授業の流れ

初回と試験を除く通常の授業ではシャドーイングから始める。シャドーイングの目的は、発音・イントネーション等の向上および日常会話で使用される表現への慣れである。築山（2013）は、言語知識はあるが運用と結びつかない初中級の留学生への授業で3ヶ月シャドーイングを活用し、言語運用力も向上したと報告している。一方で、シャドーイングのみでは文法や表現は定着せず、定着にはアウトプットのタスクが必要であると述べている。そのため、本クラスではシャドーイングは授業のウォーミングアップとして取り入れる。教材は、日本人が日常生活で使用する実用的で短い会話で構成されている『シャドーイング 日本語を話そう・初～中級編』を使用する。会話はA→Bが基本で、A→B→A、A→B→A→B等もあるが登場頻度は少ない。授業のウォーミングアップとして活用しやすい会話の長さである。待遇に関しても、お互いに丁寧体、お互いに普通体、一方が丁寧体、もう一方が普通体、の3種類あり、待遇を意識した練習が可能である。「くれたた」日本語の表現、縮約形、フィラー、終助詞、助詞の省略等が含まれており、シャドーイングを通し日常会話表現に慣れ、実際の会話で使えることを目指す。週に1回の授業だけでは練習として十分ではないため、自主学習を奨励する。

次に発表である。前回授業のロールプレイの発表、または、表2内のトピックでの発表をペアまたは一人で行なう。クラス人数にもよるが、全員発表すると時間がかかることが想定されるため、毎回数名が発表する。複数の聞き手を意識した発表ができることを目指す。発表を聞く・見る側はコメントシートに記入をする。コメントシートは初回授業で意義や書き方等の説明を行ない、具体的な意見、単なる批判ではなく建設的かつ具体的な改善提案が書けるように指導する。発表者にもコメントシートを記入させ、自己の発話の問題点への気づきを促すモニター能力も育成したい。

次に明示的なインプットを入れる。指導項目は先行研究等から必要だと認められた文法・表現項目や技能を選んだ。その日のタスクと関係のある語彙や文型・表現を先に導入するとタスクへの取組みやすさは上がるが、習ったばかりの語彙や文型・表現を正しく使うことに意識が集中し、単なる語彙や文型・表現の練習になってしまう可能性が高い。そのため、後に続くロールプレイ等のタスクと直接関係のない項目を導入・練習する。特定の教科書は使用せず、講師が作成する教材を使用する予定である。

最後にタスクである。タスクはロールプレイ中心であるが、コースが進むにつれ、まとまった量の発話が求められるロールプレイを配した。コース後半では、ストーリー・テリングやディスカッションも入れた。特定の教科書は使用せず、講師が作成する。ロールプレイの場面・状況は、研究生・院生が遭遇する場面・状況で作成する。研究生・院生以外の受講生には、彼らが遭遇する状況・場面で準備する。タスク先行型で行なう。タスク先行型は、山内（2000）では「より実際の言語活動に近い」とされ、中居他（2005）では「(学習者自身に) 気づきを多く生み出す」とされている。プレ発表⁸後に話し合いの時間を設けることで、必要な表現や注意すべき点を強く印象づける。語用論的能力の養成も狙う。

タスクの進め方は、まずその日のタスクに関するウォーミングアップ後、ペアで話し合いながら会話を作成し、会話シートに書く。ストーリー・テリングの場合は、ペアまたは小グループで原稿を書く。非日本語母語話者同士の日本語会話も日常日本語会話の1つであるため、お互い意見を言い、話し合いながら進められるよう、時間を長くとる。講師はその間は巡回し、援助者として助けが必要な場合のみ援助を行なう。その後、代表で数組がプレ発表し、押さえるべきポイント、よい点、改善する点、提案等をクラス全体で話し合い共有する。教師は必要に応じて、語彙や表現を補足する。その後、必要な修正を行ない、最終的な会話・原稿を完成させる。時間がいない場合は宿題とする。コメントシートや会話シート・原稿は受講生の取組みや成長を見る重要な資料であるため、授業後に回収する。次回授業までに講師がチェックし、コメントを入れ、授業があった週の週末までに返却する。受講生は次週の授業の発表までに見直すことが求められるため、振り返りの機会となる。

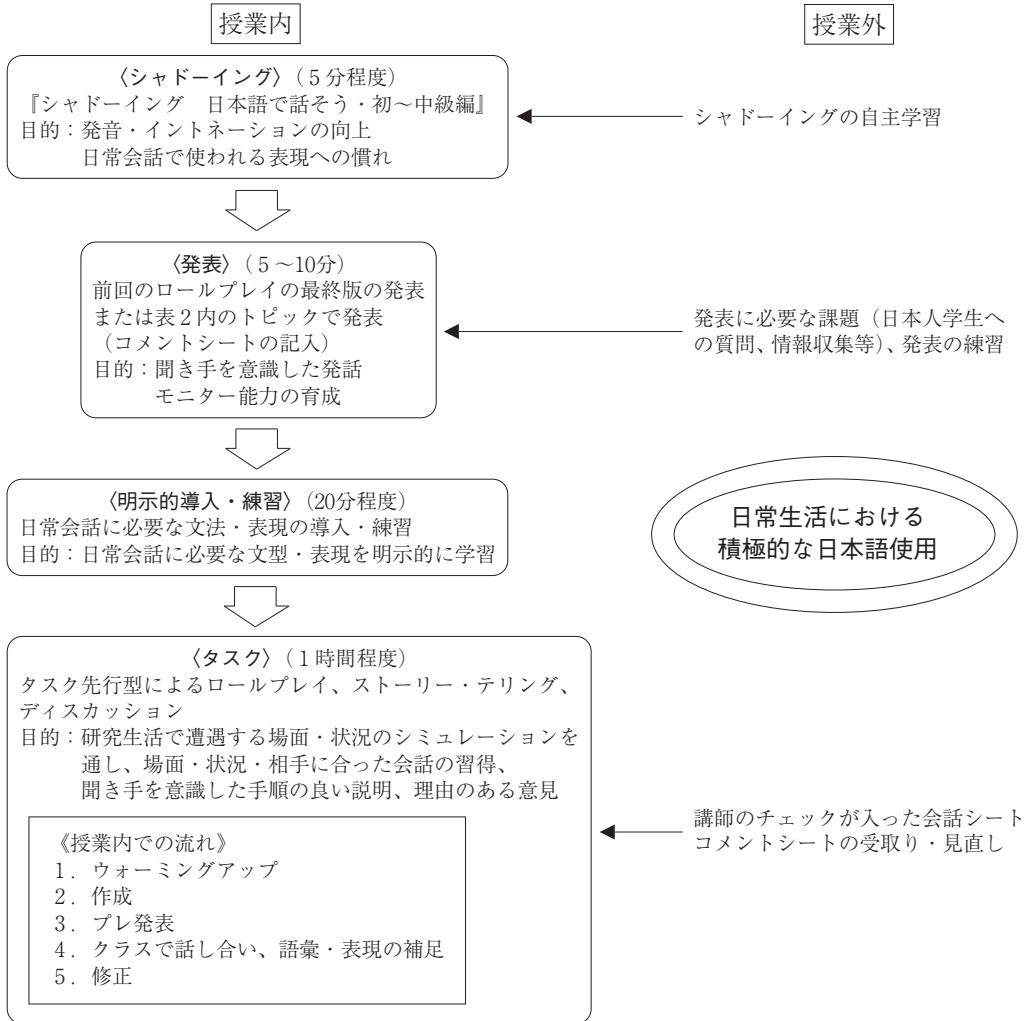


図1 授業内外の流れ（案）

5. おわりに

因他（1998）が行なったアンケートでは、日本語予備教育終了時の到達度はその後の専門教育の円滑度には関連がないことがわかっており、「日本語予備教育は、語学の上達を主目的とする人々への訓練ではなく、研究生生活を送るための準備・支援が目的である。（中略）多用な特性とニーズを持つ学習者に対して可能な限り柔軟な対応をし、総合的な準備を手助けする方法が求められる。」とまとめられている。（p.129）

本学の日本語研修コースでは初級から中級のクラスは研究生・院生主体であるものの、学期によって比率は異なり、プレイスメントテストの結果次第である。また、個々の学生のニーズや習得すべき能力・技能は授業に入ってみないとわからない。コースが進むにつれ変化もあるだろう。

研究生・院生の場合、専門の研究が忙しくなり、受講を取りやめる学生もいるため、クラスサイズ・構成も途中で変わる可能性がある。その時のクラスを見て柔軟に対応することが求められる。特定のアプローチに頼るのではなく、Scarcella・Oxford（1997）が提唱するタペストリー・アプローチの概念を用い、学習者が日本語学習に対しポジティブな気持ちを持つような柔軟な授業を展開し、研究生生活を支える日常日本語会話力の習得を目指したい。

2014年度末には本稿をもとに実施した中級口頭表現クラスの報告を行なう予定である。

注

- 1 岐阜大学留学生センターの日本語研修コースはプレイメントテストの結果に応じ初級から中上級の4レベルに大別され、受講者の属性や研究の都合等により集中コースと一般コース等に分かれる。
- 2 本稿で扱う中級口頭表現クラスの正式名称は口頭表現Cであるが、本学以外ではどのレベルを指すのかわかりにくいいため、本稿では中級口頭表現クラスとよぶことにする。
- 3 「留学生30万人計画」骨子の概要については
<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29gaiyou.pdf>、
平成23年8月時点における進捗情報については
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/08/03/1324282_01.pdf#search=%E7%95%99%E5%AD%A6%E7%94%9F30%E4%B8%87%E4%BA%BA%E8%A8%88%E7%94%BB+%E7%8F%BE%E7%8A%B6 を参照。
- 4 日本社会文化プログラムは、学術交流協定大学の交換留学生を対象に、「異文化理解」と「日本文化理解」の2つのステップで日本の社会や文化に関する深い知識を身につけることを目的とする岐阜大学独自の単位認定プログラムである。
- 5 会話クラスの先行研究としては、日本人学生との協同会話クラスに関するものも数多くあり、その知見は重要である。本学における協同クラスの実践報告としては、杉山・太田（2001）、吉成（2012）等があり、その有効性が指摘されているが、本稿で扱う中級口頭表現クラスは留学生のみで行われる授業であり、日本人学生との協同で行なわれる初中級・中級会話クラスはほかに存在するため、日本人学生との協同会話クラスに関する先行研究は本稿では取上げない。また、本稿で扱う院生には、論文や発表に英語を使用する院生も含まれるため、論文口頭発表に関する先行研究も取上げない。
- 6 深澤・ヒルマンは、公的な場での口頭コミュニケーション：パブリック・スピーキングとして、意志表明、挨拶のスピーチ、研究発表も含むプレゼンテーション、面接での自己紹介、会議での発話等をあげている。
- 7 初中級文章表現クラスの期末試験の問題の1つとして出題した。問題は初中級レベルの受講生が理解できる日本語で書き、口頭で説明を加えた。コミュニケーション上の問題点を明らかにすることが3章の目的であるため、本稿の記述は受講生の意図するところを変えない範囲で内容をまとめた。
- 8 本稿では、クラス全体での話し合いや必要な語彙・表現の補足の前に、タスク先行型でペアやグループで作成した会話シートや原稿をもとに発表することを、話し合いや補足後に修正・加筆し、練習して行なう発表に対し、「プレ発表」とよぶことにする。

参考文献

- 麻生迪子・竹口智之・太田和秀（2011）「工学系大学院留学生を対象とした日本語学習動機調査」『工学教育研究講演会講演論文集』（59）、pp.650-651
- 内丸由佳子（2012）「中級日本語学習者が望む学習とは何か —高等教育機関におけるアンケート調査—」『大学教育研究紀要』8号、pp.61-72
- 河内彩香（2001）「中級日本語学習者の会話における話題展開の問題」『日本語教育方法研究会誌』19号（2）、pp.18-19
- 小池真理（2000）「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か —『依頼』の場面における母語話者の発話と比較して—」『北海道大学留学生センター紀要』4号、pp.58-79
- 斎藤仁志・吉本佳子・深澤迪子・小野田知子・酒井理恵子（2006）『シャドーイング 日本語を話そう・初～中級編』くろしお出版
- 佐野ひろみ（2009）「目的別日本語教育再考」『専門日本語教育』9号、pp.9-14
- 重田美咲（2007）「専門日本語口頭運用能力に関する一考察 —工学を専門とする大学院留学生の口頭発表に着目して—」『専門日本語教育研究』9号、pp.43-48
- 重田美咲（2008a）「工学系研究室における博士課程留学生の生活調査」『専門日本語教育研究』10号、pp.35-40
- 重田美咲（2008b）「工学系大学院留学生の『正統的周辺参加』と日本語学習」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発領域』57号、pp.255-262
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 杉山純子・太田孝子（2001）「日本人会話パートナーを導入した『応用会話』クラスの試み」『岐阜大学留学生センター紀要』2001、pp.90-102
- 園田智子（2007）「大学院留学生の研究生活における困難度と関連要因」『言語文化と日本語教育』34号、p.104
- 田中喜美代（2008）「J-support を構築する中級日本語口頭表現クラス」『日本語教育方法研究会誌』15号（2）、pp.10-11
- 築山さおり（2013）「初中級日本語学習者の運用力向上を目的としたシャドーイングの活用について」『同志社大学日本語・日本文化研究』11号、pp.39-57
- 因京子・アブドゥハン恭子・池田隆介（2000）「理系中級者用の専門科目型日本語教材の素材と作業 —研究活動のシミュレーションのために—」『専門日本語教育研究』2号、pp.38-45
- 因京子・栗山昌子・上垣康与・吉川裕子（1998）「大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの —日本語の到達度は何を示すのか—」『日本語教育』99号、pp.120-130
- 栃木由香（1994）「日本語中級学習者の発話における接続と指示の表現」『日本語教育方法研究会誌』1巻2号、pp.18-19
- 中居順子・近藤扶美・鈴木真理子・小野恵久子・荒巻朋子・森井哲也『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』スリーエーネットワーク
- 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子（2011）「日本語教科書における口頭発表指導について —日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究—」『金沢大学留学生センター紀要』14号、pp.29-41

- マスデン眞理子 (2008) 「留学生の相談から見た日本語学習の必要性」『熊本大学留学生センター紀要』12号、pp.65-70
- 宮谷敦美・太田孝子・山田敏弘 (2004) 「多文化間コミュニケーションのための『日本語』教育 — ディスカッションプログラムからの一提言—」『岐阜大学留学生センター紀要』2003、pp. 3-12
- 山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アルク
- 吉成祐子 (2012) 「内容重視型教育に基づく日本語授業の試み —アジャクント・モデル授業の提案—」『岐阜大学留学生センター紀要』2011、pp.19-28
- Kondo, S. (2008). Effects on pragmatic development through awareness-raising instruction: Refusals by Japanese EFL learners. In E. Alcón Soler & A. Martinez-Flor (Eds.), *Investigating Pragmatics in Foreign Language Learning, Teaching and Testing*. (pp.153-177). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Scarcell, R.C. and Oxford, R.L. (1997) 『第2言語習得の理論と実践 タペストリー・アプローチ』牧野高吉・菅原永一他訳、松柏社

初級学習者を対象とする作文授業

—「文章表現A」授業報告—

A Class Report of “Composition A” for Novice Japanese Learners

吉 成 祐 子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級の学習者を対象とした作文授業「文章表現A」について報告するものである。2010年度前期から2013年度後期まで連続して担当してきた中で、主に行なってきた初級作文指導や活動を報告し、初級学習者に適した作文授業とはどのようなものであるかを考える。

1. はじめに

岐阜大学留学生センターでは、岐阜大学に在籍する研修生、大学院生、交換留学生を対象とした日本語授業（日本語研修コース）を提供している。日本語能力レベルによって授業時間の設定は異なるが、集中的に日本語を学ぶ「集中コース」（1週間に8～14コマ）と、専門の研究で忙しい中でも日本語が学べるよう配慮し設定した「一般コース」（1週間に1～5コマを選択）がある。集中コースは初級、初中級、中級、中上級の4つ、一般コースは初級、初中級、中級の3つのレベル設定があり¹、学期初めに行われるプレイスメントテストによってクラスが分けられる。

本稿が対象とする初級学習者の作文授業は集中コースの初級レベルである「集中Aクラス」の一授業であり、例年7～10名の受講者を有する。このクラスには初めて日本語を勉強する者もいれば、独学あるいは出身大学等で基礎的な文法を勉強したことがある者もあり、同じクラスの初級学習者とはいえ日本語学習経験は様々である場合が多い。集中Aクラスでは1学期間（週14コマ×15週間）という短い間で、文字、語彙、文法、さらに会話やパソコン演習等、集中的に多くのことを学ばなければならない。その中の一科目として作文授業がある。

初級学習者の日本語授業で作文教育を行なうことは日本語を書き慣れさせることができるだけでなく、既習文型や語法等の定着を図るために有用であることが指摘されている（姫野1981）。しかし現状として、大学や大学院で学ぶ留学生には日本語力が十分ではなくても日本語でレポートや論文を書くことが要求される場合も多い。このギャップを埋めるための授業実践も報告されているが（藤村他1995）、習ったばかりの日本語を駆使して作文を書くことは、初級の学習者にとって難しい作業であるにちがいない。初級クラスの一授業として週1コマで設定された作文授業で何ができるだろうか。

本稿では、集中Aクラスの授業の一環として行われる作文授業「文章表現A」について、その位置づけと実際に行なってきた授業内容を報告し、初級学習者にとってよりよい作文授業とはどのようなものかについて考えてみたい。

2. 初級作文授業「文章表現A」での授業実践

2.1 「文章表現A」クラスの特徴

文章表現Aは初級学習者を対象とした作文授業と位置づけて1学期間授業が行われるが、実際には作文活動だけを行なうわけではない。初級学習者の総合的な日本語力を向上させるよう計画されている集中Aクラスでは、『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』（1課～50課）をメインテキストとして初級文型を学ぶ「総合A」の授業を週11コマ（1コマ90分）と、初級会話を別の教科書で学ぶ「口頭表現A」、パソコンを用いて日本語入力や発表スライド作成等を行なう「パソコン演習」、作文授業である「文章表現A」の技能科目が1コマずつあり、計14コマで集中的に初級日本語を学ぶ。

本稿が対象とする文章表現Aの授業は週1コマ×15週間の15コマがあてられているが、最初の1、2週目は文字学習（ひらがな・カタカナ）に費やされることになり、実質、13コマほどしか作文授業にあてられない。また、1コマの時間も90分すべてが作文活動を行なえるわけではない。学期開始4週目頃から、毎時間授業始めに漢字クイズ（宿題となっている漢字の読み書きについて20問程度の確認問題）を実施することになっている（10分程度）。つまり、文章表現Aで作文活動に費やせる時間は1コマ80分程度であり、時には集中Aクラスのコース全体の学習進度に合わせ、総合Aで行なった文法テストのフィードバックや語彙クイズ等を文章表現Aの時間に実施することもある。このように、15週の作文授業といっても十分な時間がとれているとは言えないのが現状である。

上記のような時間的な制約がある中で、文章表現Aでは学期末に行われるプレゼンテーション発表会のスピーチ原稿を作成することを最終的な目標に設定している。このため、「一つのテーマについてある程度の長さで、まとまった内容を、他者にもわかるような作文が書けるようになること」が文章表現Aの授業目的となる。

2.2 授業を計画するにあたって

授業の計画を立てるにあたり参考としたのは、前担当者からの引き継ぎ資料である。前担当者が作成したプリント類は本授業で使用するハンドアウトの基となり、前担当者の授業報告は時間的な授業計画を立てるのに役立った。また、作文授業に関する出版物も参照した。初級学習者に対する作文指導の教科書は少ないが、『みんなの日本語』に準拠した作文ワークブックである『みんなの日本語初級 やさしい作文』は初級学習者でもまとまりのある文章が書けるようになるための工夫がされている。フローチャート及びモデル文によって全体的な作文の構成パターンをまず学習者に理解させてから、構成に沿った作文を書いていくワークブックとなっている。モデル文を提示すること、フローチャートで全体の構成を示す方法は本授業でも取り入れてハンドアウトを作成した。

『みんなの日本語』をメインテキストとして学習している集中Aクラスの授業進度に沿った活用ができる『みんなの日本語 書いて覚える文型練習帳』の作文課題も授業に取り入れた。例えば、「～から～まで」を使用して過去の行動を書く（4課）、「～たい」を用いて休みの日にしたいことを書く（13課）等、文法項目の復習も兼ねて短い文章を書く練習として利用できた。また、テーマに沿ってまとまった文章を書く段階では最終的にスピーチ原稿を作成することも考え、『初級からの日本語スピーチ』のスピーチ原稿の段落構成の提示やテーマも参照した。

2.3 授業内容

これまで2010年度前期から2013年度後期までの計8回、文章表現Aを担当してきた。受講者数（5～10名）やレベル差（ゼロ初級～初級文法学習済み）、受講者の興味、総合Aの授業進度等の違いから、毎回同じ授業内容を実施することはなかったが、段階的な授業目標の設定や活動内容、時間的なスケジュールは定着してきている。

先に述べたように、文章表現Aの時間には作文学習以外の様々な活動が行われるため、時間的な制限があった。また本授業の目標は、正しい日本語でまとまった文章（段落内の構成、文章全体の構成にも配慮しているもの）が書けるようになることであり、最終的には、発表ツール（パワーポイント）を使用しながらスピーチをするための原稿を作成することである（2000～2500字程度）。ゼロ初級も含めた初級学習者が短期間でその目標が達成できるよう段階目標を設定して授業を実施してきた。段階毎の授業目標やねらい、実際の活動例の概要を表1にまとめ、以下で詳述していく。

表1. 「文章表現A」における段階的な達成目標等の概要

段階	目標	活動	ねらい
1	日本語で文章を書くことに慣れる	文字学習 すごろく作文 日記	・正しく読みやすい文字で作文を書く ・学習した語彙や文法を用いて一文を作成する ・できるだけ長い文章を書く
2	作文の型や構成を学ぶ	自己紹介文 説明文（私の部屋、週末等）	・作文で使用される表現や構成パターンを学ぶ ・段落のある文章で内容を説明する
3	スライドと連動した文章を書く	紹介文（国の料理、国の行事等）	・わかりやすく説明し、紹介する文を書く ・スピーチ原稿の書き方を学ぶ
4	わかりやすいスピーチ発表を行なう	原稿作成 ピア活動 発表練習	・スピーチとしてわかりやすい文章を書く ・他者の意見を参考に、よりよい作文を目指す ・プレゼンテーション技術を学ぶ

2.3.1 段階1：日本語で文章を書くことに慣れる

初級学習者の作文活動において重要なのは、学習し始めたばかりの日本語を使って文章を書くことに慣れることではないだろうか。集中Aクラスのスケジュールの都合上、まず、作文授業では「文字学習」を行なうが、文字を正しく書く必要性を伝えるいい機会になっている。文章表現Aでは作文を手書き²、その作文をクラス内で互いに読み合う活動も行なう。そのためにも正しく、そして読む人にわかりやすいきれいな字で書くという目的を伝えることができる。

次に、学習した語彙や文法を使って、意味ある一文を作成する練習を行なう。既習語彙や文法の確認練習とも言えるが、学習した語彙や文法を身につけていればいるほど文章が書けることを実感してもらうことも重要である。そのために授業では必ず『みんなの日本語初級I 導入・練習イラスト集』25番のすごろくを使った「すごろく作文」を実施している。スタートからゴールまでのマスには7課までに学んだ約50の語彙がランダムに記されており、コマを進めた先の語を

使って一文を作成するという課題を行なう。例えば「買います」というマスに止まった場合、まず口頭で作成した文（例：私はリンゴを買いました）を発表し、用紙にその文を書く。口頭でまず作成した文を発表するのは、グループ内で正しい文であるかどうかを確認するため、またさらに長い文（例：私は「昨日」「スーパーで」リンゴを「3つ」買いました）が作れるようにお互いに指摘し合えるようにするためである。この活動は時制や助詞の間違いを確認し合ったり、困っている人にヒントを出したりする等のピア活動（協同学習）になっている。すごろくというゲーム性もあり、楽しみながら日本語で文を作ることができる活動であり、15～20文ほどを書けたという達成感を感じるようだ。学習者にとっても教員にとっても最初の7課までの語彙や文法をどのくらい覚えられているのかを確認することもできる。すごろく作文のようなイベント的な活動はその後行わないが、既習文法や語彙を用いて一文を作成する練習は後半の段階でも実施してきた。文法の定着確認とともに、書く作業の良いウォーミングアップになるからである。

さらに日本語で書くことに慣れるため、宿題として「日記」を書く課題を何度か出すことにしている。月日や曜日、天気語彙を確認することもでき、また枠内にたくさんの情報を書く練習にもなる。授業の進度によって普通体で書くよう求めることもある。受講者が書いたものは必ず添削し、返却する際にはクラス全体でフィードバックも行う。最初はできるだけたくさん日本語で書くこと、そして語彙や文法を間違えないことを目標としているが、徐々に内容についても指摘するようしている。例えば、出来事を羅列するだけでなく、どのような気持ちだったのかを加えたり、一つの出来事について詳しく書くよう助言したりする。まとまりのある文章の作成を徐々に目指していく。

2.3.2 段階2：作文の型（パターン）や構成を学ぶ

日本語で文を書くことに慣れた後、作文でよく使用する表現や構成のパターンを学び、まとまった文章を書く練習を行なう。つまり、一文を書くことから、いくつかの文で伝えたい内容を書く手段を学ぶ段階である。

この段階では「自己紹介文」の作成を必ず行なうことにしている。自己紹介の際に必要な内容（名前、専門、出身地、趣味等）はほぼ決まっているために書きやすく、大学生活に関わる必須語彙も学ぶことができるからだ。所属する学部や専門分野の日本語名を知らないことも初級学習者では多く、個別に必要な語を学ぶことができる。授業活動としては、まず自己紹介で必要な項目をクラスで確認し、紹介する際の言い回しなどを導入する。作文の構成として、「はじめのあいさつ」→「自分の紹介」→「終わりのあいさつ」を提示し、A4版1枚程度のレポート用紙に自由に書いていく。

この活動ではいくつかの決まりごとを設けている。一つは制限時間を決めて作文を書くことである。どうしても書けなかった場合は宿題とするが、時間内に書けるようになることも重要である。また、日本語でどのように表現するのかわからない場合は辞書を使わずに、教員に質問することになっている。辞書を引くことを否定しているのではなく、この段階では日本語でやりとりすることも重要な学習活動であると考えからだ。学習した語彙や文法をなるべく用いて文章を作成するために、教科書や各自のノートを見ることは奨励している。

授業内に書き上げた自己紹介文は教員が添削し、次の授業で返却する。添削では文法の間違い等の箇所を示すだけで訂正はしない。自分で訂正する作業も学習者にとっては必要なことだと考

えるからだ。ここで訂正を求めるのは、日本語として意味がわかるかどうかのレベルにとどめている。内容について言葉が足りないところは授業内でのピア活動で見出せる指導を目指している。ペアあるいはグループになり、発表者は自らの作文を読み、聞き手はその作文内容について質問をする活動を行なう。例えば出身地について「あなたの町はどんな町ですか」という質問や、旅行が趣味だという発表に対して「どこへ行ったことがありますか」等の質問がでてくるが、その答えはまさに、作文内容をより豊かなものにする指摘となっている。その点をクラス全体で説明し、作文活動における協同学習を定着させることを心がけている。クラスメートからの質問やコメントを反映して自己紹介文を書き足す、あるいは書き直す作業も行なう。また時間があれば自分の家族の紹介や、日本人チューターにインタビューする課題を与え、その人を紹介する他己紹介文を書く宿題も実施している。

この段階では様々なテーマで作文を書きながら、「文章を書く際に気をつけるべき点」を指導していく。例えば、「私」（主語）を省略することや、同じ言葉を何度も繰り返さない言い換えること（「そこで」、「ここで」の使用等）、複文を用いること（例：父は57歳で、会社員です。）、接続詞を有効に使って文をつないでいくこと等を学ぶ。様々なテーマの作文を毎時間一つは書くようにしており、自分自身の出来事や物事を伝えるという、取り組みやすいテーマ（「私の週末」、「将来の夢」、「私の部屋」等）を選んでいる。授業の進め方としては、まず、作文に必要な型や構成を学ぶためにモデル文を先に提示したり、型に慣れるための練習問題等を行ない、その後、各自の作文に取りかかる。前述の自己紹介文と同様に、授業内で書き上げて提出し、次の授業で教員の添削をもとに訂正し、発表するというパターンを時間の許す限り繰り返した。発表は口頭で読むこともあれば、お互いの作文を交換して読み、コメントを書くという活動も行なった。このような活動により、作文は誰かに読んでもらうものであるという認識を持ち、それを意識することで丁寧に字を書く、わかりやすい文章を心がけるといった作文を書く際の姿勢を身につけてほしいという意図があった。もちろん、読み手からのフィードバックは作文をより良くするためのアドバイスにもなっていた。

また「作文の構成」として、「序論 Introduction」→「本論 Body」→「結論 Conclusion」→「結語 Ending」という流れを常に意識するよう伝え、本論はトピックによっていくつかの段落に分かれること、結論やエンディングでは自分の気持ちや意見を述べること等、典型的なパターンを提示した。もちろんこれに沿わない作文テーマもあるかと思うが、初級学習者の作文授業としては、まず型を知ることが大切であり、内容が独自のものであればよいと考えたためである。このような作文の構成はどの言語でも同じようなパターンであることが多く、構成を意識して作文を書く必要性は学習者もすぐに理解はする。しかし実際に日本語で書いてみると忘れることもあり、構成を意識させることに注意を払う必要があった。

2.3.3 段階3：スライドと連動した文章（スピーチ原稿）を書く

テーマに沿ってまとまった文章が書けるようになったら、段落の流れを意識した少し長めの文章が書けることを目標とした活動を行なう。最終発表に向けて、聞く人にわかりやすい説明ができることも重要な点であるため、相手が良く知らない何かを紹介する文章を書く練習を行なう。例えば、それぞれの出身地で有名な料理や観光地、国の行事等を紹介する文（「紹介文」）を作成する。

最終発表会に向けての練習も兼ね、スライドの写真を見せながら発表する際原稿を書く。これはパソコン演習の授業と連動して行なわれる。例えば「国の料理」というテーマでは、まず紹介したい料理の一つを選び、その料理の写真を用意してパワーポイントを作成する。この作成作業や指導はパソコン演習の時間に行なわれる。数段落の文章でその料理を紹介することになるが、作文の構成として以下のように提示し、段落を意識した作文を書く。

「紹介する際の定型表現（例：今から私の国の料理〇〇を紹介します）」

→「料理の説明」「料理に関する思い出」等

→「発表を終える際の定型表現（例：以上です。ありがとうございました。）」

時々問題となるのは、料理の説明をインターネットで検索して難しい言葉で説明しようとしたり、漢字に頼ったりする学習者がいることである。それを防ぐためにも、簡単な料理の用語や味覚の語彙を導入したり、日本料理だとかのようなものにあたるのか等、わかりやすく伝える文章を求めたりしている。漢字の多用は漢字圏の学習者同士が読んでわかるだけのものであり、非漢字圏の読み手に対してきちんと内容を伝えることにはならないこと、また表記では必ずルビをつけることも常々注意するようにしている。

このような紹介文を作成する活動で重視しているのは、学習者が独自の視点で書く作文の重要性を知ってもらうことである。料理の場合、インターネットで検索すれば出てくるような、ただ料理を説明するだけの作文を望んでいるのではない。もちろん、日本語で料理の説明ができることも重要ではあるが、料理にまつわる各自の思い出も含めることにより、その人にしか書けない料理紹介の作文になることを実感してほしいと考えている。このような意図は必ず受講者に伝えるようにしている。

2.3.4 段階4：わかりやすいスピーチ発表を行なう

文章表現Aの最終目標であるプレゼンテーション発表会の原稿を書き、発表練習を行なうことが最終段階となっている。これまでの授業でも、自分で書いた作文を読むことを授業内の活動に含めてきたが、大勢の前でのスピーチ発表になるため、発音練習や発表の仕方等の指導も必要となる。学期末はプレゼンテーション発表会に向けて集中Aクラスの授業を調整し、読み練習は総合Aの時間で、スライド作成やスピーチ原稿を書いて訂正を繰り返す作業はパソコン演習の時間と連動して行なっている。

スピーチのテーマは、出身地にばらつきがある場合は各自の観光地や行事についての紹介をすることもあるが、例年「今までで一番〇〇こと（例：うれしかったこと、大変だったこと）」というタイトルで、各自が〇〇にあたるものを選び、自分の経験を話すというトピックを選んでいく。各自の経験を振り返るには時間も必要であるため、〇〇にあてはまるものにはどんなものがあるかをクラスで確認したあと、テーマ決定を宿題として、次の授業から書き始めることを予告する。プレゼンテーション発表会での原稿であること、パワーポイントを使って発表する原稿になることなども最初に説明しておく。また時間があれば、これまでの集中Aクラスの学生が発表したビデオを見せることもある。

各自のテーマで第一稿を書き、教員が文法の間違いや意味をなさないところ等の指摘をした添

削原稿を返却し、書き直してパソコン入力するという作業を2週にわたって行なう。次に、クラス全員で一人の作文を読み、内容確認や意見を述べ合うクラスピア活動を行なう。初級学習者でも理解できる内容であることが必須であるため、一人40分程度の時間をあて、該当者の作文を全員に配布し、まず内容を確認する。初級レベルの活動であるため教師が主導することにはなるが、学習者からも意味が不明なところを指摘するだけでなく、段落の分け方、述べる順番、付け足すべき内容についてなど、良い指摘がなされることも多い。その際指摘されたところを書き直し、ペアでのピア活動、さらに書き直し、そして教員からの添削などを繰り返し、原稿を完成させる³。

原稿の完成はパワーポイントのスライド作成と平行して行なわれるため、適宜、内容や段落順の変更など修正していく。その後、発表のために個別の読み練習をしたり、クラスメートの前で発表し、声の大きさやスライドとのタイミング、発表する際の姿勢等を指導したりする。発表会では質疑応答もあるため、その練習も行なう。このような練習・指導は「書く」という作文作業から離れた活動になってしまうが、自ら書いた作文を大勢の人に伝えるためのものであり、最終段階としてふさわしい活動ではないかと考えている。

3. 初級作文授業での指導について

2章でまとめたように、段階的に目標を定めて文章表現Aの授業を行なってきた。作文テーマや作文構成パターンの提示方法を変える、ピア活動を取り入れるか否かなど、学期によって実際に実施した活動は異なるが、これまでの実践を通して、初級作文授業を指導して行く上で重視してきたこと、これからも授業を行なっていく上で改善すべきと思われることをまとめておく。

3.1 重視してきた点

この授業で重視してきたのは、作文を書きっぱなしにしないことである。文章を書き終えたら必ず読み直し、自分自身で間違いや不十分な点に気づいて修正することを何度も注意した。また教員からの添削をもとに学習者自身が修正することも重要な作業だと考えている。

書いた作文を他者に発表することも、書きっぱなしにしないための一つの活動である。文章表現Aでは特に最終目標を原稿作成にしているため、内容を正しく理解してもらうための作文を書く姿勢が重要であると考えからだ。他者への発表は授業内でのピア活動も含まれ、高い頻度で行ってきた活動である。受講者によってはクラスメートに読まれることや間違いを指摘されることを嫌う人もいたが、何度も活動を繰り返すうちに、間違いがないかよく見直すようになったり、他者からの指摘を参考にする姿勢を身につけていくようになったりしている。教師だけでなく、受講者同士で助け合うことは必要であり、日本語を学ぶ者同士だからこその視点で指摘することも、特に作文においては可能であろう。

また、本授業で重視した作文授業におけるピア活動は、学習者の作文を読む活動も含まれるが、たとえモデル文のようないわゆる正しい作文ではなくても、多くの作文を読むことは作文を書く上でも参考になるし、間違いや内容の指摘する作業も、客観的に自分の作文を見るためのきっかけにもなったのではないかと思う。

3.2 改善すべき点

この授業では、授業時間の短さもあり、十分に書く時間が確保できなかったことが大きな問題であった。特にまとまった文章を書く作業は、時間がかかることもあり、十分な練習ができたとは言えない。それにも関わらず最後のスピーチ原稿作成では量も多く、内容的にも充実したものが要求され、学習者にとっては難しい課題に取り組まなければならない状況になっているのではないかと思う。段落毎のまとめり、つながりを学ぶ段階に費やす時間や練習が不足しているため、まとまった文章を書く時間や課題を増やすなど、限られた時間の中でも授業進度を調整し、改善していきたい。

もう一つの大きな課題は、作文修正の際の指導方法である。文章表現Aでは自分で修正する能力を身につけることや、学習者同士の活動を基にした作文改訂作業に重きをおいている。しかし、受講者によってはクラスやペアでのピア活動で得られた指摘による修正だけでは不十分で、結局、授業外での教員からのマンツーマン指導で作文を書き直し、完成させることもある。授業内でピア活動に多くの時間を費やしているが、教員からの個別指導を行なう時間も含めた授業計画が必要ではないかとも思う。その効果の違いなど、今後の検討課題として考えていきたい。

4. おわりに

より良い作文とは何かを定義するのは難しいが、少なくとも初級学習者にとってのより良い作文は、正しい日本語で相手にわかりやすく内容を伝えられる文章を書くことだろう。そのために段階的な授業目標を立てて授業活動を行なってきた。しかしそれだけに終始すると、文法上の訂正や作文構成の提示等、技術面を重視した指導になってしまいがちになる。学習者には自分の考えや意見を伝えることができる作文の楽しさも知ってほしいと願っている。その二つが両立できるよう、よりよい授業の進め方を模索しながら、今後も初級作文の授業を考えていきたい。

注

- 1 一般コースは学生数やレベル差等の状況に合わせてクラス設定が変更されることがある。
- 2 パソコン演習授業での入力練習のために自らの作文を入力することもあるが、作文する際にはまず手書きする。またプレゼンテーション発表会のためのスピーチ原稿作成では入力が義務づけられているが、第一稿は必ず手書きで提出することになっている。
- 3 集中Aクラスのピア活動については野原・吉成（2013）に詳しく報告されている。

参考文献

- 飯島ひとみ・芝薫・高本佳代子・村上まさみ（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ 導入・練習イラスト集』スリーエーネットワーク
- 門脇薫・西馬薫（1999）『みんなの日本語初級 やさしい作文』スリーエーネットワーク
- 国際交流基金関西国際センター（2005）『初級からの日本語スピーチ—国・文化・社会についてまとまった話をするために』凡人社
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク

- 姫野昌子 (1981) 「文章表現の指導」『日本語教育43』 pp.1-16
- 平井悦子・三輪さち子 (2000) 『みんなの日本語初級Ⅰ 書いて覚える文型練習帳』スリーエーネットワーク
- 平井悦子・三輪さち子 (2000) 『みんなの日本語初級Ⅱ 書いて覚える文型練習帳』スリーエーネットワーク
- 藤村知子・金子比呂子・伊丹智恵 (1995) 「橋渡しの中級作文教育—初級作文からレポート・論文へ—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集21』 pp.97-126
- 野原美和子・吉成祐子 (2013) 「初級日本語学習者によるピア・レスポンスの実態と効果—読み手が学習者と教師の場合の比較—」『岐阜大学留学生センター紀要2012』 pp.39-55

中級学習者を対象とする読解授業

—「文章理解C」授業報告—

A Class Report of “Reading Comprehension C” for Intermediate Japanese Learners

六 郷 明 美

要旨：

2012年度後期、2013年度前期・後期と、中級レベルの読解授業にあたる「文章理解C」の授業を担当した。本稿ではその3学期間にどのような授業を行ったか、困難だった点や工夫した点、また学生の授業時の様子や学期終了後に得たフィードバックを踏まえ報告する。

1. はじめに

2012年度後期（2012年10月～2013年2月）に、初めて中級レベルの読解クラスである「文章理解C」を担当することになった。2012年度前期に初中級日本語学習者向けの読解授業である「文章理解B」のクラスを担当しており、学習者が今まで習った日本語の知識を活かし、まとまった文章を読み、理解する力を養うという「文章理解」授業の目標は理解できていた。しかし初中級レベルのBクラスと中級レベルのCクラスでは学生の日本語力が異なり、対象とする文章も違って来る。また、授業を計画する上で大きく違っていたのは、教材選びであった。というのは、文章理解Bではメインの総合クラスで使用するテキストの読解部分を扱うことになっていたため、教材を選ぶ必要はなかった。しかし、文章理解Cはクラスレベル（日本語能力試験N2レベル程度）以外決まったものではなく、まず教材選びから始めなければならなかった。また、受講生の構成（人数・レベル・非漢字圏の学生数など）が判明するのがコース開講直前であるため、受講生の構成がはっきりしない段階で教材を選び、ある程度スケジュールを立てておかなければならなかった。

以上のように、初めて担当する際にはいくつかの困難な点があったものの、それから2013年度前期、後期と計3学期間、この授業を担当することになった。毎学期同様の内容で授業を行っていたわけではなく、学期ごとに変わる受講生の日本語力やニーズに合わせて受講生が確定する前に大まかに立てた授業計画を調整しながら実施してきた。本稿では3学期間担当した文章理解Cの授業について、教材選び、授業内容、学生の構成、困難だった点、工夫した点などについて報告し、中級レベルの読解授業とはどのようなものであるかを考えたい。

2. 2012年度後期

2.1 授業を計画するに際して

授業計画を立てる際にまず行ったのは、教材を決めるために以前の担当者の授業報告等をチェックすることであった。留学生センターの講師室にある教材から探すのも一つの方法だが、以前どのような教材が使われていたかを知り、その中から実際に教材を見て決めるのは有意義だ

と思う。過去の紀要やパソコンに残っていた授業報告を参照し、『中・上級者のための速読の日本語』(The Japan Times)と『新完全マスター読解 日本語能力試験N2』(スリーエーネットワーク)の2冊に決めた。理由は今までに何度か使われており、比較的新しく、手に入れやすかったことが挙げられる。

次に、1コマの授業配分と扱う部分の選択をしなければならなかったが、受講者がまだ分からない状態で決めなければならないので、最初の1・2回分を決め、それ以降は様子を見ながら決めることにした。1回目は自己紹介とクラス説明、ウォーミングアップとして共通のトピック探し(5, 6個の語彙を見て、共通するトピックは何かを答える)、グループ分け(10~12の語彙を2つのグループに分け、さらにそれぞれにトピックをつける)、間違い探しなどの簡単な問題(情報取り)を決められた時間内で実施することに決めた。前後することなく教材の提出順に進めていく事ができた。

2.2 受講生について

受講者(修了者)は10名(非漢字圏2名と漢字圏8名)。3回目から特別聴講生が1名加わり、計11名のクラスとなった。文章理解Cは、集中、一般コースの学生が受講できるが、学期の後半は、専門の授業が忙しくなると来なくなる一般コースの学生が多かった。

2.3 授業内容

本授業の目的を、ある程度まとまった文章を読むときに必要となる基本的な技術を身につけることに定め、筆者の言いたいことは何か、この表現が使われるときは何を意味しているか、早く読むときやテーマを見つけるときに必要なキーワード探しなどを中心に、何をするかを選んだ。1コマ90分を15回のコースで扱った内容は以下の通りである。

- 1) 文章のしくみを理解する
 - ① 対比(ほかのものと比べる)
 - ② 言い換え(ほかの言葉で言い換える)
 - ③ 比喩(ほかのものに例える)
 - ④ 疑問提示文(疑問文を使って話題を提示する)
- 2) 問いを解く技術を身につける
 - ① 指示語①(こ・そ・あ)
 - ② 指示語②(疑問語)
- 3) スキミング(大意を取る)
 - ① 文・段落の並べ替え
 - ② 内容の予測
 - ③ キーワード探し
- 4) テスト

『速読の日本語』はウォーミングアップとして(毎回の授業の前半)、と3)スキミングで使用し、もう一方の『新完全マスター読解 日本語能力試験N2』で1)と2)を行なった。1コマ

で行う授業の進め方は学習内容によって異なるが、例えば「対比」を例に紹介すると、まず注目ポイントを全員で確認後、「例題」を各自でやってもらい答え合わせを行い、次に質問と解説後練習問題という順番で進めていった。

各項目終了後にクイズを行ったが、そのフィードバックは丁寧に行うことを心がけた。クイズは基本的に教科書の問題を使用した。各自のテストを採点し翌週返却。コメントするのはもちろんだが、時間の節約とより良い理解の助けになればと、教科書の模範解答だけでなく、学生の解答の中からもいくつか選びプリントアウトして配布するなどもした。間違いが多かったものは、間違えたものをプリントアウトして配布し、それぞれどこがおかしいか、どう直すかなど全体で考えるようにした。そうすると学生からもいろいろ有効な意見が出てきて、活発なクラス活動が行えた。

また、説明文を表に書き直し穴埋め問題にしたり、どこが違うのかを問うような練習問題を作成したりして理解の助けになるように工夫した。その日に終わらせるつもりで配布したが、時間切れで最後までできなかったプリントは、宿題にして次週チェックした。全員で答え合わせと解説をしたので忘れてくる学生は少なかったし、中途半端な感じにはならなかったと思う。

使用した教科書のうち、『速読の日本語』は早く読む練習をするための教科書なので、最初のほうはウォーミングアップとして使用するのにちょうど良かった。当初は設定の時間ではやれなかった学生も慣れてくるとだんだん出来るようになってきた。しかし、後半少し難しい語彙が出るようになると、非漢字圏の学生は大変そうだった。最後のテストは星新一のショートショートから『愛用の時計』と『ボッコちゃん』、さらに『不眠症』を2週にわたって実施した。今までとは全く違うタイプの読み物を読ませたかったことが一番の理由である。テストの仕方にも工夫した。『愛用の時計』は前の週に配布し予習できる状態だったが、一度みんなで読み、語彙・内容などを確認してからテストを行った。『ボッコちゃん』は4つのパートに分かれているので、パート毎に読んでから実施した。『不眠症』は、パート1は今までと同じやり方で、パート2は事前の読み合わせや語彙などの確認をしないで各自でやってもらった。テストなのに最初に読みや内容などを確認する作業を行った理由として、ショートショートが今まで扱っていた問題文とは異なり、ある程度まとまった量の読み物だったこと、語彙や表現、漢字も多く、漢字圏の学生でも大変そうだったこと。そして何より、縦書きだったためみんな読みにくそうだったことなどが挙げられる。

このような事前の準備を丁寧に行ってテストを実施したが、結果は全員正解とはいかなかったことを付け加えておく。

2.4 授業を振り返って

最終日のテスト後にアンケートを行った。アンケートといっても、このクラスについてどう思うか、今後どう改善したらいいかなどの意見を書いてもらうという簡単なものであった。「ショートショートは面白かった」、「もっと読みたかった」という意見が多かった。また、少数だが「もっと文章を分析したかった」、「漢字が難しかった」、「宿題が少なかった」という意見もあった。

授業中の学生の様子やアンケートから、授業で使用する文章は「ショートショート」に出てくるようなストーリー性のあるもののほうが、分からない語彙等があっても興味を持って読んでいて、楽しんでいる様子が伺えた。また、教師側も内容に関する質問もしやすく、読解授業らしい

QA ができたと思う。もちろんこれだけで全部の授業を進めることは不可能だが、今回はもう少し学生が興味を持てる文章が増やせばいいと思う。

3. 2013年度前期

3.1 使用教材の選定

先学期は2冊の本を教材として使用したが、決められたコマ数（15コマ）で2冊分の内容からどれをどう選び、それをどの順番で出せばまとまりのあるものになるのかかなり悩むことが多かった。そこで今学期は『留学生のための読解トレーニング—読む力がアップする15のポイント』（凡人社）の1冊のみを教材として使用することにした。この本は15課からなり、各課は挑戦問題+説明、基本問題、発展問題（課によって問題数は違う）で構成されている。補助教材として前回使用した『速読の日本語』からもウォーミングアップ用に簡単なものをいくつか使用した。『速読の日本語』は早く読むための練習用なので、教科書の後半になると文章も長くなり、読むのに時間がかかるが、教科書の前半部分はウォーミングアップとして使うには便利だった。

3.2 受講生について

受講者は非漢字圏3名、漢字圏7名の計10名。自分から積極的に発言する学生は少なかったが、求めればしっかりした意見を聞くことができた。

3.3 授業内容

15コマで全部を扱うことは出来ないので、前回は参考に、今学期の教科書で取り挙げられている15課のうち、後半の問題文が長くなることや最終日にテストを実施することなどを考慮し、扱うものを以下のように12のトピックに決めた。

- ① 語のまとまり
- ② 「する・される」の関係
- ③ 文の構造
- ④ 前件と後件の関係を読み取る（接続表現を中心に）
- ⑤ 指示語に注意して文を読む
- ⑥ 省略されているものを考えて読む
- ⑦ 関連のある言葉（キーワード）を探す
- ⑧ 文末表現に注意して筆者の意見を探す
- ⑨ 筆者の立場を見分ける（筆者の意見やその根拠を探す）
- ⑩ 大切なサインを見つける（接続詞、文末表現に注意して読む）
- ⑪ 目印を見つけ、それを使って内容を理解する
- ⑫ ストーリーを読む

1コマで1課扱いたかったが、後半になると問題文も長くなり2週にわたることがあった。各課の提出順は次のようである。まず「挑戦問題」（短いもので5～6行、長いものだと30行前後の文章を読み、内容についての問題を解くもの）を各自でやり、答え合わせとその項目についての

解説を行なった。挑戦問題は課によっていろいろなタイプがあるが、例えば、①の「語のまとまり」では、1文をスラッシュで語のまとまりに分ける問題で、語を意味のまとまりでとらえる練習をする。また③の「文の構造」では修飾関係について学習した。

必要な場合は既習の文法項目の確認、復習も入れた。例えば、②の「する・される」では使役形、さらには使役受身形などが分かっていないと問題を理解するのに困難が生じてしまうので、一通り簡単に確認作業を行ってから実施した。

次に基本問題の部分を行なった。基本問題は課によって挑戦問題と同じタイプの場合と違うタイプの場合があった。基本問題も挑戦問題と同じように実施し、時には学生に答えを板書してもらい、全員でそれを添削するなどして理解の助けとなるよう工夫した。『速読の日本語』からの問題を使用することもあった。最後に、その日の授業内容が身についたかどうかを確認するために、クイズを行なった。クイズは教科書にある発展問題を使用し、回答だけして提出してもらった。翌週最初に前回のクイズのフィードバックを行った。

3.4 授業を振り返って

反省として今回の教材は問題文が長く難しかったことがあげられる。漢字圏の学生でも読むのに時間がかかった。ただ今回は教材と学生との差がそれほど感じられず、意見もよく出ていたのでよかったが、1回目にこれを扱っていたら難しかったかもしれない。今学期は教科書にストーリーがあったので、前回評判が良かったショートショートは扱わなかったが、縦書きを読むという点では扱っても良かったと思う。

4. 2013年度後期

4.1 使用教科書の選定

今回のメイン教材は『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN2読解』（アスク出版）にすることにした。これまでに引き続き『速読の日本語』は今回も補助教材として使用した。

今期は授業数が14コマと今までより1コマ少ないこともあり、長く難解な問題文が多い2013年度前期で使用した教材『留学生のための読解トレーニング 読む力がアップする15のポイント』は選ばなかった。非漢字圏の学生が4名いたことを考えると、その選択は正しかったと思う。

メイン教材とした『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN2読解』は6週間で勉強するので、各週の1日目から6日目まではポイント別の練習問題、7日目に実践問題という構成で、自習学習者にも対応できるようになっている。日常生活でよく目にする広告やお知らせから始まり、エッセイや新聞記事、論文などにレベルアップしていくようになっている。7日目の実践問題をそのままクイズとして使用した。この本はやや説明や問題が足りなかったため、その都度2012年度後期や2013年度前期で使用したプリントで補った。

4.2 受講生について

受講生は非漢字圏4名、漢字圏7名の計11名。国籍もドイツ、アメリカ、ニュージーランド、韓国、中国と5か国に渡っていたので、国による習慣や考え方の違いなどが学生の意見に反映され面白かった。今回、一般コースの学生は2名といつもに比べ少なかった(2012年度後期は7名、2013年度前期は6名であった)。一般コースの学生は専門の授業と重なるなどして欠席が増え、

途中脱落してしまう学生も何人か出てくる。しかし、今回の2人は欠席もほとんどなく終了することができた。欠席者が多いと、用意したプリントが無駄になるのはもちろんだが、前週の授業のフォローをしなければならない場合もあり、時間のロスが生まれる。今期は殆どその必要がなくスムーズに進めることができたのは良かった。

4.3 授業内容

今学期は様々な種類の文章を読みながら、それぞれに必要な読解技術を習得することを目標とした。扱った内容は以下の通りである。

- ① 身の回りの文章
- ② お知らせや通知
- ③ 意見文や説明文
- ④ エッセイや小説
- ⑤ 新聞
- ⑥ 論説文

今回のクラスで初めて新聞記事などの生教材を使用した。それはこの地方についての新聞記事を読みたいという学生からの要望もあったが、すでにN1、N2の試験に受かっている学生が何人かいたので、この教材だけではやさし過ぎると思ったからである。使用したのは「一度は見たき華麗鶏匠かな」(500字弱)「お正月に関する記事(初詣、初売り、七草粥)」「歌会始の儀 お題「静」」(短歌)である。

毎回授業中に漢字の読みを一通り確認してから、分かったことを書いてくるという宿題とした。翌週全員に発表してもらいそれぞれコメントを言い合って内容理解を深めるようにした。「お正月に関する記事」では、こちらが意図したことがきちんと伝わっていない学生が何人かいて、指示を出す際の難しさも感じた。

また、授業で短歌を取り扱ったことも初めての試みだった。「歌会始めの儀」の記事の中から「ひとり住む母の暮らしの静かなり 父のセーター今日も着てをり」という歌を取り上げ、どんな情景が見えるか、どんな場面を歌っていると思うか、またそう思った根拠など、みんなで話し合った。いくつかこちらからヒントも出した。また、他の4句を宿題とした。授業では全部で5句選んだが、理解を深める参考になればと作者の年齢、氏名も書き加えた。また、あまり難解な言葉遣いのものは避けた。「二人分焼いてしまった食パンと 静かな朝の濃いコロンビア」という東京都の20歳の女性の句では、「てしまった」や「濃いコロンビア」などに注目して意見を引き出した。

4.4 授業を振り返って

今回は「割引券・クーポン券」から医学、数学に関する論説文や新聞記事など、いろいろなタイプの文章を扱った。それは授業に変化が出て良かったと思う。最後に行ったアンケートでもそういう意見が多かった。特に生教材(新聞記事)は評判が良かった。また、前回のアンケートでもそうだったが、読解は苦手だが必要だという意見が多く見られた。

今学期特に感じたのは、分からない語彙などを飛ばして読む練習をすることの難しさである。欧米系の学生はきちんと意味が分からないと先へ進めないことが多い。漢字が多く分からない言葉が多すぎるからかもしれないが、どうそれを克服させるかが今後の課題の一つだと思う。また今学期の授業では読解には関係ないところ（問題文に出てきた数式、計算など）で紛糾するという場面が何度かあった。問題文で提示される情報に対する学生自身の知識の思い込みが原因であることが多く、最初は何が問題なのかさえ理解するまでに時間がかかった。時間はかかるが、クラス全員で協力して解決するようにした。しっかり準備して授業に臨んでいるつもりだが、思いもつかない、本題からはずれた質問が出て困ったこともある。その場で解決できない時は、教師の宿題にし、次回必ず答えるようにしているが、臨機応変に学生の疑問に対応するの必要を感じた。

5. おわりに

3学期間を通じて、文章理解Cの目標（ゴール）としては、いろいろな文を読んでそれについてディスカッションするところまでをもっていければいいと思っていた。しかし、90分で15コマ（2013年度後期は14コマ）という限られた時間では、どうしても基本的な読解スキル中心のクラスになってしまった。

3学期間連続で読解クラスを担当したが、3回目の2013年度後期で行ったクラスはほんの少しではあるが目標に近づけたのではないかと思っている。その要因は教材を今までの2回よりは簡単なもの（分量も内容も）を選んだことが挙げられる。問題数や内容など足りないところは新聞などの生教材を使用し、それが結果として授業に変化を与えたと思う。

事前準備や組み立てなどその作業は大変だが、生教材や一般の読み物（例えば小中学校の国語の教科書や絵本など）を教材にクラスを進めるのも面白いのではないかと思う。また、分からない言葉があっても、それを飛ばして読むことをどう教えるかは今後の課題として考えていきたい。

使用教材

- 石黒圭・熊田道子・筒井千絵・Olga Pokrovska・山田裕美子（2011）『留学生のための読解 トレーニング—読む力がアップする15のポイント—』凡人社
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN2読解』アスク出版
- 田代ひとみ・中村則子・初鹿野阿れ・清水知子・福岡理恵子（2011）『新完全マスター読解 日本語能力試験N2』スリーエーネットワーク
- 三浦昭・岡まゆみ（1998）『中上級者のための速読の日本語』The Japan Times

年 報 編 (2013年 4月～2014年 3月)

1. 日本語研修コース	47
2. 日本語・日本文化研修コース	66
3. 日本社会文化プログラム	69
4. 全学共通教育	70
5. 留学生指導	71
6. 留学生センター年間行事	79
7. 岐阜大学留学生センター・フォーラム「日韓教育交流の軌跡」	86
8. 留学生センター交流ラウンジの利用について	93

資 料

岐阜大学留学生数	95
日本語コース受講者名簿	97

1. 日本語研修コース

1.1 集中コース：第34期（2013年4月～9月）

1.1.1 スケジュール及び受講者

- 4月10日（水） 開講式
- 4月11日（木） 授業開始
- 8月1日（木） 授業終了

日本語研修コース第34期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、学内公募による留学生22名（うち、研究生17名、大学院修士課程1名、大学院博士課程2名、協定校からの特別聴講学生2名）、及び留学生センター所属の留学生（日本社会文化プログラム）5名の計27名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が7名、Bクラス（初中級レベル）が8名、Cクラス（中級レベル）が7名、Dクラス（中上級レベル）が6名となった。

1.4.2 各クラスの時間割と履修者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [石井]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [富田]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [村田]
2	総合日本語A [富田]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [野原]	総合日本語A [石井]	総合日本語A [河合]
3	総合日本語A [吉成]	文章表現A [吉成]		口頭表現A [三輪]	
4	パソコン演習 [野原]				

履修者

国籍	所属部局	備考
オーストラリア	地域科学部	協定校の特別聴講学生
東ティモール	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	教育学部	研究生
中国	応用生物科学研究科	研究生

8月の修了判定会議の結果、7名全員が修了した。

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人から母国で日本語を学習したことがある人までの計7名が受講。「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語初級I・II』（スリーエーネットワーク）を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、新しい課に入る際には予習内容を確認する文法・語彙の予習クイズを、学習した文法項目の理解度を確認するための文法復習テストを6回実施した。また技能科目として、まとまった文章を書くための作文のクラス「文章表現A」、『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』をメインテキストとして日常会話を学ぶ「口頭表現A」、コンピューターの基本操作（日本語入力の仕方、インターネットを活用した自律学習法、発表用ソフト利用）を学ぶ「パソコン演習」の授業がある。

今学期は明るく広めの教室に移り、気分的にのびのびとできたが、のんびりしたムードがあったのか、懸命に学習する姿勢があまり見られなかった。初めて日本語を勉強する学生はつまづくことが多かったが、さほど気にすることもなく学習態度も成績もマイペースで低調のままであった。またある程度日本語を勉強してきていた学生は最初はとてもよかったが、その後あまり伸びることはなかった。

語彙がなかなか定着しないことから、5課ごとに語彙確認クイズ（絵カードを見て単語を書く、与えられた語彙で文を作成する問題など）を実施した。語彙の定着は確認できたが、学習した語彙を使用する姿勢につながったようには思えなかった。文章表現A（作文）の授業と連携して、勉強した語彙や文法を用いる応用練習も計画・実施する必要性を感じた。

文章表現Aとパソコン演習のクラスが連携し、学期末に行われる「プレゼンテーション発表会」の今学期のテーマは「今までで一番〇〇こと」(例：うれしかったこと、感動したことなど)である。学期末には総合日本語Aの時間でも時間を割いて準備にあたるが、それだけの成果があげられているのか、疑問に思うこともある。ただ、他クラスの留学生や日本人学生、先生方などに見ていただくことは大きい励みとなり、楽しめる成果発表となっているようだ。テーマや時間配分など工夫して、今後も続けていきたいと思う。

[Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [野原]	総合日本語B [六郷]	総合日本語B [橋本]
2	口頭表現B [吉成]	口頭表現演習BC [橋本]	聴解演習B [富田]	文章表現B [梅野]	文章理解B [村田]

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

履修者

国籍	所属部局	備考
アメリカ	留学生センター	日本社会文化プログラム学生
アメリカ	留学生センター	日本社会文化プログラム学生
アメリカ	留学生センター	日本社会文化プログラム学生
中国	工学部	研究生
中国	地域科学部	研究生
中国	応用生物科学部	研究生
スペイン	応用生物科学部	研究生

8月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった1名(網掛け)をのぞき、4名が修了し、2名(日本社会文化プログラム)が単位を取得した。

授業報告 (Bクラス担任：橋本)

総合日本語Bでは、『中級へ行こう』『みんなの日本語中級I』(スリーエーネットワーク)の2冊を使用し、初級文法を正確に使いこなすことを目標にクラスを進めた。この2冊の教科書の文法項目は重複部分が多いが、『みんな』の方が語彙が難しく、初級文法を使いこなすための再度の練習に重複感を持たずに取り組むことができる。

総合日本語Bでは、この2冊の文法練習を扱い、本文読解、作文、口頭表現などの部分

は別の科目で扱った。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアローグ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは決して不真面目ではないが練習や復習を十分に行なわない学生が多く、到達度は授業数が少ない一般コースの学生の方が高かった。授業中、授業外で母語でのやり取りをすることが多く、日本語を使う時間が短かったことが向上を妨げた原因の一つであると考えられる。

[Cクラス]

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [六郷]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [梅野]	
2	聴解演習C [石井]	口頭表現演習BC [橋本]		文章理解C [六郷]	総合日本語C [橋本]
3	口頭表現C [三宅]	文章表現C [三輪]		文化 [森田]	
4				漢字 [橋本]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

履修者

国籍	所属部局	備考
アメリカ	留学生センター	日本社会文化プログラム学生
オーストラリア	地域科学部	協定校の特別聴講学生
インドネシア	地域科学部	研究生
中国	地域科学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	連合創薬情報研究科	博士課程
ベトナム	工学研究科	博士課程

8月の修了判定会議の結果、6名が修了し、1名（日本社会文化プログラム）が単位を取得した。

授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者7名。「総合日本語C」の火曜日～木曜日では『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら中級文法項目を学習し、読解や作文などを行った。課毎にテーマを決めた文法項目を学ぶ時間も設けた。メインテキスト終了後、担当者毎に活動のテーマ（長文読解、ディベートなど）を決めて授業を進めた。毎週金曜日は文法の時間とし、日本語能力試験N2程度の文法項目を学ぶ時間とした。毎週月曜日は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。技能科目として7科目が用意され、少なくとも5科目を選択することになる。

まじめな学生が多く、それぞれが宿題や課題に取り組んでいることがよくわかり、宿題の提出状況も問題がなかった。学生同士の仲が良く、クラスの雰囲気よかった。すでに日本語能力試験のN2を持っている学生も何名かおり、全体の成績もよかった。学期末に授業についてのアンケートを行ったが、学生からは「もう少し難しい課題もしたかった」という意見もあった。受講者の積極的な学習意欲に応えられるよう、今後の授業計画を考えていきたい。

[Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [三宅]	総合日本語D [土谷]		総合日本語D [石井]	総合日本語D [河合]
2		聴解演習D [城戸]		文章理解D [太田]	
3	文章表現D [土谷]			文化 [森田]	口頭表現D [橋本]

履修者

国籍	所属部局	備考
中国	留学生センター	日本社会文化プログラム学生
中国	教育学部	研究生
中国	地域科学部	研究生
中国	地域科学部	研究生
中国	地域科学研究科	修士課程
中国	工学部	研究生

8月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった1名（網掛け）をのぞき、4名が修了し、1名（日本社会文化プログラム）が単位を取得した。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス履修者は、上記の6名（日本社会文化プログラム学生1名、学内公募研究生4名、同大学院生1名）であった。ただし、技能クラスの口頭表現Dについては、彼らの選択科目であると同時に、2012年度秋学期にDクラスの単位を取得した日本語・日本文化研修留学生（日研生）11名および社会文化プログラム学生（社会文化生）1名の必修科目でもあったため、例年のことながらクラスサイズが飛びぬけて大きくなった。その他の技能クラスについては、2011年度より日研生クラスと研修コースクラスを分けたことにより、6名以下という恵まれたクラスサイズが保たれた（このクラスの分割については、2011年度及び2012年度年報に詳述）。文章表現Dは、全学共通教育科目の日本語D Iと合同開講で、社会文化生の必修科目であるが、その他の学生は履修できず、日研生には日研生専用の文章表現Dを開講した。

上表のクラスは、6名というクラスサイズで教えやすく学びやすいものであったはずだが、本学期の学生は、社会文化生の一名が熱心に学び成績もそれに見合うものを取得した一方、その他は授業態度も成績も精彩を欠いた。Dクラスともなると、AクラスやBクラスから日本語研修コースを履修しつつづけている学生には、望ましくない意味での慣れが生じ、とりあえず不合格にならない程度に勉強すればいいという姿勢が見受けられる。春学期は、人数は少ないがぱっとしないという傾向が続いている。

先に口頭表現Dのクラスサイズについて述べたが、授業レベルについても懸念が生じている。春学期の口頭表現Dは、前年度秋学期に同授業を履修し口頭表現の基礎を学んだ日研生や社会文化生も履修するが、彼らと新規にDクラスにプレイスされた学生とでは、明らかに能力に差がある。春学期の授業ではディベートを主に行うが、基礎的なトレーニン

グを受けていない新規の学生にはレベルが高すぎたためか、本学期末近くになってギブアップした学生が発生した。口頭表現Dについても、他の技能クラスのように、クラスの分割や履修制限を考える必要があるかもしれない。来年度以降の課題である。

日研究生については、別に記載があるが(p.66参照)、彼らの日本語学習について一点ここで記しておきたい。本学期の日研究生は12期生である。

12期日研究生は、総勢11名という本プログラム実施史上最大人数であったが、残念なことにうち1名は論文執筆、授業態度、提出物、いずれも非常に低調で教員を大いに落胆させた。日研究生には、修了論文執筆を支援するための文章表現D（日研究生専用科目）が提供されているが、その授業での課題もこなさず、修了論文も論文と呼ぶことのできないものを出してきた。他の授業の出席等も低調である。秋学期にはさほど問題のなかった学生だったため、この変容は全く理解しがたい。他の日研究生10名が真摯に論文や勉学に取り組んでいたことを思うと、指導側の問題ではないはずである。

昨年度に引き続き、今年度も留学生センター主催ワークショップを授業の振替として学生に参加を促した。5月15日（水）の郡上踊りワークショップ、6月19日（水）の能楽ワークショップである。両ワークショップについては、p.81、p.83を参照されたい。

1.5 一般コース

4月11日（木） 授業開始

7月31日（水） 授業終了

[科目名と履修者]

クラス名（レベル）	科目名	履修者数
一般A 1（入門）	総合日本語 A 1	5
一般A 2（初級）	総合日本語 A 2	5
一般B（初中級）	総合日本語 B	12
	聴解演習 B	5
	文章理解 B	8
一般C（中級）	総合日本語 C（演習）	2
	総合日本語 C（文法）	7
	聴解演習 C	6
	文章理解 C	5
	漢字	4

[時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A 2		総合A 2 [加藤]	総合A 2 [梅野]		
	一般B			総合B [野原]	総合B [六郷]	総合B [橋本]
	一般C	総合C(演習) [吉成]				
2	一般A 1	総合A 1 [三宅]	総合A 1 [加藤]	総合A 1 [梅野]	総合A 1 [三輪]	
	一般B	聴解演習 B [富田]				文章理解 B [村田]
	一般C	聴解演習 C [石井]			文章理解 C [六郷]	総合C(文法) [橋本]
3	一般A 2	総合A 2 [野原]			総合A 2 [石井]	
4	一般C	漢字 [橋本]				

授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、入門（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）の4レベルを設定している。

入門・初級クラスでは『みんなの日本語初級』を使用し、初級文法の練習を行なった。週4コマで進めているため、技能（読解、作文、漢字など）は扱っていない。また、文法練習が中心となり、口頭練習が十分には行えないところがある。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多かった。

初中級以上のレベルになると、初級をどのように学習したかで学生のレベルに差が生じる。特に、集中コースのAクラスで半期15コマで集中的に学習した学生と、一般コースで初級を学習した学生とでは、理解力はともかく、口頭能力に大きな差が生じている。その差を埋めるだけの口頭能力の養成は、一般コースでは難しいので、クラスでは初中級レベル（B）、中級レベル（C）の文法項目の学習・理解に留まっているのが現状である。

初中級クラス、中級クラスは、集中コースの授業から総合日本語、技能クラスの一部を受講する。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

今期の初中級レベル（B）は、集中コースよりも上達が見られた学生が多かった。限られた時間の中で真面目に課題に取り組み、積極的に日本語を使おうと努力した結果ではないかと考えられる。また、中級レベル（C）も真面目に取り組んだ学生が多かった。

1.2 集中コース：第35期（2013年10月～2014年3月）

1.2.1 スケジュール及び受講者

10月9日（水）	開講式
10月10日（木）	授業開始
12月21日（土）～1月5日（日）	冬季休暇
2月7日（金）	授業終了

日本語研修コース第35期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、国費教員研修生2名と国費研究留学生1名、学内公募による留学生25名（うち研究生20名、協定校の特別聴講学生5名）、及び留学生センター所属の留学生12名（うち日本語・日本文化研修コース10名、日本社会文化プログラム2名）の計40名が受講することになった。

プレイスメント・テスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が9名、Bクラス（初中級レベル）が7名、Cクラス（中級レベル）が11名、Dクラス（中上級レベル）が13名となった。なお、後期の学内公募は集中コースAクラス（初級レベル）の受講希望者が多く、今期も定員10名を超える応募があり、抽選で受講者を選抜した。また、学期が始まってから、集中から一般コースに代わった者もいた。

1.6.2 各クラスの時間割と履修者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [石井]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [田辺]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [河合]
2	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [野原]	総合日本語A [村田]	総合日本語A [田辺]
3	総合日本語A [石井]	文章表現A [吉成]		口頭表現A [三輪]	
4	パソコン演習 [野原]				

履修者

国籍	所属部局	備考
ラオス	教育学研究科	教員研修留学生
グアテマラ	教育学研究科	教員研修留学生
フィリピン	教育学研究科	研究生
中国	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	応用生物科学部	研究生
インドネシア	流域圏科学研究センター	研究生
中国	流域圏科学研究センター	研究生
中国	流域圏科学研究センター	研究生

2月の修了判定会議の結果、8名が修了した。教員研修留学生1名（網掛け）はコース途中で一般コースに変更した。

授業報告（Aクラス担任：吉成）

『みんなの日本語初級Ⅰ』まで勉強したことがある人もいたが、ほとんどの人が初めて日本語を学習するという初級学習者9名でクラスがスタートした。しかし1か月の授業を経て、どうしても授業についてこれなくなった1名の学生が一般Aクラスにコース変更することになり、その後8名での授業となった。とても熱心な学生たちで、授業の出席率もよく、宿題や課題の提出などもまじめにこなし、全体的に成績もよかった。

「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。また技能科目として作文のクラス「文章表現A」や日常会話を学ぶ「口頭表現A」そして日本語入力などコンピューターを使った「パソコン演習」の授業がある。

これまで15週間で行っていた授業を14週間で行うこととなり、授業スケジュールや内容にいくつかの変更があった。例えば、文字学習は授業内よりも各自の自学学習や補講に重きを置き、漢字は最初に学習方法などを指導したあとは授業内で学習することはなく、毎週範囲を決めたテストを行った。文字習得済みの学生や漢字圏の学生が多かったこともあり、大きな問題はなかった。しかし、一般コースへ移った学生も含め、最初の文字習得でつまづいた学生もあり、自学学習をどのようにサポートしていくのかは今後の課題となった。また授業では50課すべてを取り上げたが、テストは48課までにするなど短縮したり、スケジュールの都合上、急いだ課もあった。学期終了後、学生から「後半は授業のスピー

ドがとても速かった」「復習する授業がほしかった」という意見もあった。課の内容を見て、スケジュール調整を行っていききたい。

恒例となっている学期末に行われるプレゼンテーション発表会では、「今までで一番〇〇こと（例：楽しかったこと、大変だったこと）」をテーマに原稿を書き、パワーポイントも作成し、発表を行った。発表会までに何度も原稿を書き直し、発表練習を行ったが、これも授業時間が少なかったこともあり、例年と比べて十分ではなかったような気がしていた。しかし、発表会当日は各自一番よい発表と質疑応答ができ、学生たちも発表会を楽しめたようだ。今学期の発表会でもAクラス担当の日本語教員や各自の指導教員、日本人学生チューターやBクラス、Cクラスの学生など大勢の人に参加していただいたことに感謝したい。

[Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	
2	聴解演習B [富田]	口頭表現演習BC [橋本]	文章表現B [田辺]	口頭表現B [三輪]	総合日本語B [河合]
3				文章理解B [城戸]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

履修者

国籍	所属部局	備考
中国	教育学部	研究生
中国	応用生物科学部	研究生
オーストラリア	地域科学部	協定校の特別聴講学生
中国	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	応用生物科学部	研究生
中国	地域科学部	研究生

2月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった4名（網掛け）をのぞき、3名が修了した。

授業報告（Bクラス担任：橋本）

総合日本語Bでは、前期に引き続き、『中級へ行こう』『みんなの日本語中級I』（スリーエーネットワーク）の2冊を使用し、初級文法を正確に使いこなすことを目標にクラスを進めた。

総合日本語Bでは、この2冊の文法練習を扱い、本文読解、作文、口頭表現などの部分は別の科目で扱った。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

集中コースを受講する学生には、大学院入試を控えた研究生が多く、受験勉強のために欠席が多くなったり途中でコースを辞めてしまう学生がいるが、例年はクラスに1～2名である。しかし今期のBクラスはそういった学生が特に多く、結果修了できない学生が半数を越えてしまった。こうした学生の欠席が多くなると、それが他の学生にも影響し、全体的に授業に参加することへの積極性が欠け、低調なクラスになってしまったのが残念である。

〔Cクラス〕

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔六郷〕	総合日本語C 〔吉成〕	総合日本語C 〔石井〕	総合日本語C 〔橋本〕
2	聴解演習C 〔石井〕	口頭表現演習BC 〔橋本〕		文章理解C 〔六郷〕	
3	漢字 〔森田〕	口頭表現C 〔加藤〕		文化 〔森田〕	
4		文章表現C 〔城戸〕			

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

履修者

国籍	所属部局	備考
ドイツ	教育学部	協定校の特別聴講（研究）学生
中国	地域科学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	工学部	研究生
中国	応用生物科学部	研究生
中国	流域圏科学研究センター	研究生
韓国	地域科学部	協定校の特別聴講学生
ベトナム	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
ニュージーランド	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
中国	応用生物科学部	研究生
アメリカ	留学生センター	日本社会文化プログラム学生

2月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった2名（網掛け）をのぞき、7名が修了し、2名が（日研生）が単位を取得した。

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルの学習者11名が受講。内1名が学期の終わり頃から授業に参加できなくなり、また1名は出席日数の不足・課題未提出などの理由から修了規定を満たすことができなかった。また、特別一般コースとして総合日本語Cのみ出席していた学生1名を含め、計12名のクラス編成であった。

「総合日本語C」の火曜日～木曜日では『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を用いて中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。中級では語彙力をつけることも大切であるため、毎日授業のはじめに語彙クイズを実施した（出題範囲は『日本語総まとめ問題集2級（語彙編）』より抜粋したプリント配布済み、各自で学習）。月曜日は総合演習として日本人学生と合同で言語学を学び、金曜日はN2レベルの文法を学ぶ授業となっている。技能科目として7科目があるが、「漢字」は非漢字圏の学生に限られている。このうち少なくとも5科目を選択することになる。

出席していた学生は授業態度や課題提出もまじめにこなし、授業内では積極的に質問などをし、クラスの雰囲気もよかった。全体的に成績もよく、各自苦手なことを認識しながら日本語学習に取り組んでいた。もう少し難易度をあげた課題などに取り組む授業内容にしてもよかったように思う。今後はできる範囲で臨機応変に教材や授業内容を変えることも考えていきたい。

[Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [土谷]		総合日本語D [村田]
2				聴解演習D [石井]	口頭表現D [橋本]
3	文章表現D [土谷]			文化 [森田]	
4		文章理解D [加藤]			

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章を参照のこと。

履修者

国籍	所属部局	備考
韓国	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
スウェーデン	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
スウェーデン	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
タイ	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
中国	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
中国	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
中国	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
ベトナム	留学生センター	日本語・日本文化研修留学生
韓国	留学生センター	日本社会文化プログラム
オーストラリア	地域科学部	協定校の特別聴講学生
中国	地域科学部	協定校の特別聴講学生
中国	工学部	研究生
中国	地域科学部	研究生

2月の修了判定会議の結果、修了規定を満たさなかった1名（網掛け）をのぞき、3名が修了し、9名（日研生・日本社会文化プログラム学生）が単位を取得した。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

秋学期の日本語研修コースDクラスでは、10月開始の日本語・日本文化研修コースの学生（日研生）が主たる履修者となる。今回の日研生（13期生）は全10名だが、プレイスメ

ント・テストの結果、8名がDクラス、2名がCクラスとなった。後者のうち1名は、総合日本語はCを履修するが、技能クラスはDという変則的な授業の取り方をした。また、今年度春学期にDクラスを履修した日本社会文化プログラム学生（社会文化生）が1名おり、技能クラスのいくつかを引き続き履修した。

昨年度秋学期は、日研究生（12期）11名全員がDクラスにプレイスされたため、Dクラスは学内公募を行わなかったが、今学期は若干の余裕があることを見込んで学内公募をした。その結果、上表のように日研究生8名、社会文化1名、特別聴講学生（学部所属交換留学生）2名、学内公募研究生2名、計13名という大所帯で、さらに総合Cと技能Dを組み合わせた日研究生1名、春学期から引き続き履修する社会文化生1名が加わり、Dクラスとして歴代で最大の人数を抱えることとなった。

上記のように種々の学生が混在するため、授業の履修については細かくルールが定められている。ここではそれを詳述しないが、本学期に関わることとしては、文章表現D（全学共通教育日本語DⅡと合同開講）は、日研究生と社会文化生は必修科目として履修、研修コースの学生は履修できないというルールがある。

昨年度までの秋学期のDクラスの様相は、熱心で活発な日研究生と、それほど熱意のないその他の学生（主に日本語研修コースの学生）の差が顕著で、日研究生への賞賛につながっていたが、本学期は両者の懸隔がそれほどなかった。しかしそれは、日研究生以外の学生の熱心さが高まったわけではなく、日研究生が低調だった結果である。理由は不明ながら、授業への熱意が感じられず、同国出身者でかたくなに固まる日研究生の様子に、首を傾げざるを得なかった。成績も当然ながら過去の日研究生には及ばないものとなった。

本学では、日研究生には日本語能力試験N2程度を求めており、全員Dクラスからスタートして足並みを揃えて進んでいくのが理想的だが、今学期は10名中2名がCクラスにプレイスされた。学期が始まってみると、Cクラスのほうが適切ではないかと思われる学生がDクラス内にさらに1,2名認められたが、クラス変更の時期を逸した。日研究生の受入数が国の方針として増加しているため、日本語力の高さが以前ほど求められなくなっており、それが本校の日研究生コースにも影響している。プレイスメントの難しさを痛感した学期となったが、今回はこの反省を生かして、所属クラスを判定しがたい学生については、学期当初の1週間はレベル間の移動を可とする方策を講じるつもりである。

修了不可となった学生（日本語研修コース履修者）は、AクラスからDクラスまで、日本語研修コースを履修しつづけた学生である。学期途中で、技能クラスの出席が足りなくなる恐れが生じ注意を促したところ、授業に出続けることができれば修了不可でも構わない旨の発言をし、結果的に1科目を落として修了不可となった。この学生は、日本語に触れる機会確保のために在籍の権利は有しておきたいが、成績の良し悪しや修了の可否はど

うでもいいと考え、提出物も学期途中の試験類も超低空飛行でやりすごすという、昨今ちらほらと見受けられるタイプである。授業を提供する側は、一学期をかけて文字通り「集中」して日本語を学び、修了という目標を達成してもらおうと考えるが、学生にはそのようなことは関係ないのである。留学生センターの日本語授業に何が求められているのか、改めて考えさせられる。

1.7 一般コース

10月10日（木）	授業開始
12月21日（土）～1月5日（日）	冬季休暇
2月7日（金）	授業終了

[科目名と履修者]

クラス名（レベル）	科目名	履修者数
一般A（初級）	総合日本語A	9
	初級会話	12
一般B（初中級）	総合日本語B	7
	聴解演習B	4
	文章理解B	3
一般C（中級）	総合日本語C（演習）	2
	総合日本語C（文法）	3
	聴解演習C	2
	文章理解C	2

[時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A			総合A [野原]	総合A [村田]	総合A [田辺]
	一般B			総合B [富田]	総合B [六郷]	
	一般C	総合C(演習) [吉成]				総合C(文法) [橋本]
2	一般A	総合A [野原]	総合A [加藤]	総合A [富田]		総合A [村田]
	一般B	聴解演習B [富田]				総合B [河合]
	一般C	聴解演習C [石井]			文章理解C [六郷]	
3	一般A	初級会話 [野原]	総合A [城戸]		初級会話 [橋本]	
	一般B				文章理解B [村田]	
	一般C	漢字 [森田]				

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級、初中級、中級の3レベルを設定している。後期は集中的に日本語を学習したいという学生が大変多く、集中コースの定員を越える希望者に対し、ほぼ同程度の文法学習ができるクラスを設定する必要があると、半期で初級の内容を学習する一般Aを開講した。初中級、中級については前期と同じである。

一般Aクラスは『みんなの日本語初級』のIとIIを学習するクラスで、昨年度までは週6クラスであったが、十分な学習ができなかったため、週8コマを増やし、授業を進めた。

また、週8クラスは勉強できないという学生のために、初級会話のクラスを週2コマ設けた。このクラスは一般Aを受講する学生も受講することができた。初級会話のクラスを含めると、一般Aクラスは最大10コマ学習できた。これは集中Aクラスの週14コマに近い数字である。

週8コマで進めたので、昨年度より学習ペースに余裕ができ、しっかりと勉強することができた。しかし、授業以外で学習をする時間がない学生もいて、最初のひらがな学習でつまずき、ローマ字表記を求める学生がいたり、週8コマの内容を消化できず、途中で辞めてしまう学生もいた。昨年度は週4コマの授業も併設していたが、今期は週2コマの初級会話クラスだったので、専門の勉強もしながら日本語も学びたいというニーズの学生にとっては十分な授業を提供できなかった。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第12期（2012年10月～2013年8月）概要

第12期生は、大使館推薦の国費留学生2名（ベトナム・フONDON大学、チェコ・パラツキー大学）、大学推薦の国費留学生3名（スウェーデン・ルンド大学、タイ・チェンマイ大学、同・カセサート大学）、私費留学生6名（各大学との交流協定による交換数の枠内で、中国・華僑大学、同・江南大学、韓国・木浦大学から各2名）の合計11名だった。

第12期 修了生

ダン, トゥイ ティ タイン (Dang, Thuy Thi Thanh)	ベトナム・フONDON大学
ヒュン, クリストファル (Huynh, Christofer Chi Duong)	スウェーデン・ルンド大学
余 丹尼 (Yu, Daniel)	中国・華僑大学
金 民愛 (Kim, Minae)	韓国・木浦大学
クースワン, パークプーム (Kusuwan, Pharkpoom)	タイ・チェンマイ大学
林 瑜佳 (Lin, Yujia)	中国・華僑大学
マンコーソン, コーラパン (Mankosol, Korapan)	タイ・カセサート大学
孫 瑾 (Sun, Jin)	中国・江南大学
姚 瑶 (Yao, Yao)	中国・江南大学
尹 ミレ (Yun, Mirae)	韓国・木浦大学

第12期 受講生

ドレジャロヴァー, エヴァ (Dolezalova, Eva)	チェコ・パラツキー大学
---------------------------------	-------------

約1年の期間中、履修生たちは例年のように、前半の秋学期には日本語と日本文化の授業を集中的に履修し、後半の春学期には日本語と日本文化の授業に加え、日本人学生と一緒に全学共通教育で開講されている科目に出席した。さらに、能狂言・歌舞伎の鑑賞、大相撲の観戦、郡上八幡春祭りの体験、陶芸の実作、美濃小倉太鼓・茶道の実習など、伝統的な日本文化に直接触れる機会を数多く持った。

2.2 論文作成と発表会

岐阜大学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第12期生たちも、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの関心に従ってテーマを設定し、指導教員の下で熱心に論文の作成に励んだ。

論文提出後の2013年8月4日には、この12期生で7回目となった「留学生は“日本”を

どう見たか」と題する研究成果の発表会を、岐阜市立図書館と共催で開催した。今回はJR岐阜駅からすぐ近くの岐阜大学サテライトキャンパスで行ったが、猛暑のさなか、若干分かり難い場所にも関わらず、岐阜大学関係者ほか多数の市民の方々の参加があり（参加者約100名）、充実した発表会となった。

論文テーマと指導教員

ダン, トゥイ ティ タイン (Dang, Thuy Thi Thanh) ベトナム・フンドン大学

「日本とベトナムの保育所・幼稚園一両国の問題点を中心に―」

(指導教員：太田孝子)

ドレジャロヴァー, エヴァ (Dolezalova, Eva) チェコ・パラツキー大学

「日本人学生と外国人留学生のコミュニケーション―岐阜大学の事例から―」

(指導教員：森田晃一)

ヒュン, クリストファル (Huynh, Christofer Chi Duong) スウェーデン・ルンド大学

「現代の若者が用いる強意語―「メツチャ」「チョー」等をめぐる状況―」

(指導教員：土谷桃子)

余 丹尼 (Yu, Daniel) 中国・華僑大学

「著から見る日本と中国の違い―歴史・信仰と縁起・タブー―」

(指導教員：土谷桃子)

金 民愛 (Kim, Minae) 韓国・木浦大学

「銭湯文化の韓日比較」

(指導教員：森田晃一)

タースワン, パークプーム (Kusuwan, Pharkpoom) タイ・チェンマイ大学

「現代おみくじ考―「おみくじ」の形状とそれらに対する意識―」

(指導教員：森田晃一)

林 瑜佳 (Lin, Yujia) 中国・華僑大学

「カラスへの見直し―八咫鳥の姿から―」

(指導教員：土谷桃子)

マンコーソン, コーラパン (Mankosol, Korapan) タイ・カセサート大学

「日・タイの若者のことわざの使用度と認知度」

(指導教員：太田孝子)

孫 瑾 (Sun, Jin) 中国・江南大学

「織田信長ゆかりのまち―岐阜市の「文化財戦略」―」

(指導教員：森田晃一)

姚 瑶 (Yao, Yao) 中国・江南大学

「中国の大学の「母語教育」について」

(指導教員：土谷桃子)

尹 ミレ (Yun, Mirae) 韓国・木浦大学

「日韓における結婚の現状の比較—婚姻率低下の原因を中心に—」

(指導教員：太田孝子)

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは2007年度に開講した。学术交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受入れ、このプログラムによる総合的な日本語・日本文化教育を行なっている。本プログラムは4つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

3.1.1 第12期（2012年度後期～2013年度前期）

2012年度後期に第12期の4名を迎えた。留学期間は1年間である。4名のうち2名は異文化理解コース1、1名は異文化理解コース2、1名は日本社会文化コースに入り、所定の単位を取得し、コースを修了した。

3.1.2 第13期（2013年度前期～2013年度後期）

2013年度前期に第13期の2名を迎えた。1名は留学期間は1年間、1名は半年間であった。留学期間1年の学生は日本社会文化コースを受講し、所定の単位を取得し、コースを修了した。留学期間半年の学生は異文化理解コース2を受講したが、修了要件を満たさなかったため、修了できなかった。

3.1.3 第14期（2013年度後期～）

2013年度後期に第14期の2名を迎えた。2名とも留学期間は1年間である。2013年度後期は、1名は日本文化入門コースを受講し、もう1名は日本文化入門コースを受講した。

3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2013年度前期の「日本文化へのいざない」は、2012年度に引き続き、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

4. 全学共通教育

4.1 概要

留学生センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

4.2 2013年度 前学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語DⅠ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本語DⅢ—聴解—	火2	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情CⅠ	火3	森田	
	日本事情AⅠ	火4	森田	
人文科学 科目	日本語学入門—言語使用を考える—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	異文化論—年中行事（人の一年）に見る世界の諸地域—	火3	森田	日本事情CⅠと同時開講
	日本近世史—近世都市史—	水2	森田	

4.3 2013年度 後学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語DⅡ—文章表現—	月3	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	クロス・カルチャー・コミュニケーション	火2	太田	日本語・日本文化研修生も受講
	日本事情CⅡ	火3	森田	
	日本事情AⅡ	火4	森田	
人文科学 科目	日本語学入門—言語使用を考える—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	異文化論—多文化関係論—	火2	太田	クロス・カルチャー・コミュニケーションと同時開講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	異文化論—通過儀礼（人の一年）に見る世界の諸地域—	火3	森田	日本事情CⅡと同時開講
	日本近世史—近世文化史—	水2	森田	

5. 留学生指導

2013年4月から2014年3月までの1年間に留学生指導部門が行なった主な活動を、以下に報告する。

1. 留学生に対する指導・相談活動

1.1 指導部門の体制

後述する相談は留学生指導担当教員を中心に、技術補佐員の粥川美重子氏と二人で対応した。大きな問題が起こった時は二人で面談し、技術補佐員が単独で対応した相談に関しては必要に応じて報告があった。相談内容・事柄によっては相談者の指導教員、関連部署の担当者、センター長、留学生支援室職員等に協力を求めながら、問題の解決に当たった。

技術補佐員の増員が認められ二人体制が取れるようになったため、相談室はより充実し丁寧な対応ができるようになったが、相変わらず、留学生・日本人学生とも予約なしに各自の都合で来室するケースが多く、メールでの相談という方法も増えた。技術補佐員が大学事務の全体を把握していることもあり、学内事務職員からの相談も目立った。

相談内容別件数・概要は以下の通りである。

1.2 相談の概要

1.2.1 相談件数とその内容

①留学生からの相談

(a) 学業関係：78件

授業・研究関係、単位の不足・未履修・留年・研究室の変更等に伴う進学・転学転部・進路関係（学生との面談および科目担当者・指導教員・留学生支援室・学部事務との相談・連絡）、大学・大学院受験（海外からの受験希望者を含む入試の手続き等についての問い合わせ・来訪、提出書類・研究計画書等の記入・記入方法の説明、文章のチェックなど）、日本語関係（オリエンテーション、全学共通教育・日本語研修コースの日本語の内容、プレースメント・テストの日程、教室、時間割の問い合わせ、レベルの変更など）、学籍延長関係、研究室での諸問題、インターンシップ、サマースクール・短期留学など派遣学生からの諸相談（単位、進路）、など

(b) 生活一般：32件

各種事故への対応、保険等の説明、家族に関する相談、忘れ物対応、私的相談、など

(c) 経済問題：17件

経済的問題（授業料滞納、家賃滞納など）、授業料免除関係（申請の方法、申請書の記

入、決定に対する不満、申請期間の見落とし・その対応など)、奨学金関係(奨学金の種類・内容、決定の方法に関する質問、各種奨学金への申請・手続き、など)、アルバイト、など

(d) 住宅・住居問題：23件

国際交流会館関係(入居時の説明、入居延長などの手続き、掃除当番をしないなど入居者間のトラブル、部外者の入室問題、入居希望など)、民間のアパート入居、チューターからの相談、留学生支援室会館担当者との話し合い、など

(e) 健康問題：39件

健康診断関係(留学生健康診断の実施に関する話し合いなど)、病気・手術、病院への付き添い、など

(f) 入管関係：18件

資格外活動許可申請者との面談・申請書の説明など、一時帰国、滞在延長・ビザの更新、入国管理局への問い合わせ、など

(g) 市役所関係：5件

外国人登録、国民健康保険加入手続き・保険料の訂正、法律相談、など

(h) トラブルの相談：74件

学生の私的トラブルへの対応、交通事故後の処理・保険会社との話し合い(補償関係)、学研災手続き等、紛失物、人間関係のトラブル、など

②日本語研修生・日研生関係：44件

来日時の説明・諸対応、各種オリエンテーション、会館関係、岐大・他大学大学院受験関係、進路・再留学関連、交通事故・負傷関係、など

③日本人学生からの相談：149件

留学に関する全般的質問(サマースクールを含む)、協定校等への応募から出発・帰国後の勉学・進路等の相談、留学中のメールでの諸相談、学業その他の相談、課外活動の運営・内容に関する諸相談、大学祭・各種イベント関係、サマースクール帰国後の報告(参加者全員と面談)・サマスク報告書関係、留学報告会(「私たちの留学の真実」)関係、チューターに関する質問、チューター業務上の相談、留学生の紹介依頼、など

④大学内外関係：183件

本学学部事務からの問い合わせ(留学生の受け入れに関する相談、親族への面談・大学協定・派遣関係、奨学金関係、サマースクール(受入・派遣)全般、留学フェア関係、チューター業務関係、など)、アパート関係、全国留学生センター長会議関係、非常勤講師・岐阜大教職員からの相談、他大学からの相談、職員表彰、援助会支援要請、ガイドブック校正、資料作成依頼、など

計 662件

1.2.2 相談の特徴

相談件数は昨年より200余件減少したが、二人体制による丁寧な相談を心がけたため、費やした時間からはほとんど「減少」していることが感じられなかった。相談の多い項目は、①大学内外関係、②日本人学生からの相談、③学業関係、④トラブルの相談であり、それぞれ件数は減ったものの、例年通りの順番であった。減少した項目は市役所関係、経済問題、入管関係である。国民健康保険、ビザの更新、再入国関係及び国際交流会館関係の諸手続きは留学生支援室が担当しており、留学生たちは主に支援室に相談に行っているためである。以下に、相談の特徴・課題等を記しておきたい。

①大学内外関係は、相談業務に関わる事項を学内外の事務部門とやり取りした件数である。何度もやり取りが続いたり、問題が派生することも多かったが、その件数を正確に計上することは難しく、実際の件数は表記以上である。技術補佐員が事務職員としてのキャリアが長かったため、支援室や学部の事務担当者からの相談が増えたことも要因である。中でも全国センター長会議における協議・照合事項をはじめ、センター長からの資料作成依頼が目立った。

②全学部の日本人学生から、留学に関する相談が多数寄せられた。交換留学が中心であるが、初歩的な質問が多く含まれていたため、先ず技術補佐員・支援室担当者が基本的な説明をし、留学生指導担当教員が個別に対応するという方法を取ることが多かった。留学先に関する下調べをし、すでにTOEFLの準備や受験をしてから相談に来る学生は少なく、留学先(国)や渡航時期さえ考えず、TOEFLが要求されていることも知らずに漠然と訪れる学生が多く、啞然とする相談者もいた。入学時に『留学ガイドブック』を配布しているのだが、効果は薄いようだ。準備不足、情報収集力等の欠如により、交換留学の時期を逸してしまい留学を諦める学生も数名いるが、大学の交換留学などで留学する場合、「留学」を考えた時点ですぐ実現するものではないこと、手続きには時間がかかることを認識させる必要を感じている。TOEFLの結果が思うように伸びず、語学力が“大きな壁”である状況は今期も続いた。

第1次交換留学生として2013年7月シドニー工科大学に2名(うち1名はソウル科学技術大学でのサマースクールが大きな契機となり、続いて英語圏への留学を決めた)、8月にアメリカサンディエゴ州立大学、ノーザンケンタッキー大学に各1名、韓国木浦大学に1名、ドイツのエルフルト大学に1名、第2次交換留学生として2014年1月にシドニー工科大学へ1名、ノーザンケンタッキー大学に1名、3月にドイツのエルフルト大学に1名留学した。また、後述するように、サマースクールは、計17名(オーストラリア11名、韓国

6名)が参加した。

日本人学生の渡航者数は増えてはいないが相談者は増加しており、各自が各様の相談を持ってくるので、その対応には時間を割いた。さらに、帰国後は留学中の報告をはじめ、留学を活かしての進路相談等にも応じており、留学経験者とは長いつき合いを持っている。

③学業関係では、件数の項で相談内容を示したように各コースの受講・修学、単位に関する質問の他、今期は交通事故等により学籍延長措置問題が発生するなど、事故や怪我と関連した相談が増えた。

④トラブルの相談では、上述の通り交通事故や怪我等が頻発したため、それに関連する相談・対応が増えた。留学生センター所属のMさんが6月6日に怪我をし、Yさんが8月6日に交通事故に遭うという思わぬ事態が発生。技術補佐員が病院への付き添い、関係者との連絡、保険会社との交渉などを全面的に担当してくれた。Mさんは修了論文を抱えていたにもかかわらず利き手を使うことができなかつたため、さぞ不安だったことだろう。しかし、落ち着いて受け止めていたことは有難いことだった。Yさんの事故を知らされたのは、論文の成績判定会議を開いていた時であり、その時の驚きは忘れえない。論文の発表会が終り、旅行に出発する当日の事故で当人が一番ショックだったに違いないが、滞在を延長して治療を続ける道を選択した。怪我の状態が軽くなるとともに授業にも出席し、滞在を有意義なものにしたことはせめてもの慰めだったと言える。多くの労を取ってくれた技術補佐員の粥川氏は、二つの事項が「6日」に起こつたため、翌月も翌々月も「6日」が近づくとヒヤヒヤし、無事に過ぎるとホッとしたと後に語ってくれた。災難に遭つた当人及び関係者全員が落ち着いて対処できたことは幸いだったと感じている。

また、留学生センター所属の留学生が、持病や不適応が影響してか、幾科目かの授業や友人関係でトラブルを起こしたため、当人と面談の他、担任・チューターなど関係者との話し合いを重ねた。結果的に2科目の履修を取りやめることによって解決を計ったが、帰国までの半年間、随所で対応に苦慮する事態が発生したため、派遣先大学にも概要を知らせた。履修上問題となるケースが他にも起こり、交換留学生に関わる問題が多発した年であった。

1.2.3 留学生相談部門としての活動

①新規渡日者に対するオリエンテーション

2013年度前期の渡日者に対しては4月17日(水)に、後期の渡日者に対しては10月23日(水)に日本語・英語、日本語・中国語による生活関連のオリエンテーション及びメディアセンターからの説明を実施した。中国語の通訳は、2回とも留学生に依頼した。その他、日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース、交換留学生等各コースのオリエンテー

ション、国際交流会館の到着時の説明及びオリエンテーションなどを各学期に計画通り実施した。

②留学報告会

2013年12月11日（水）に留学報告会（「私達の留学の“真実”」）を開催した。当日は留学（アメリカ：ウェストバージニア大学へ交換留学、スウェーデン：ルンド大学へ交換留学、ドイツ：エルフルト大学へ交換留学）、サマースクール（オーストラリア：グリフィス大学2名、韓国：ソウル科学技術大学3名、韓国：木浦大学）、交換留学生による大学紹介（オーストラリア：シドニー工科大学）、など、様々な方法により海外で学んだ留学体験者9名がパワーポイント等を使いながら各自の体験を詳細に発表し、留学生1名が大学を紹介してくれた。また、次期交換留学候補者（アメリカ：ノーザンケンタッキー大学）も留学を決意した経緯と希望を話してくれた。さらに、今年はシドニー工科大学の平井泰先生が参加してくださり、同大学の案内とともに留学する学生へのアドバイスをしてくださった。参加者は62名であり、交流会では熱心な質問が続いた。今年も会場準備、司会、受付などを「留学ラブ」（サークル）のメンバーが担当してくれた。

なお、事前に、留学体験者に報告書（留学の長所・短所、費用、語学レベル、出発までの流れ、留学先でのある一日、生活・活動環境、コメントなど）を書いてもらい、小冊子にしたものを毎年配布しているが、留学を希望する学生には役立つ貴重な資料となっている。多くの学生が条件をクリアして海外に出かけ、視野を広げてほしいと願っている。

③派遣学生に対する事前研修

2013年度の短期留学生（派遣）は8名（韓国、ドイツ、アメリカ）であり、2月及び8～9月に1年間の留学に出発した。相談のために来室した学生は30余名いるのだが、多くはTOEFLスコアの不足などにより本年度の留学を断念する結果となった。これまで、韓国やドイツへの留学生は毎年一定の人数を保っており、渡航先の言語の学習歴や能力試験の結果だけで留学できるよう規則を改定した効果が表れていたと言える。しかし、2年前に「大学間学術交流協定に基づく交換留学（短期派遣）の語学基準に関する申し合わせ」が承認されたため、その悪影響が懸念され、留学生センターは国際戦略本部会議等でも問題点を指摘してきた。本年、ようやく懸案だった申し合わせの一部改正にこぎ着け語学の基準を緩和することができた。学生への影響は最小限にとどめることができたものの、交流協定校とのバランスに関する申し合わせはまだ撤廃に至っていない。日本人学生の派遣の増加が謳われているが、その声と逆行するような事態が国際戦略部門の本丸で起こっているのが本学の現状である。学生が留学できるような協定校の開拓が望まれる。

④サマースクール（派遣）—説明会・事前研修から留学報告まで

サマースクール（派遣）に関する一連の流れは以下の通りである。

先ず、昨年より実施されるようになった「留学フェア」(4月24日)で、オーストラリア：シドニー大学、アメリカ：ノーザンケンタッキー大学(総合文化海外実習)、スウェーデン：ルンド大学(スプリングスクールを考案中)とともに、担当者としてグリフィス大学、ソウル科学技術大学のサマースクールについて説明後、ブースに分かれて個別の質疑応答・相談等に対応した。「留学フェア」には、80人の参加があり、守富国際戦略副本部長が司会、小見山国際本部長のあいさつによって始めるなど形が整った会となった。

さらに4月17日、同24日の両日に、単独でグリフィス大学の説明会を実施した。担当教員のあいさつ、留学生支援室、生協の説明の他、前年度の参加者(計5名)による体験談の発表を行った。ソウル科学技術大学は定員が3名だったためAIMSのみでの募集とし、木浦大学からは締切り1週間前ようやく通知が届いたので、緊急に募集をかけた。

円高が進んでいたためグリフィス大学への参加者が集まるかどうか懸念されたが、最終的に11名の参加があった。ソウル科学技術大学へは、応募者5名に順位を付けて送付したところ、全員受け入れてもらうことができた。木浦大学へは、今年も1名参加することができたが、一学生の熱意により参加が実現したものである。今年は学内の参加締め切りを2週間以上遅らせて5月下旬としたが、ゴールデンウィーク等を気にする必要もなく何の支障も生じなかった。

参加決定後、6月17日～7月18日までの5週間、週3回(月曜日、水曜日、木曜日、1回2時間)計14回にわたって英語研修を実施した。今年は週当たりの回数を2回から3回に増やし、前期の試験期間を考慮して集中させたが、好評であった。講師はダニエル・エリクソン君(スウェーデン・ルンド大学からの交換留学生)、武田憲人君(教育学部英語教育4年、今年ルンド大学の留学から帰国、アメリカからの帰国子女)、松尾有美さん(教育学部生涯教育課程4年、11年度ソウル科技大留学)の3名であり、他にドレジャロヴァー・エヴァさん(チェコ・パラツキー大学からの日研生)も論文のリサーチを目的に協力してくれた。今年度はオーストラリアからの留学生の協力を得ることができなかったが、人材の確保が課題となっている。

7月17日には今年初めて外部から講師(海外留学生安全対策協議会服部誠氏)を招いて全渡航者を対象に「危機管理オリエンテーション」を実施して、出発に備えることができた。また、7月26日13:00より木浦大学、8月6日14:30よりグリフィス大学、16:30よりソウル科技大学の各参加者に対し、出発前オリエンテーションを行った。当日は前年度の参加者にも来てもらい、全般にわたるアドバイスを受けることができた。しかし、昨年同様、事前に選出したリーダー・副リーダーは期間中の様子や帰国直後の連絡をほぼ失念してしまっただけで、課題を残す結果となった。

今年帰国後に参加者全員(1名を除く)からサマースクールの報告を聞くことができ、

12月11日（水）の留学報告会「私たちの留学の“真実”」でも、各グループが力を込めた報告をしてくれた。また、各サマースクールの様子を模造紙に貼って紹介してもらったが、報告会終了後は留学生センターのラウンジに展示し多くの人に見てもらっている。

サマースクールに参加した学生たちの様子は、『岐阜大学夏期短期留学 サマースクール2013』を参照していただきたい。また語学研修のアンケートを本稿末尾に添付した。

3. 今期をふり返って

今年も多岐にわたる相談が持ち込まれたが、二人体制を活かし、様々に協力し合いながら対応することができた。本文にも記したように、怪我や交通事故等による問題が多数発生したが、振り返ってみると、それぞれに落ち着いて対応することが出来たのではないかと感じている。

昨年開設した国際交流ラウンジはチューターが学習を助けたり、留学生同士が話をしたり、イベント（日本の正月の遊び、七夕など）が行われる場として、順調に活用されている。日本人学生の参加者はまだ少ないが、留学生センター教員全員が出講している全学共通教育等を通し、日本人学生にも参加を呼び掛けていきたいと考えている。留学とまではいなくても海外に行ってみたいと考えている日本人学生は多い。しかし、実際に留学したり海外旅行ができる学生はそう多くはない。日本人学生の派遣増加に努めることはもちろんであるが、本校に在籍する留学生との交流を通して、国際的な経験を持つという面も重視していかなければならないと感じている。留学生・日本人学生両者に益する指導部門でありたいと願っている。

短期留学（サマースクール）事前研修アンケート集計結果 （グリフィス大学、ソウル科学技術大学、木浦大学）

対象者（受講者）：17人（回収数：12、回収率：70.6%）

1. 渡航先

グリフィス大学 7人 ソウル科学技術大学 4人 木浦大学 1人

2. 事前研修に参加した回数について

3回1人、4回3人、7回2人、8回1人、9回1人、10回2人、11回1人、12回1人

3. 参加できなかった理由（1で参加回数、3回以下の方）（回答者1、複数回答）

Ⓐ 授業・ゼミ等があった b サークル活動があった ㉔ アルバイトがあった

d その他 ()

4. 研修の開催期間は？

Ⓐ 適切 12 b 不適切 0

b と回答された方で、具体的な意見があれば記入してください。

5. 研修時間は？

a 長い b 短い Ⓒ ちょうど良い 12

d その他意見 ()

6. 講師について？

Ⓐ 良かった 12 b あまり良くなかった c 悪かった

7. 研修内容は？

Ⓐ 良かった 12 b 悪かった c その他

8. 事前研修は、有意義だったか？

Ⓐ 有意義だった。 12

a と回答された方で、意見があれば記入ください。(記入者数：3)

- ・実体験を聞くことができよかったです。
- ・授業では習わないような内容をきくことができよかったです。
- ・会話力外の力も身に付きました。
- ・ためになりました。

9. 事前研修の必要性について

Ⓐ 継続して行った方が良い 12 b 実施しなくても良い(必要がない) 0

10. サマースクールの実施にあたり、現行の開催大学以外で参加したい国や大学等について、希望や提案があれば記入してください。(記入者数：3)

- ・ルンド大学
- ・シドニー工科大学
- ・ポートランドの大学に行きたかった。

11. 事前研修全体を通して、意見・提案等なんでも結構ですので記入してください。

(記入者数：4)

- ・英語で話す機会が全くなかったので、英会話の時間をつくってもらえてよかったです。ありがとうございました。
- ・韓国語の勉強もしたいです。
- ・韓国語の研修があったらいいと思いました。
- ・韓国語の講座もひらいていただけるとありがたいです。

6. 留学生センター年間行事

留学生センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2013年度（2013年4月～2014年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事内容について報告する。

2013年

4月

日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月10日）

日本語研修コース授業開始（4月11日）

日本語・日本文化研修留学生 郡上エクスカーション「郡上八幡伝統文化春祭り体験」
（4月20日）

5月

郡上踊りワークショップ（5月15日）

6月

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）8週間コース受入開始（6月3日）

能楽ワークショップ（6月19日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）4週間コース受入開始（6月26日）

7月

ラウンジチューター企画“七夕まつり”（7月3日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）修了式及び歓送会（7月24日）

8月

日本語研修コース授業終了（8月1日）

日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月4日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月22日）

10月

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式
（10月9日）

日本語研修コース授業開始（10月10日）

11月

着物着付け体験（11月2日）

全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議（11月5日）

12月

シドニー工科大学（オーストラリア） 平井泰講師 来訪（12月11日）

留学報告会「私達の留学の“真実”」（12月11日）

2014年

1月

ラウンジチューター企画 “NEW YEARS PARTY”（1月15日）

2月

岐阜大学活性化経費（教育）ポスター報告会（2月5日）【平成24年度募集分】

テーマ 能楽ワークショップ（平成24年6月19日開催）

日本語研修コース授業終了（2月7日）

岐阜大学留学生センター・フォーラム「日韓教育交流の軌跡」（2月11日）

6.1 日本語・日本文化研修留学生（日研生）郡上エクスカーション

留学生センターは、サマースクール（受入）（82ページ参照）、郡上踊りワークショップ（81ページ参照）等で、郡上市とは密接な関係を有している。特に郡上八幡国際友好協会（GIFA）のご協力を賜ることが多々あり、地域に支えられている大学、留学生センターであることを痛感している。

日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）は、以前郡上の小中学校を訪問し生徒と交流する機会があったが、ここ数年そのプログラムが実施されていなかった。また何か機会があればぜひとご相談申し上げたところ、春祭りに日研生を招待するというプラン「郡上八幡伝統文化春祭り体験」をご提示いただき、ありがたく日研生エクスカーションとして実施させていただいた。

郡上八幡国際友好協会から、目的として「岐阜大学日研生の皆さんに郡上八幡伝統文化春祭りを見学体験して戴き、日本の伝統文化や日本の心に対する理解を深めて頂く。市民ボランティアや国際友好協会会員がご案内することを通じて、相互交流を行い学び合う機会とする。」と掲げていただいた。実際のエクスカーションは、目的を十分果たすものであった。

同エクスカーションは、2013年4月20日（土）に、日研生6名と筆者（土谷）が現地に赴き、同協会の会員の方々とともに、学び楽しむものとなった。初めに郡上八幡博覧館で展示物の見学と郡上踊りの体験をし、その後郡上市教育委員会の斎藤千恵子氏より、街中を散策しながら「水に恵まれ、伝統的建造物のある城下町」の講義を聞いた。昼食後は、八幡神社等で日吉社神楽、慈恩寺庭園を見学、最後に食品サンプル体験までさせていただいた。



このエクスカーションは今回初めてだったが、参加した日研生は全員楽しかったと口をそろえていた。学内に留まらない経験の機会を、それもできれば岐阜大学だからこそその経験の機会を、できるだけ学生には与えたいと思う。今後も郡上八幡国際友好協会をはじめとした地域のご協力を得ながら、岐阜大学ならではの事業を展開したい。

6.2 郡上踊りワークショップ ～浴衣を着て郡上踊りをおどろう！～

留学生センターは、サマースクール（受入）のホームステイを含む郡上プログラム、日本語・日本文化研修留学生の郡上エクスカーション等で、郡上市には大変お世話になっている。岐阜地域との結びつきをより一層強固に、大切にしたいと昨年度初めて企画した「郡上踊りワークショップ」を、今年度も5月に開催した。今年度は、例年6月に開催している「能楽ワークショップ」（83ページ参照）と合わせて、「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ（郡上踊りと能楽） ～踊って、謡って、体験して～」と題し、岐阜大学活性化経費（教育）に採択され、同事業の一部として開催した（申請者：留学生センター長守富寛教授）。

講師には、昨年度同様、郡上踊り口明方お囃子会会長の遠藤光生氏と、アシスタントとして郡上八幡博覧館の粥川寛美氏をお願いした。参加者全員の浴衣の着付には、美濃市「せびあ会」にご協力いただいた。

同ワークショップは、2013年5月12日（水）13：30～15：00、岐阜大学柳戸会館1階ホールにて開催した。開催に先立ち、12：30～13：30に浴衣の着付をしたが、昨年度より男性



の参加者が多く、せびあ会に持参いただいた男性用浴衣が足りなくなる事態となった。浴衣が着られなかった学生には申し訳なかったが、こちらの想定以上の参加者があったのは、嬉しい誤算である。日本語・日本文化研修留学生、日本社会文化プログラム学生、日本語研修コース履修生等、総勢約60名が「かわさき」「春駒」の踊りの輪

を作った。

今年度は二回目ということもあり、講師の先生方も工夫を凝らし、ワークショップの最後には、コンテスト形式で踊りの上手な三名を表彰するというサプライズまでして下さった。いつものことながら、大学内部の者だけではできないことを、地域の方にさせていただき、大学が地域に支えられていると実感する。

浴衣を着て大喜びで写真を取り合い、真剣にしかし楽しく郡上踊りを習う学生の姿を見ると、このワークショップも毎年定着させたいと強く思う。今後も地域の方々のご協力を賜れればと思っている。

6.3 岐阜大学サマースクール（受入）

岐阜大学サマースクール（受入）は、国際戦略本部が掌握する全学事業であるが、留学生センターが実際の運営を担当している。今年度は、1988年度の開始から数えて、26回目の実施となった。参加者は、ルンド大学（スウェーデン）から17名、木浦大学（韓国）から3名、ソウル科学技術大学（韓国）から1名、計20名を迎えた。ソウル科学技術大学からは、2011・2012年度に参加がなかったが、今年度復活したことは喜ばしい。また、木浦大学参加者については、先方大学でこのサマースクールが単位認定されることになったの

も、参加学生にとって良いニュースであった(ルンド大学は、以前から単位認定している)。日程は、8週間コース(6月3日(月)～7月24日(水))および4週間コース(6月26日(水)～24日(水))であった。

今年度の本プログラムの8週間コースは、独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の平成25年度留学生交流支援制度(短期受入れ)奨学金に採択され、各学生に大いに益した。

実施の詳細については、昨年度に引き続き、留学生センターホームページにて報告している。参照されたい。(ホームページアドレス：http://www1.gifu-u.ac.jp/~isc/jp/international/summer_school/)

6.4 留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ ～見て、聞いて、体験して～

留学生センターが運営に携わっている岐阜大学サマースクール(受入)では、2005年度より日本事情講義の一つとして、観世流シテ方味方團先生・田茂井廣道先生をお招きして能の講義・実演をお願いしていた。大変楽しくかつ有意義な講義であるため、2010年度より、広く岐阜大学の全学生を対象としたワークショップとして開催している。昨年度、一昨年度は単独で「留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ～見て、聞いて、体験して～」として実施したが、今年度は「郡上踊りワークショップ」(81ページ参照)と合わせて、「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ(郡上踊りと能楽)～踊って、謡って、体験して～」と題し、活性化経費(教育)に採択され、同事業として実施した(申請者：留学生センター長守富寛教授)。地域文化である郡上踊りと、日本古来の代表的な伝統文化である能楽の両者を体験できるプログラムであることが、評価されたものと考えている。

今年度の同ワークショップは、2013年6月19日(水)13:30～15:00、岐阜大学柳戸会館1階集会ホールにて開催した。ここ2年間利用していた医学部記念会館は、他事業で借りることができず、やむを得ず広さにはあまり恵まれていない柳戸会館を使うこととなった。参加者は、受付簿によると、サマースクール(受入)8週間コース参加学生17名を含む留学生53名、日本人学生15名、教職員11名、合計79名であった。

会場である柳戸会館の狭さを心配したが、舞台の設置場所は高さを工夫することにより、思ったほどの窮屈感はなく、手の届くところに講師がいるという身近な雰囲気醸し出されたのはある意味良かったかと思うほどであった。しかし、本事業に限らず、何かにつけて場所の確保に苦勞するのが留学生センターである。根本的な解決策を粘り強く模索していくしかないだろう。

講師の味方先生と田茂井先生は、毎年度マイナーチェンジを加えながらよりよいワーク



ショップの提供に努めてくださるが、今年度は、能楽で用いられる楽器の体験をより楽しく深くして下さり、また能装束の着付でも新しい装束をお持ちくださった。1時間半のワークショップ終了後も、片付けをする先生方のそばで、装束の模様や能面の表現などについて質問を浴びせる学生がいた。一度のワークショップで能楽が分かるはずもないが、そのきっかけは作ることが

できたかもしれないと思うと嬉しい。2005年度にサマースクール（受入）ではじめてこのワークショップ（当初はサマースクール（受入）の日本事情講義の一環）は、来年度10回目を迎える。10年という歴史を持つものとして、今後も大切に継続していきたい。

参加者アンケート集計結果（抄出）（※原アンケート用紙は日本語・英語併記）

1. あなたは留学生ですか、日本人学生ですか。

留学生 45 日本人学生 6 その他 0

2. 今回のワークショップについて、どこで知りましたか。

授業で 22 ポスター 9 留学生センターホームページ 2
岐阜大学留学生センターからのメール 1 AIMS-Gifu 0
くちコミ 7 その他 11

3. このワークショップに参加する前に、能を観たことがありましたか。

見たことがある 8 見たことがない 43

4. ワークショップの中で、何がおもしろかったですか。(複数回答可)

舞 26 講師の話 28 謡 22
所作(動き) 19 面 33 楽器 30 着付 30

5. 全体として、このワークショップはどうでしたか。

とても良かった 35 良かった15 ふつう 0
悪かった 0 とても悪かった 0

7. 岐阜大学留学生センター・フォーラム 「日韓教育交流の軌跡」

7.1 開催趣旨

数年前までの韓流ブームから一転、現在、日韓関係が急速に冷え込んでいる。歴史学という学問において、時間の捉え方は個別テーマによって多様だが、たとえば3段階の時間幅に分け、(1)長期的な時間の幅（自然環境・地理的な時間）、(2)中期的な時間の幅（社会的・経済的・文化的な時間）、(3)短期的な時間の幅（政治決定・出来事の時間）を考慮することが重要である、とも考えられている。日本と韓国、隣国としての長い交流の歴史を有する両国関係は、このような長期的・中期的・短期的な時間の幅をふまえ、さらに「大きな歴史」（国家間交流）と「小さな歴史」（民間交流）の層として理解する必要もあるだろう。現在の状況はまず基本的に、短期的な時間の幅で「大きな歴史」の枠組みの中で生じているもの、と考えておきたい。

本日は「日韓教育交流の軌跡」という主テーマを掲げ、大学間学術交流協定を結んでいる韓国・木浦大学から朴賛基先生をお迎えし、また、本日のテーマに造詣の深い埼玉県庁県民生活部国際課・椎橋宗利先生にご出席いただき、これに留学生センター・太田孝子教授が加わって、それぞれの留学体験、あるいは調査研究を通じて得た日韓交流の教育的な側面（「小さな歴史」）について、歴史的新事実を掘り起こしていただく。

第1講演者の太田孝子先生は、教育史を専門としていて、韓国併合時代の高等女学校に学んだ朝鮮人学生たちの実態とその後の人生について、精力的に調査研究を進めている。本日は「若き日の内地留学、新女性たちの知の獲得」のテーマで、内地・日本の高等女学校で学んだ朝鮮人学生たちの動向、学生たちが、何を学び、何を考え、その後どのような人生行路を辿ったのか、オーラル・ヒストリーの手法による新事実を提供してもらう予定である。

第2講演者の朴賛基先生は、1980年代後半から1990年代にかけて、日本の大学院で日本文学を学び、帰国後は木浦大学日語日文学科で教育と研究にあたっておられる（研究テーマは、江戸時代に朝鮮から日本に派遣された朝鮮通信使）。本日は「若き日の日本留学、体験的事実からの思考」のテーマで、激動期の韓国から日本への留学をどのように決意し、何を学び、何を考え、帰国後は留学経験をどのように活かしているのか、率直にお話いただく。

第3講演者の椎橋宗利先生は、大学・大学院で古代美術史を専攻され、朴先生とは逆に、日本から激動期の韓国へ留学し、その後外務省専門調査員などの仕事で都合10年の長きにわたって韓国に滞在したという、当時としては希有な経歴をお持ちの方で、その調査は古

代美術史のみならず韓国現代史にも及ぶ専門家である。本日は「若き日の韓国調査、激動の時代に遭遇して」のテーマで、留学で何を学び、激動期の韓国で何を考え、それは現在の仕事とどのように関連しているのか、具体的にお話いただく。

本日の3人の講演は、太田先生の韓国併合時代を起点に、朴先生・椎橋先生と時代を下り、いっぽう、調査研究のテーマの視点からは、やはり太田先生を起点に、朴先生の朝鮮通信使、椎橋先生の古代美術史へと時代を遡っていく。なお、講演後の意見交換・質疑応答の時間には、岐阜大学から木浦大学へ留学した岩田紗代子さんと、逆に木浦大学から岐阜大学に現在留学しているコ・ミギョンさんの話、つまり現役学生の文字通り「若き日の」現実を語ってもらう予定である。本日の講演が、ご来会の皆様の、今後の日韓関係を考える一つの素材となれば、と願っている。

(岐阜大学留学生センター・森田晃一)

7.2 プログラム

留学生センター・フォーラム 「日韓教育交流の軌跡」

【日時】2014年2月11日(火・祝) 14:00~16:30

【場所】岐阜大学サテライトキャンパス

【講演】「若き日の内地留学：新女性たちの知の獲得」(太田孝子、留学生センター)

「若き日の日本留学：体験的事実からの思考」(朴賛基、木浦大学)

「若き日の韓国調査：激動の時代に遭遇して」(椎橋宗利、埼玉県庁)

【共催】岐阜大学国際戦略本部

【後援】岐阜県、同教育委員会、岐阜市、同教育委員会、各務原市、同教育委員会、
(公財)岐阜県国際交流センター

7.3 講演概要

若き日の内地留学：新女性たちの知の獲得

太田孝子(岐阜大学・留学生センター教授)

日本の統治下(1910~1945年)にあった朝鮮は当時「外地」と呼ばれ、そこから近代的教育を受けるために「内地」日本へ留学する女子学生が出現した。後に各界各層で指導的役割を果たす新女性たちが誕生したのである。

専門学校以上の教育機関に留学するための必須条件は6年制の普通学校(日本の小学校に相当)を卒業することであったが、普通学校は義務教育ではなく、女子の就学率は1934

年でも11.6%にすぎない。生活難や入学難、学校数の不足に加え、男児の就学が優先されたことが低就学率の要因である。

卒業後4年制女子高等普通学校（後、高等女学校）に進学する女子はさらに少なく、女子高等普通学校の卒業生たちは特別意識を持ち、この時点ですでに「エリート」「新女性」と呼ばれた。初等教育課程を終えた女子1,000人のうち中等教育課程へ進んだ女子は46人、高等教育課程へ進んだ女子は3人、内地留学をした女子は1人という割合である（1936年）。内地留学は教育ピラミッドの頂点に位置したのである。

最も多くの留学生が在籍した学校は女子美術専門学校（107人）、次いで帝国女子専門学校（83人）、同志社女子専門学校（82人）、日本女子体育専門学校（80人）の順である。いずれも、初等・中等教員の資格が取得でき、総督府からの許可が得やすい学校であった。東京女子医学専門学校（61人）への留学生も多かったが、医療分野で活躍した婦人宣教師の影響により、医者が女性の専門職として認識されていたからである。卒業後、留学生たちは、近代化の匂いと人々の好奇心を満たしてくれる土産話を携えて出身地に戻ってきたが、多くは教員になり「留学生」を再生産する役割を担った。

「鴻嬉寮」は1940年、李王妃方子によって東京市渋谷区若木町の李王職長官邸に朝鮮人女子留学生のために創設された学生寮である。15名ほどの寮生たちは李王家から物心両面にわたる支援を受けた。以下に述べる二人も、鴻嬉寮の寮生ということで模範にならなくてはという気持ちと、国を代表しているという自負心を持ちながら留学生活を送った。

崔恵淑（1924～）は、淑明高女時代に歴史の担任の影響を受け、東京女高師に留学した。4年制高女卒の崔にとって女高師での学生生活は生易しいものではなく、特に英語が重荷になった。亡国の悲しみを常に感じ、考え込むことが多かったが、結局、学業を全うすることにより故国に尽くすことが最善の道であり賢明な選択である、と考え努力を続けた。半年間の繰り上げ卒業後、高等女学校等で教員生活を続けたが、夫が思想犯の嫌疑で連行されるという事件に遭遇、一念発起して夜間大学院に入り、大学教授の資格証を得たのは息子が大学に入学した年であった。その後、大学で20年にわたり世界文化史を担当したが、学びに没頭し続けた生涯であった。



孫戸妍（1923～2003）は、父が早大留学中に東京で誕生、住居近くの江戸川にちなんで命名された。そのため東京留学を当然と考え、帝国女専の家事科に進んだ。しかし、話し方やアクセントから出身地を察した級友たちは孫から離れていき、入学早々悩みの日々が続いた。最も困ったのは和裁の授業であっ

た。その悩みを吹き飛ばすかのように、孫は鴻嬉寮の顧問枅富照子による短歌の教えに没頭し、さらには枅富の師匠である佐佐木信綱の指導も受けた。佐佐木は「途中でやめるな、日本人の歌の真似をするな」とアドバイスし、応援している。後年、孫は日本の大学院に再入学して万葉集や古典文学の研究を深めた。和歌との出会いにより、国境を越えた人間の普遍的な喜怒哀楽を詠み続ける生涯へと誘われたのであった。

留学生たちが帰朝後に担った役割は、①独立運動や女性運動のリーダーとなっただけでなく、その周辺に集う女性たちを啓蒙し男女同権や女性の社会進出等の新思潮を伝播した、②「日本」「日本文化」を持ち帰ることによって、文化の先導者として周囲に影響を与えた、③多様な分野の専門家として社会に進出し、モデル（模範）として大きな意味をもった、④日本を知る者として常に日本を気にかけてながら社会に存在し、日本との交流を持ち続けた、ことであったと考える。

若き日の日本留学：体験的事実からの思考

朴賛基（木浦大学・人文科学大学教授）

木浦大学と岐阜大学は、2008年2月26日に学術交流協定を結んで以来、教員の交流及び交換留学生の派遣、国際シンポジウムの開催等、6年余りの間に様々活発な交流が行われてきた。今後も、より発展的な両大学の交流を期待しながら、私も努力していきたく思う。

さて、これから私の28年も前の若き日の日本留学体験を顧みたく思う。まず、私の留学生生活を時期的に分けると、大きく3つに分けることができる。

最初は1986年9月から1988年3月までで、日本の生活に適応する時期でもある。東京学芸大学大学院の研究生という身分で訪日し、学問的にも、経済的にも大変苦しい日々を送った時期である。その苦しい出来事を一々列挙することはできないが、いくつか取り上げると、成田空港から武蔵小金井までタクシーに乗ってきた後、運転手の料金請求額に驚いたこと、寒い冬に暖房がなく炬燵一つで寒さを凌ぐつもりで、炬燵を立てて眠って、火事になるところで目が覚めてびっくり仰天したこと、暑い夏部屋にエアコンがなく、公園で晩まで過ごしたこと等々、実に貧乏の生活であった。

次は1988年4月から1990年3月までで、大学院修士課程に入学し奨学金をもらうようになり、比較的安定した時期である。1990年3月東京学芸大学大学院に修士学位請求論文『朝鮮通信使と歌舞伎』を提出し、学位を取得した私は、その後現在まで、江戸時代の朝鮮通信使と日本文学との関係について研究活動を行ってきている。その間には、塾でアルバイトをしたり、教会で同時通訳をしたりしながら、日本の生活に慣れていった時期でもある。

また、最後の1990年4月から1994年3月までは、日本の生活を整理して次の段階に入る



準備をする跳躍期である。就職のことを考え、絶えず業績を出さなければならないという重圧感に押されながら、過ごした時期である。そのせいか病気になり、救急車で運ばれる羽目になった。でも、病気だからといって何もせずにはいられなかった。手術の後、直ちに病院で博士学位論文の作成に取り掛かり、提出することができた。その間、日本で

の出来事は勿論のこと、私の人生の中で一番波乱の多い時期である。

というわけで、1995年3月木浦大学の専任講師となった私は、以後2001年に『江戸時代の朝鮮通信使と歌舞伎』（韓国宝庫社）という著書を出版し、これは韓国学術院選定の学術優秀図書に選ばれた。恩師の故小池正胤先生を中心とする、日本近世文学研究会「叢」の会に参加するようになってから研究の方向を決めたことであり、多大な教示を提供してくれた会員の皆様に深謝したい。

また、それに勇気づけられ、2006年には『江戸時代の朝鮮通信使と日本文学』（臨川書店）の出版に至ったのである。これは、韓・日交流史の在り方を再照明することによって、両国の相互理解増進に寄与したいという願いを込めたものである。

そこで私は、今までやってきたこのような学問的知識を活かして、韓・日の交流を通して貢献できるものはないのか、というところに着目した。それは、韓・日青少年交流の在り方を新しく作っていかなければならない、ということである。私は、2012年度と2013年度の2回にわたって、青少年教育施設を活用した国際交流事業（文部科学省委託事業）—海は人をつなぐ—に韓国の11の大学から19名の大学生を引率して参加した。日本から参加した17名の大学生と共同生活をしながら、環境問題、国際交流などについて交流の輪を広げる機会でもあった。この行事の目的は、韓国の学生と日本の学生・市民がフィールドワーク、文化紹介等を通して環境問題とお互いの文化について理解を深めるということである。フィールドワークは、島根県、兵庫県、京都府、福井県の海を北上しながら、対馬海流によって大陸から流されてきた漂着ゴミの回収を中心とした、海浜清掃作業を行ったりもする。

今後このような韓・日青少年交流を通して、それぞれの文化や歴史について見聞を深めるとともに、次世代リーダーの育成を目指し、交流の輪を広げていくことに尽力したい。

若き日の韓国調査：激動の時代に遭遇して

椎橋宗利（埼玉県庁県民生活部主幹）

私は、1986～87年に美術史研究のため韓国に留学し、延世大学語学堂で韓国語を学びながら、現地の研究者、寺院・史跡を訪ね調査した。当時の韓国は、政治の民主化を求める反政府運動のまっただ中にあり、激しいデモが起こっていた。1979年の朴正熙大統領暗殺事件、軍によるクーデター、全斗煥政権の樹立に続くこの80年代は、韓国社会が大きく変化した激動の時代と言っても過言ではない（86年にはソウル・アジア大会、88年にはソウル・オリンピックの開催もあった）。

私が韓国留学を決意した理由は、大学で7世紀から8世紀の古代美術を学び、日本の古代美術を理解するには中国や朝鮮半島の美術も学んでおかなければならない、と考えたことによる。つまり、日本古代の仏像を東アジアの大きな歴史の中でとらえなければ、との思いが強くなったのである。すでに大学4年のとき、初の韓国訪問を実施していたが、当時は、韓国の地方を一人で旅する日本人は少なく、韓国語も話せなかったので現地の人たちから誤解の目で見られ、銃を突きつけられるなど怖い目にもあった。しかし、韓国各地の仏像と文化財をまわる旅は、私に東アジアの歴史と美術の、国や地域ごとの特異性を教えてくれた。その後、まず韓国語を学ぼうと思い、1984年にNHK ラジオで放送が始まったハングル講座を受講するようになり、また、オリンピックを控えて韓国関連の書籍も出版されるようになって、それらを読んで韓国への関心を高めていたのである。

1986年3月に大学院修士課程を修了すると、いよいよ長期の韓国留学を現実のものとするべく準備を整えた。中国へ留学する人は多かったが、まだまだ韓国へ行く人は少なく、「何で韓国に行くのか？ 行って何を学ぶのか？ 帰って来てからどうするのか？」などと聞かれもしたが、指導教授から「せっかくの機会だから、ぜひ留学して、言葉や韓国の美術を勉強して来なさい。そして朝鮮半島の気候風土や四季を感じて来なさい」「古代には日本から百済や隋、唐に渡り、高官になった日本人も多い、日本以外で活躍することも視野に入れてみてはどうか」と励ましの言葉をもらい、韓国へと飛び立った。

貯金を叩いて私費留学で延世大学語学堂に入学したが、当時は語学学校を併設している大学は延世大学くらいだった。韓国人学生とともに暮らす下宿生活は、生活習慣の相違に驚きの連続だった。韓国語の授業は1日4時間、午前のみで午後は特別授業が開講されていた。韓国人で日本語を学ぶ学生たちとは、互いに会話を教え合っていたが、日本語学習が就職に直結する韓国人たちの学習意欲には、刺激されることも多かった。

留学の思い出は数々ある。今でも強烈に覚えているのは催涙ガスの、単に煙たいのではなく、身体の湿った部分がヒリヒリと痛くなる感覚である。激しいデモの時は、教室内にもガスが漂い、食堂では学生運動家によるアジ演説にも遭遇した。



対日感情も人や世代によりさまざまで、画一的なものではなかった。概して、幼少期や青春時代を通して戦前の状況や戦後の社会変化、日本と日本人のことを体験的によく知っている世代は、日本の良い面も悪い面も知り、過去の歴史を教訓にしたいと考えているようだった。それに対して戦後生まれの世代は、日本には自由主義陣営の一員として北朝鮮と

対峙している韓国への理解が足りないとし、日本に対して厳しい意見を持つ一方、日本の製品や経済成長は見習うべきであるという意見も併せ持ち、「侮蔑と尊敬が共存する」ような思考を抱いていた（また民主化を遂げた1980年代以降の世代は、日本の統治時代に対する体験のない観念的な教育を受けた若い世代と言える）。

語学の学習が進み論文も執筆できた1987年にいったん帰国し、指導教授を助けて朝鮮半島の古代美術に関する著作を出版することができたが、これは留学の具体的成果となった。その後、韓国の日本大使館に専門調査員として採用され、1989年8月にソウルに行き、政治部に配属された（新聞から日本に関する記事を選び、日本語に翻訳する仕事）。勤務中には、生卵をぶつけられたり、火炎ビンを投げ込まれたり、狂言切腹に出会ったり、日韓外交の最前線で刺激に満ちた毎日だった。その後、文化広報の仕事に転じて4年間、次に自治体の交流・協力を行う自治体国際化協会ソウル事務所に勤務するようになり、都合8年間をソウルで過ごして現在に至っている。

「激動の時代に遭遇して」と題したが、当時の韓国は、日本の教育を受け日本語を話す世代、戦後に教育を受けたハンゲル世代、それ以降の世代とさまざまな世代が混在していて、多様な日本への感情があり、社会も民主化に向かう混沌としたまさしく激動の時代だった。その混沌とした時代に思い切って留学したからこそ、さまざまな世代の人と出会うことができた。彼らの思考を知り、そこから得た経験は自分の視野を広げることに役立った。その経験は、古代美術研究や大使館勤務、そして現在の自治体勤務に活かしていると思う。その意味で、留学当時にお世話になった韓国と日本の人たちに、今でも深く感謝している。

8. 留学生センター交流ラウンジの利用について

平成24年4月、留学生センターに「国際交流ラウンジ」が設置され、2年が経過した。日本人学生ラウンジチューターの活動も2年目に入り、今年度は前期9名、後期12名が配置され、ラウンジでの活動や留学生支援を担ってくれた。継続して担当しているチューターが多く、新しく加わったチューターの指導役も務めてくれている。

このラウンジでは、チューターによる日本語学習支援のほか、配備されている教育用パソコン、プリンター、大型ディスプレイを活用した、学習・情報収集の場として多様な活動が展開されている。ラウンジでは飲食も許可されており（ゴミは持ち帰りが原則）、ラウンジで昼食を取りながら日本人学生と留学生が談笑する和やかな場面がみられる。

6・7月のサマースクール開講中は、参加学生の多数がこのラウンジで昼食を取ったり、パソコンを使って日本語の学習や調べものをしたり、日本人学生と交流するなど、ラウンジはいつも盛況であった。夏の暑さが厳しい中、クラス終了から帰路のスクールバスの発車時間までの間、ラウンジで思い思いのスタイルでくつろぐ学生も多かった。また、後述の「七夕祭り」のイベントではサマースクールの学生も多数参加し、日本人学生だけでなく、他国からの留学生とも交流を深めていた。

チューター活動時以外でも、このラウンジは様々な用途で利用されている。サマースクール（派遣）説明会、サマースクール（受入）チューター説明会、サマースクール歓迎会（8週間コース）、日本語研修コースガイダンス、日本語・日本文化研修コース学生（日研生）のゼミや個人チューターの指導等々、多目的に活用された。また後期は、図書館の改築工事のため国際戦略本部事業である「イングリッシュ・ラウンジ」がこのラウンジで開催された。開催回数は8回、参加者は延べ110人であった。

チューターの企画による留学生向けのイベントも開催された。平成25年7月6日（水）に「日本の七夕祭り」、同26年1月15日（水）には昨年度に続き「NEW YEARS PARTY」の行事が行われた。七夕祭りでは、墨と筆を使って日本語で願い事を書いた短冊を笹の葉に結び付けたり、折り紙を折ったりするなど、日本人学生と留学生との交流が図られた。また「NEW YEARS PARTY」では、お正月の遊びであるカルタ取り、福笑い、百人一首（坊主めくり）、書初めを行った。書道に興味を持つ留学生が多く、慣れない筆をうまく使いこなし、好きな漢字や言葉を書いていた。いずれも日本文化の一端を知る機会となり、また日本人学生と留学生との交流の場となった。

なお、設置以降のラウンジ利用状況は次表のとおりである。

ラウンジ利用状況（平成24年度、25年度）

年度	前期配置期間・人数	後期配置期間・人数	合計
24	5月28日～8月3日 310人	11月10日～2月7日 558人	868人
25	4月28日～8月2日 420人	11月10日～2月7日 333人	753人

*チューター配置時のみ。他の時間帯は含まない。また人数には日本人学生を含む

今年度（平成25年度）前期の利用者数は前年と大差はないが、後期の利用者数は前年に比べるとかなり少なかった。今冬の寒さが例年より厳しかったことが影響して、ラウンジを訪れる留学生が少なかったのかもしれない。また、日本語研修コース等の授業は、水曜日・金曜日は午後から授業がないので、ラウンジの利用が期待されるが、実際には他の曜日に比して利用者が少ない。日本語クラスがない日はサークルやアルバイト等の活動に参加しているからだろうか。今後の利用状況にも注目し、有効なラウンジチューターの配置を考え、活発な交流が行われるラウンジを目指していきたい。

ラウンジチューター



七夕まつり



新春イベント「NEW YEARS PARTY」



資料 1

岐阜大学外国人留学生数

平成25年10月1日 現在

学部 区分	教育研究科 教育学部		地域科学部 地域科学研究科		医学研究科 医学部		工学研究科 工学部		応用生物科学 研究科 応用生物科学部		連合農学 研究科		連合獣医学 研究科		連合創薬 医療情報研究科		流域圏科学 研究センター		生命科学総合 研究支援センター		総合情報 メディアセンター		留学生 センター		計	合 計					
	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費			国 費	私 費			
在籍身分																															
学部																															
大学院 (修士課程)																															
大学院 (博士課程)																															
研究生 (学部)																															
研究生 (大学院)																															
科目等履修生																															
特別聴講学生																															
特別研究生																															
短期特定課題受託研修生																															
日本語・日本文化研修生																															
その他																															
小計	5	11			42	2	14	8	35	83	3	30	7	1	28	15	6	6	1	5					7	7	48	42	238	328	
	3	7			31	1	8	1	14	30	2	15	6	1	13	1	4	1	1	1					6	6	4	20	15	122	157
合計	16	10	42	31	16	9	26	45	126	33	36	27	5	2	6	12	9							14	10						

網掛は、女子を内数で示す
政府派遣留学生には、県費留学生を含む

資料 2

第34期 日本語研修コース（集中）修了者名簿

クラス	学生氏名	国籍	受入学部	指導教員	身分
集中A	チョウウケン ZHANG JIAN (張 健)	中国	教育学部	辻 泰秀	研究生
集中A	シメイケン SHI MINGJUN (史 明珺)	中国	工学部	王 志剛	研究生
集中A	シムパンスキナターシャ キャサリン SHEPANSKI NATASHA KATHERINE	オーストラリア	地域科学部	牧 秀樹	協定校の特別聴講学生
集中A	ジョゼ マヌエル ソアレス デ アウラジョ JOSE MANUEL SOARES DE ARAUJO	東ティモール	工学部	吉田 弘樹	研究生
集中A	チョウエイセイ ZHAO YONGSHENG (趙 永生)	中国	工学部	王 志剛	研究生
集中A	テイセイ CHENG SHENG (程 聖)	中国	工学部	伊藤 聡	研究生
集中A	パンチャンビン PAN CHANGBIN (潘 昌濱)	中国	応用生物科学研究科	土井 守	修士課程
集中B	ボロウラ BAOLURI (宝 陸日)	中国	地域科学部	山崎 仁朗	研究生
集中B	シュウホン ZHOU HONG (周 鴻)	中国	工学部	出村 嘉史	研究生
集中B	フリオ アルフォンソ アルムニア フエルテス JULIO ALFONSO ALMUNIA FUERTES	スペイン	応用生物科学部	村瀬 哲磨	研究生
集中B	リネイ LI NING (李 寧)	中国	応用生物科学部	前澤 重禮	研究生
集中C	フクシュン FU CHUN (福 春)	中国	地域科学部	野原 仁	研究生
集中C	ファジャル スリヤントロ FAJAR SURYANTORO	インドネシア	地域科学部	林 正子	研究生
集中C	チョウフン JUNFENG ZHANG (張 浚鋒)	中国	工学部	王 志剛	研究生
集中C	ゴートゥー NGO THI THU	ベトナム	工学研究科	田中 雅宏	博士課程
集中C	ゴウネ GENG NING (耿 寧)	中国	連合創薬医療情報研究科	稲垣 直樹	博士課程
集中C	センジュリー SEN JULIE	オーストラリア	地域科学部	笠井 千勢	協定校の特別聴講学生
集中D	ホウシュウコウ BAO SHU GUANG (包 曙光)	中国	教育学部	小林 一貴	研究生
集中D	チョウエイ ZHAO YING (趙 穎)	中国	地域科学部	野原 仁	研究生
集中D	ヨウシャウワン YANG XIAOYUN (楊 筱筠)	中国	地域科学部	野原 仁	研究生
集中D	オウキョウカ WANG XIAOHUA (汪 曉華)	中国	地域科学研究科	有本 信昭	修士課程

第35期 日本語研修コース（集中）修了者名簿

集中A

クラス	学生氏名	国籍	受入学部	指導教員	身分
集中A	INTHAVONG, SENGDAO <small>インタウオン・センタオ</small>	ラオス	教育学研究科	巽 徹	教員研修留学生
集中A	NAVARRO MELVIN MANGILIT <small>ナバロメルビンマンガリッド</small>	フィリピン	教育学研究科	巽 徹	研究生
集中A	HAN MEI (韓 梅) <small>ハンメイ</small>	中国	工学部	高橋 康宏	研究生
集中A	TIAN YE (田 野) <small>タン</small>	中国	工学部	横田 康成	研究生
集中A	WANG XUANPENG (汪 宣鹏) <small>オウセンケウ</small>	中国	応用生物科学部	西津 貴久	研究生
集中A	FARRAH FADHILLAH HANUM <small>ファラファディラハナム</small>	インドネシア	流域圏科学研究センター	李 富生	研究生
集中A	SHAO HUIJUAN (邵 慧娟) <small>ショフイジュアン</small>	中国	流域圏科学研究センター	李 富生	研究生
集中A	FENG WENZHUO (馮 文卓) <small>フエンワンジュオ</small>	中国	流域圏科学研究センター	李 富生	研究生
集中B	ZHANG JIAN (張 健) <small>チャウケン</small>	中国	教育学部	辻 泰秀	研究生
集中B	SHEPANSKI NATASHA KATHERINE <small>シェパンスキナターシャキャタリン</small>	オーストラリア	地域科学部	牧 秀樹	協定校の特別聴講学生
集中B	SHI MINGJUN (史 明珺) <small>シメーケン</small>	中国	応用生物科学部	清水 英良	研究生
集中C	JOHANNES ANDRE <small>ヨハネスアンドレ</small>	ドイツ	教育学部	山田 敏弘	協定校の特別聴講(研究)学生
集中C	LIU YANING (劉 雅寧) <small>リュウガネ</small>	中国	地域科学部	橋本 永貢子	研究生
集中C	WU JIACHEN (呉 家晨) <small>ゴカシエン</small>	中国	工学部	川崎 晴久	研究生
集中C	ZHOU HONG (周 鴻) <small>シュウコウ</small>	中国	工学部	出村 嘉史	研究生
集中C	LU WENHAO (魯 文浩) <small>ロブンコウ</small>	中国	応用生物科学部	岩橋 均	研究生
集中C	QI GEQI (奇 格奇) <small>キカクキ</small>	中国	流域圏科学研究センター	李 富生	研究生
集中C	KIM HYEJIN <small>キムヘジン</small>	韓国	地域科学部	高木 和美	協定校の特別聴講学生
集中D	SEN JULIE <small>センジュリー</small>	オーストラリア	地域科学部	笠井 千勢	協定校の特別聴講学生
集中D	SUN TIAN (孫 田) <small>ソンテン</small>	中国	地域科学部	ラッセル・ジョン・ゴードン	協定校の特別聴講学生
集中D	JUNFENG ZHANG (張 浚鋒) <small>チョウジュンファン</small>	中国	工学部	王 志剛	研究生

第12期 日本語・日本文化研修コース修了者名簿

学生氏名	国籍
フュン クリストファー (HUYNH CHRISTIFER CHI DUONG)	スウェーデン
孫 瑾 (SUN JIN)	中国
姚 瑶 (YAO YAO)	中国
林 瑜佳 (LIN YUJIA)	中国
余 丹尼 (IU DANIEL)	中国
マーンコソル コラパン (MANKOSOL KORAPAN)	タイ
クスワン パークプーム (KUSUWAN PHARKPOOM)	タイ
金 民愛 (KIM MINAE)	韓国
尹 ミレ (YUN MIRAE)	韓国
ダン ティ タイン トゥイ (DANG THUY THI THAMH)	ベトナム

日本社会文化プログラム 修了者名簿

第12期 (2012年度後期～2013年度前期)

学生氏名	国籍	受入学部	指導教員
フェアチャイルド シェイアン FAIRCHILD CHEYENNE ROSE	アメリカ	留学生センター	吉成 祐子
レナール コートニー RENNER COURTNEY DAWN	アメリカ	留学生センター	橋本 慎吾
レナール カイリー RENNER KYLIE FAITH	アメリカ	留学生センター	橋本 慎吾
ハンセヨン (韓 細栄) HAN SEYEONG	韓国	留学生センター	土谷 桃子

第13期 (2013年度前期～2013年度後期)

ラ コウ ヨウ LUO XINGYAO	中国	留学生センター	土谷 桃子
------------------------	----	---------	-------

岐阜大学留学生センター紀要 2013

執筆者

太田孝子	留学生センター教授
田辺淳子	留学生センター非常勤講師
吉成祐子	留学生センター准教授
六郷明美	留学生センター非常勤講師

編集委員

竹内豊英	留学生センター長（編集委員長）
太田孝子	留学生センター教授
森田晃一	留学生センター教授
橋本慎吾	留学生センター准教授
土谷桃子	留学生センター准教授
吉成祐子	留学生センター准教授

●編集後記

今号から論文編に「授業報告」というカテゴリーを設けることになりました。数学期間担当した日本語技能科目について、まとめの報告を行なうものです。会話、読解、聴解、作文などの授業は担当者によって学習レベルにあった様々な工夫がなされています。同じ科目を担当するからといって、毎学期同じことを繰り返しているわけではなく、学生が違えば授業のねらいや目標、活動内容も臨機応変に対応しなければなりません。先学期の経験を活かしてより良い授業に何が必要なのか、何をしてきたのかを、執筆者には振り返る機会に、読者には授業活動の参考になればと思います。

岐阜大学留学生センター紀要 2013

2014年6月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学留学生センター
責任者 竹内豊英

印刷所 西濃印刷株式会社
岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the International Student Center
Gifu University
2013

Preface : TAKEUCHI Toyohide.....	1
1. Articles	
OHTA Takako Research on Korean Female Students Studying the Main Islands of Japan during the Japanese Colonization of Korea (IV)	3
2. Research Notes	
TANABE Junko Consideration on Intermediate Conversation Class Whose Majority is Research Students and Graduate Students: from Preceding Research and Case Study	17
3. Class Reports	
YOSHINARI Yuko A Class Report of “Composition A” for Novice Japanese Learners	29
ROKUGO Akemi A Class Report of “Reading Comprehension C” for Intermediate Japanese Learners.....	39
4. Annual Report (2013.4-2014.3)	

Published by
The International Student Center
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan